

夢幻の世界ファントム

# ファントム・ローズ

秋月あきら

## ダブル

### Cacel 失踪

物語には必ず、はじまりがある。僕はそう信じている。

でも、一つの物語でも個人個人の、はじまりはみんな違うんじゃないかって思う。

そして、終わり方もみんな違うと思う。

僕は明らかに違っていた。そして、今でも腑に落ちない。

もしかしたら、物語と同じで世界というものは一人一人に存在しているのかもしれない。少なくとも、あいつはそう言っていた。

これから話すのは僕の、はじまり、それを覚えていて欲しい。

僕の名前は春日涼。僕が生まれた夏の日がやけに寒かったからそんな名前が付いたと聞かされている。

僕は私立六道学園高等部に通う二年生で、クラスでは平凡に過ごしてきたと思う。髪は染めてないから黒で、身長は一七四センチ、自分ではどこにでもいるような男だと思っているけど、人から見たら僕はどう映るんだろう？

そんな僕にも彼女がいる。同じクラスの椎名アスカ。付き合い合

いだったのが中三の二期期だったから、付き合って二年になる。僕らはいつものように歩いて学校から帰宅していた。

「あのさ、また、誰かいなくなっただって」

横を歩くアスカを僕は不安な表情で見つめた。

「また、なんだ……怖いよね。わたしは涼がいなくなっちゃったらって考えると怖くて……」

同じ気持ちだった。僕も彼女がいなくなるのが怖い。でも、それもありえる話だ。

沈黙しながら曲がり角を曲がると、そこにはテレビカメラを構えた男とマイクを持った女の人が立っていた。

事件の取材に来た報道陣だ。

「少し、お話を聞かせてもらってもよろしいでしょうか？」

マイクを向けられた僕はアスカの手を引っ張ってこの場から逃げた。学校から取材に答えると言われてはいるけど、僕は事件のことを取材する報道陣が嫌だった。部外者に立ち入って欲しくない。

僕らが逃げると報道陣は追っては来ない。そのくらいの道徳心はあるんだと思う。

少し歩いたところでアスカが僕の顔を見つめた。

「あのね、昨日テレビ見てたら、うちのクラスの男子が事件のことしゃべってた」

「誰だよそいつ？」

「モザイクかかってて声も違ったけど、絶対あれは大崎くんだと思うんだ」

「まったく、あいつなに考えんだよ」

行方不明だけじゃなくて、人が死んでるっていうのに……。目立ちたがり屋の大崎が取材に答える映像が頭に浮かぶ。でも、そう言えば今朝あいつ、先生に呼び出されていた。たぶん取材に答えた件で呼び出されたんだと、今になって納得した。

今、学校では謎の失踪事件が流行っている。流行ってるという言い方は正しくないかもしれないけど、とにかく多発していることは確かだった。そのため、僕ら学生は多くの行動を規制されてしまっている。

最初のうちはただの家出だと思われ、いなくなる生徒の数が増えるに連れて、何か大きな事件に巻き込まれたのではないかという話になった。

消えた生徒は女子が多くて、優等生と言われていた生徒や将来有望と言われていた生徒ばかりが消えた。

僕が考え事をしてしていると、アスカが顔を覗き込んできた。

「大丈夫？」

「うん、ちょっと考え事」

「事件のこと？」

「帰って来ても亡くなってるから、みんな……」

それが怖い。それこそがこの事件の恐怖を一層あおるものだった。

ある日突然、消えた生徒たちが数日経って帰って来た。その人たちが今までどこで何をしていたのか、事件に關してのことだけは彼らに聞いても答えがあやふやでまともな答えが返って

こなかった。けれど、そんなことよりも消えた人たちが帰って来たという事実の方が大事で、失踪事件は表面上はただの家出として扱われてしまった。

一時は生徒が帰って来たことによって平穏が訪れた——最初のうちは。

帰って来た生徒たちは時間が経つにつれて精神異常をきたしていき、やがては普通の生活ができなくなり、そして、みんな異常な突然死や自殺をしてしまった。もう、家出事件ではなくなった。

警察も動いているみたいだけど、捜査の方はあまり進んでいないらしい。まあ、それも仕方ないと思う。死亡した生徒たちはみんな証拠や証言から他殺された訳ではないっていう結論が出されている。

それで、結局死んだ生徒たちは世間一般に公表している情報ではストレスがどうかってことになって未だ事件は闇の中。けれど、そんなことを生徒たちが信じられるはずもなく、学校を休んでいる生徒たちが急増してしまった。

最初はただの家出程度としか思っていないくて、自分とは無関係だと思っていた事件が、日を追うごとに大きくなっていき、最終的にはこんなにも大きな事件になってしまった。

そして、生徒たちがまた消えはじめている。まだ事件は近くにある。

不安な表情をしている僕に再びアスカが優しく声をあけてくれた。

「怖いのはわたしも同じだけど、近くに涼がいてくれれば大丈夫だよ。それに内緒の話なんだけど――」

そう言ってアスカは急に小声で話しはじめた。

「あのね、〈クラブ・ダブルB〉って知ってる？」

「いや、知らないけど、なにそれ？」

「簡単に言うと悩み事を話し合って解決してくれるクラブかな。まだ、わたしは数回しか参加したことないけど、嘘みたいに悩み事が消えちゃって、中には願い事を叶えてもらった人もいるんだよ」

「それってさあ、新興宗教みたいじゃない？　なんかそういうのって信用できないし、アスカには関わって欲しくないな」

「大丈夫だよ、放課後生徒で集まって集みたいのしてるだけだし」

生徒の集まりと聞いて少しは安心した気もしたが、やっぱり怪しげでアスカがそれに参加していると思うと不安でたまらない。

「ねえ涼、明日の放課後わたしと一緒に行かない？」

「その〈クラブ・ダブルB〉に？」

「うん、放課後学校のある教室で集会があるの。それでね、明日わたし、やっと正式な会員にもらえるんだ」

「会員？」

「そう、〈クラブ・ダブルB〉の正式会員は〈ミラーズ〉っていうんだよ。〈ミラーズ〉になると、願い事を叶えてもらえる

よくなるの、ねっ、すごいでしょ？」

「あ、うん」

嬉しそうに話すアスカに何も言えなかった。

やがて、アスカの住むマンションが見えてきて、僕らは別れることになった。

「じゃあね涼！ また、明日。放課後空けといてね」

「うん、わかった」

笑顔で手を振るアスカに僕も笑顔で返した。だが、この時はまだ、僕自身が事件の渦中に投げ込まれるなんて思ってもみなかった。

この時すでに物語ははじまっていた。そう、これが僕の、はじまり、だった。

その日、僕はひとりで学校に登校した。アスカがいつもの待ち合わせの場所にいなかったからだ。

しばらく待ち合わせの場所で待ったのちに、ケータイで電話をしたがアスカに繋がらなかった。風邪でもひいたのだろうと、その時は思っ、僕はそのまま学校に登校することにした。だが、まさか学校であんな話を聞かされるなんて思っ、て見なかった。

「昨晚、うちのクラスの椎名アスカさんが突然姿を消してしまいました。心当たりのある人は私に連絡するように」

担任はそう言っ、て黙り込んだ。

教師も生徒も神経質になっ、ていて、できればこれ以上事件に

巻き込まれたくない。しかし、たかが一日とは言え、姿を消した生徒を放って置くことでどんな事件が起こるのか、考えただけでも頭が痛くなる。

僕にとつてアスカが姿を消したという事実は受け入れがたいものだった。

今日、放課後空けておいて言われたのに。そんな言葉を残したアスカがいなくなるはずがない。

昨日まで一緒に過ごしてきた人が消えるということに、最初は実感がわかかなかったけど、考えれば考えるほど僕の心は押しつぶされそうになる。

僕の心で渦巻くものはアスカを消えたという悲しみではなく、アスカが消えたという恐怖だった。

一日中アスカのことを考えていた僕は学校での出来事を覚えていない。授業で何をやったのか全く覚えていないし、誰と会ったり話したりしたかも覚えてない。唯一、覚えていることは報道陣に何を聞かれても話をしてはいけないということだけ。

アスカは何処へ行ってしまったんだろう？

やっぱり今、学校で起きている失踪事件と関係があるんだろうか？

生きているのか？

死んでいるのか？

考えれば考えるほど、不安を募る一方で、何がなんだかわからなくなってくる。

そして、気づいたら僕は夕暮れの中をひとり歩いていく。

いつの間にか学校は終わってしまっていたらしい。

いつもはアスカと一緒に帰ることが多い、この道。時にはひとりで帰ることもあったけど、それと今日は違う。

そういえば、最近は何とりで帰ることが多かったような気がする。もしかしたら、あの「クラブ・ダブルB」とかいうのにアスカが参加していたせいかもしれない。

重い足はいつに動かなくなり、僕はその場に立ち尽くしてしまつた。

もう、歩くことさえも嫌になつた。

頭が重く、クラクラと眩暈がする。気づけば辺りには知らない風景が広がっている。

薔薇の香りが僕の鼻を衝く。そう思った瞬間、視界が霞み、ひと気のない道路に人影が突然現れた。

道路の真ん中に「謎」って言葉が当てはまりすぎる人物がぼつんと立っている。その人物は黒いインバネスのような物を羽織り、腰よりも長い漆黒の髪を風に靡かせ、顔には白い仮面を付けていた。

僕は浮き世離れし過ぎた相手の格好を見て戸惑いを覚え、変質者かなにかだと最初は思った。

けれど、そいつの髪が風に遊ばれるたびに、薔薇の香が辺りに振りまかれた。その香を嗅いでいるうちに、目の前に立っている奴がどんな奴だろうと、どうでもよくなつてしまつた。

仮面の奥から声が響いた。

「私の名前はファントム・ローズ」

ファントム・ローズの声は男か女わからない声をしていた。僕が口を開くことを忘れているとファントム・ローズは話を続けた。

「君の彼女である椎名アスカを一刻も早く見つけたまえ、さもなくば大変なことになる」

「あ、あ、あの……」

言葉が浮かばなかった。聞きたいことは山ほどあるはずなのに、それが頭に浮かばない。

わけもわからず僕はファントム・ローズを見つめるが、ファントム・ローズは何も語らなかった。

そして、ファントム・ローズは一瞬にして姿を消した。それはまさに消失だった。

ファントム・ローズが消えた場所から薔薇の花びらが風に舞いながら空に上がっていった。

間の抜けた表情をして手を伸ばす格好をする僕はそのままだけなかった。目の前で起きた出来事が理解できない。人が目の前で消失してしまうなんて信じられない。

「何だったんだ今の？」

ようやく前に突き出した腕を下げた僕は息をついた。

見上げた空は朱色に染まっている。

僕が見た光景は幻影だったのか、——いや、本当に幻だったのかもしれない。

薔薇の匂いが微かに残っている。

椎名アスカを探すこと、それが今の僕にできること。手を拱

いて不安に駆られるのは嫌だ。

何が何でもアスカを僕の手で見つけなくていけない、そう  
いう気がした。

翌日、僕は学校でさっそく事件についての聞き込みをすることにした。

僕は人脈がある方ではないし、それに加えてみんな事件について話しながらなかった。けれど、僕は粘り強くアスカの友達に話を聞いているうちに、あの名前が出てきた。

——〈クラブ・ダブルB〉。

事件のことを聞いて回っているうちに、消えた生徒たちが何らかの悩みを抱えていて〈クラブ・ダブルB〉について詳しく知りがついていたことがわかった。

放課後にどこかの教室に集まって活動しているらしい学校非公認のクラブ。

〈クラブ・ダブルB〉の正式会員は〈ミラーズ〉と呼ばれ、その人たちが生徒にクラブのことを普及させたり勧誘したりしているらしい。という噂しかわからなかった。

〈クラブ・ダブルB〉については噂の範囲を出ず、友達に聞いたとか、友達の友達に聞いたとか、〈クラブ・ダブルB〉と関わっている人に行き当たることは結局なかった。

僕の中にある〈クラブ・ダブルB〉の有力な情報はアスカ本人が集会に出ているということ。

いろいろと調べていくうちに、消えた生徒たちと〈クラブ・ダブルB〉が無関係じゃないような気がしてきた。そして、

へクラブ・ダブルBを重点的に調べていくうちに、僕と同じように事件について調べている二人組みの女子生徒がいることがわかった。

一人目の名前は椎風渚しいななみという一年生の女の子らしい。もうひとり話を聞いたのが一年生だったためだと思う、『あの、綺麗でクールそうな先輩』としかわからなかった。

放課後になり、僕はすぐに椎風渚という子のクラスに行くことにした。

教えてもらったクラスは103教室で、僕は廊下を走って向かった。急いで来た甲斐もあって、103教室の中では生徒たちが座って先生の話を聞いている。これなら先に帰られてしまいう心配もない。

廊下の壁に寄りかかりながら待っていると、103教室から生徒たちが流れ出て来た。

僕は生徒の流れに逆らって、狭い隙間を掻い潜りながら教室に入り、少し大きめの声で言った。

「椎風渚さんは居ますか？」

すると、数人の女子生徒たちが僕の顔を見てざわめき出した。今まで席に座って友達と話していた女子生徒のひとりが急に立ち上がり、少し顔を紅くして僕の側に駆け寄って来た。

違和感のない茶髪をツインテールにして、楕円形のレンズの下側だけに銀色のフレームの付いた眼鏡をかけた小柄な女子生徒。その子は僕の前まで来ると、僕の制服についている校章の色を確かめながら言った。

「先輩ですよね……あたしに何か用ですか？」

うちの学校では校章の色で学年が分けられている。だから彼女は僕の校章を見て、僕が先輩であることを確認したんだと思う。

彼女の友達らしい人から野次が飛んで来た。

「渚、その人あんたの彼氏？」

「ち、違うってば！」

この学校では普通、生徒たちは他学年の教室に行くことはあまりない。だから、たまに行くときと注目を浴びてしまうし、それが異性の呼び出しだった場合は今みたいにかかわれてしまうことが多い。

椎風渚は僕の腕を掴んで走り出した。こういう行動をすると余計に疑われるような気もしたけど、僕は何の抵抗もせずに、彼女に引つ張られるままにどこかに連れて行かれようとしている。

そんな僕らの光景を見て、生徒たちが何かを言っている。聞き取れなかったけど内容は察しがつく。

椎風渚に引きずられるままに、僕は普段生徒たちにあまり使われることのない、学校の隅にある階段まで連れてこられた。

少し息を切らしている椎風渚が階段に座るのを見て、僕も何気なく彼女の横に腰を下ろした。

しばらく僕が椎風渚の顔を見てみると、彼女は息を整えて首を傾げながら口を開いた。

「えーと、まず先輩の名前と用件、それからあー、好きなタイ

プの女性は？」

「えっ!? 好きなタイプ?」

戸惑いの表情を浮かべた僕を見て椎風渚は少し吹き出して笑った。

「ジョーダンですよ、先輩カッコよかったから、ちょっとからかっただけです。それからあたしのことは渚って呼んで下さい」

「ああ、うん、僕の名前は春日涼、消えた恋人を探してる。君が、事件〴〵のことを調べてるって聞いたから……」

事件と聞いて渚はすぐに察しがついたらしく、消えそうな声で呟いた。

「あたしは友達が消えちゃって……」

何だから雰囲気が一気に暗くなって、沈黙がまるで黒い布のように僕らを包み込んでしまった。

渚をはじめて見て明るそうな子だなと思っただけ、今は二人で沈んでしまっただけで交わす言葉もない。

重々しい時間は長く感じられ、沈黙を破ってくれたのは渚のケータイの着信音だった。着信音の曲は今は流行のバンドの新曲だ。

渚はケータイのディスプレイ画面を見てから電話に出た。

「——今ですか……物理室近くの階段です……はい、わかりました」

ケータイを切った渚は笑顔を取り戻していて、僕の顔を見て元気な口調で話しかけてきた。

「あたしと一緒に事件を調べてくれてる先輩が今からここに来るそうです」

「ああ、うん」

渚と一緒に事件を調べている先輩。確か一年生が『あの、綺麗でクールそうな先輩』と言っていたから、僕と同じ、もしくは上の学年ということになる。

その、先輩という人物が現れるまで、僕らはたわいのない会話でその場を繋いだ。

「春日先輩ってどこに住んでるんですか？」

「学校から徒歩一〇分くらいかな」

「結構近いんですね、あたしんちはバスと徒歩で三〇分くらいかかるんですよ。あ、そうだ、今度学校帰りに先輩んち遊びに行つていいですか？」

「えっ、うち？」

「ええ、うっ、だめですかあ？ だったらカラオケ行きましょよ、あたし歌には自信アリですよ」

「僕はある程度得意じゃないかな……」

なんだか彼女に押され気味の会話だけど、沈黙するよりはよっぽどいいし、明るい口調で話しかけられると、僕の顔にも自然と笑みが零れていた。

しばらく話していると、階段を足音がして、すぐに僕らの前にある人物が姿を現した。

凜とした態度で腕組みをしながら立っている女子生徒。僕はこいつのことを知っていた。僕と同じクラスの鳴海愛だ。なるみまな

長身のスレンダーな身体の彼女は長い漆黒の髪と瞳を持ち、窓際でいつもひとりで本を読んでいた。頭はだいたい面白い顔は美人系だが、口調は男性口調でいつも不機嫌そうな顔をしている。

僕はクラスで鳴海愛の隣席だったけど、口を聞いたことは一度もなく、彼女は人を寄せ付けない雰囲気を持っていて、クラスでも孤立した存在だった。

その彼女の方から僕に話しかけてきた。

「春日涼だったか？」

「そうだよ」

相手の態度が無愛想だったせいとか、僕も悪い態度で返事を返してしまった。これでは喧嘩でもするみたいじゃないか。

鳴海愛は僕のことを不審の眼差しで上から見下ろしている。僕は鳴海愛となるべく視線を合わさないように下を向き、ふと横に座っている渚を見てある疑問が頭を過ぎった。

「二人ってどういう関係？」

この二人というか——鳴海愛にこの質問をしてみたかった。なぜなら、この二人が友達とは到底思えないからだ。いや、そもそも鳴海愛の友達がこの学校にいるなんてことが僕には考えられなかった。

僕は鳴海愛の顔を見た。——答えたくないのか、めんどくさいのかわからないけど、彼女は口を開こうとはしなかった。

すると、僕の横で声が出た。

「あたしたち、家が隣同士で昔から仲いいんですよ、ねえ愛ち

「やん」

「鳴海さんが、ちゃん、付けで……ぷっ」

こいつが、ちゃん、付けで呼ばれてるの聞いて僕は思わず吹き出してしまった。

鳴海愛に視線を向けると、彼女はいつでもいいって感じの表情をしていた。それを見た渚も思わず笑ってしまいながらこう言った。

「愛ちゃんあんな表情してるけど、実はチョー恥ずかしいんだよ、きつと……ぷっ」

渚は笑いがこみ上げて来るのを必死に口を押さえてこらえた。

鳴海愛がこんなに弄ばれるのはじめて見た。椎風渚と鳴海愛は本当に親しい間柄なんだなと思った。

鳴海愛は少し顔を赤らめながらも、いつも通りの機嫌が悪そうな表情で話を変えようとした。

「事件について君はどのくらい知ってるんだ？」

こう聞かれた僕は今まで調べたことなどを話して、渚たちが知らべたことなどを僕が聞いた。

〈クラブ・ダブルB〉が一種のオカルト集団らしいことが次第にわかってきた。神を信仰して儀式を執り行い、願いを叶えてもらう。

〈クラブ・ダブルB〉の正式会員である〈ミラーズ〉は神の使者で、悩み事を持っている人や願いを叶えて欲しい人の前に突然現れ、この学校のどこかにある教室に連れて行ってくれるらしい。そこで連れてこられた人は洗礼とかいうのを受けて

へミラーズ〉になるらしい。そうすれば願いが叶い、悩み事など綺麗さっぱり忘れてしまうらしい。

学校内でそんなことが行われているなんてとても信じられなかった。やっぱり噂は噂なのかもしれない。

それにへミラーズ〉って名前を知っていても、直接姿を見てという人は誰もいなかった。でも、アスカは……？

だけど、噂話が存在するということは、どこの誰が何の目的で噂を流したのだろうか？

話の最後まで僕の前で腕組みをして立っていた鳴海愛は窓から差し込む光を見た。

「すぐに暗くなる、もう帰ろう」

外はもう夕暮れに色に染まり、学校内にあまり生徒が残っていないことを確認した僕らは家に帰ることにした。

校門を出て、僕とは違う方向に歩き出す二人を見送ったあと、僕はひとりで家路に着いた。

日に日に沈む時間が早くなる太陽に背を向けて、僕はいつもの道を歩いていたつもりだった。けれど、気がつくとならない場所だった。

いつの間にか辺りは静寂に包まれ、生き物の気配がすうーつと消えたような気がした。

そして、またあの匂いがした。

薔薇の芳しい香り。この香りを嗅ぐと少し変な気分になる。しばらくして、あいつがまた僕の前に突然現れた。

僕は声を出そうとしたが出なかった。いや、出したいと思わ

なかつたから出なかつた。

黒衣を纏う仮面の人物——ファントム・ローズ。

仮面の奥から声が聞こえた。

「椎名アスカが帰って来た」

それだけを言つてファントム・ローズは消えようとした。

「待て、話がある！」

急いでファントム・ローズを呼び止めようとした。けれど、ファントム・ローズ消える。

ファントム・ローズは空間にゆっくりと染み込むように消えながら呟いた。

「人間というには目に頼り過ぎている。君は目で見えないモノを、見ることはできるか？」

最後まで消えずに残っていた白い「仮面」が不敵な笑みを浮かべたような気がした。そして、ファントム・ローズは消失した。

薔薇の香りが辺りに微かに残る。

ふと我に返つた僕の頭であの言葉が再生される。『椎名アスカが帰って来た』——その言葉は忘れていない。だけど、ファントム・ローズの声は今聞いたばかりだというのに漠然としか覚えていない。男か女の声かすら思い出せなかつた。

それにこんな不可思議な現象を普通のこととして受け止めてしまつていた自分に気付いた。なぜだろうか？

夕日を背にして僕は急いでアスカの住むマンションに向かつた。

エレベーターで九階まで登り、アスカの家に着いた僕はインターフォンを意味もなく力強く押ししてしまった。

インターフォンから女性の声が聞こえた。アスカの母親の声だ。

《どちら様でしょうか？》

「あの、春日ですけど、アスカさんが帰って来たって本当ですか？」

《……………》

何かすごく長い間があり、僕は玄関の前で心臓が弾けてしまっ  
いそうだった。

ゆっくりと玄関のドアが開かれる。そのドアを開けたのは他  
でもない、アスカ本人だった。

本当はこの時、もうアスカがどこにも行かないように強く強  
く抱きしめて放したくないと思った。でも、恥ずかしさが勝っ  
て結局僕はアスカのことを抱きしめられなかった。

アスカの部屋へと通された僕はカーペットの上に適当に腰を  
下ろした。腰を下ろしたというよりは安堵感で腰が抜けたとい  
う感じだったかもしれない。

部屋のドアを閉めた終えたアスカが目には涙を浮かべて僕を強  
く抱きしめた。

僕は突然のことに驚き、間抜けな顔をしてアスカの顔を凝視  
してしまった。

アスカは涙を流しながらも柔らかい笑顔を浮かべていた。僕

はこの笑顔を中心に消えないように強く焼き付けて大切にしようと誓った。

アスカの唇が静かに動いた。

「涼に会いたかった」

その言葉を聞いた僕はとにかくアスカのことを強く抱きしめた。アスカが消えないように……。もう二度と離さない。

それから僕らはしばらくそのままの格好のままだった。

どれくらい時間が経ったか覚えていないけど、いつの間にか僕らは離して会話をしていた。

「アスカが帰って来てくれてよかった」

他の失踪した生徒たちは少なくとも三日は帰ってこなかった。アスカはそれに比べて早く帰ってきた。そう考えると、多発している失踪事件とアスカは関わりないのではないかと、安堵感が湧いてくる。

しかし、アスカの表情は暗かった。

「覚えていないの、学校からの帰りに涼と別れてから記憶があやふやなの」

僕の気分は酷く重くなった。これでは今までの例と同じじゃないか。

恐る恐る僕は事件のことをアスカに尋ねた。

「アスカは自分でどこかに行ったの？ それとも誰かにさらわれたとか？」

アスカは何とも言えない表情をした。

「わからないの、涼と別れてから……。家に帰ろうと思ったんだ

けど、何かを思い出して学校に戻ったような気がするんだけど……」

僕はアスカの口から出る言葉一つ一つを熱心に暗記していくように聞き入った。

アスカの表情は明らかに曇っていた。何かを思い出したくても思い出せないような感じだ。

「それで、気付いたら家の前にいて……それで、家のドアを開けて中に入ったらお母さんがすごい顔して飛び出して来て、どこに行ってたのかとか聞かれて、そこでわたしが二日近くも自分が家に帰ってなかったことを知ったの」

「二日間のこと、本当に何も覚えてないの？」

アスカは僕の瞳を見つめたまま軽く頷いた。

「何も……、さっきまで警察の人が来ていろいろ聞かれたんだけど、わたし何も答えられなくて……」

悲しそうで苦しそうで、どんどん表情が暗くなっていくアスカを見ていたら、僕は何だかアスカに対してすごく酷いことをしてるんじゃないかって気になっていて、気付くと僕はアスカに意味もなく謝ってしまっていた。

「ごめん、何かごめん」

「何で涼が謝るの？」

「何か謝んなきゃいけないと思った」

アスカは不思議そうな顔をして僕を見つめて笑った。

「涼のそういうところ好きだよ」

その言葉を聞いた僕の体温は一気に急上昇した。

その場に居るのが恥ずかしくなって、時計を見ると時間もだいぶ遅くなっていたので、その勢いで家に帰ることにした。

「帰るよ、何かずっとここにいるの悪いような気がするから」

「うん、じゃあね」

「明日迎えに来るから一緒に学校行こう」

アスカは小さく頷いた。その顔は少し悲しそうとか寂しそうだった。

僕は一瞬ためらったが部屋の外に出た。

アスカの父親は今海外に出張中なので、僕はアスカの母親だけに軽くあいさつをするとアスカの家を後にした。

早歩きでマンションを出ると辺りは薄暗かった。

風が少し冷たく、空には星が瞬きはじめている。

道路を照らす蛍光灯が突然チカチカと点滅しはじめて、あいつが薔薇の香りとともに再び現れた。

僕には、仮面が少し不満そうな表情をしているように見えた。仮面がそんな表情をするはずもないのだけれど、僕はそれを見て腹が立って、意味もなくこいつを怒鳴りつけてしまった。

「今度は何の用だよ！」

ファントム・ローズは仮面を付けているせいか全く動じる様子が見えない。

「君はまだ事件について調べる気はあるのか？」

「アスカが帰って来たからもういいよ」

「それは要するに自分はどう無関係ということか？」

「そうだよ」

僕は確かに見た。仮面が不敵な笑みを浮かべたのを――。  
「この物語は終わっていない。君は好きな道を選ぶといい。しかし、自分の人生の選択権は自分にならないことが多い。それを覚えて起きたまえ」

そう言ってファントム・ローズはまたも消えた。

ファントム・ローズいた場所には薔薇の香と花びらが残っていた。

Case3 死

翌日の朝、僕はアスカを迎えに彼女の住むマンションに向かった。

アスカは僕のことをマンションの入り口で待っていてくれた。そして、僕が彼女に近づくと、うれしそうな顔をして駆け寄って来た。

「おはよ、涼」

「おはよ」

アスカが僕の顔を下から覗き込む。

「どうしたの涼？ 目の下くまできてるよ」

「ちよつと寝不足で」

実はちよつとどころじゃなかった。

全部ファントム・ローズのせいだ。あいつが変なことを言うから、僕はあの言葉とあの不敵な笑みが頭から離れなくてほとんど一睡もできなかった。

「大丈夫、涼？」

「あ、うん」

「本当に？」

「本当だよ」

嘘だった。僕はアスカに嘘付いた。はっきり言って平気じゃない。心身ともにどつと疲れていて、本当は学校なんか行きたくなかった。

それでも僕はアスカと一緒に学校に向かった。

たわいのない話をしてたら何時の間にか僕らは学校に着いて、気付いたときには教室にいた。前を同じ日常が戻ってきたような気がした。

教室に入った途端、アスカは女友達に連れて行かれてしまった。

僕は自分の席に付いてアスカたちの話に聞き耳を立てた。

みんなアスカのことを心配して『どうしたの?』とか、『だいじょぶだった』とか、『心配したんだから』とか口々に言っている。みんなアスカのことを本気で心配していたようだった。でも、もう心配することはない、アスカは帰ってきたのだから。

僕がアスカたちの話に聞き耳を立てていると、僕の前に鳴海愛が現れた。

「椎名帰って来たんだな」

「ああ」

「私たちが探してた相手も帰って来た」

「良かったじゃん」

鳴海愛は腕組みをして少し沈黙を置いたあと言った。

「私と渚はまだ事件について調べるが、春日はどうする?」

「僕はもういいよ、アスカが帰って来たし」

鳴海愛はいつも以上に不機嫌な顔をした。

「帰って来た生徒たちが、その後どうなったか知ってるだろ」

この言葉を聞いた僕はすごく腹が立って嫌な顔をして鳴海を睨みつけた。

「あれ見ろよ、そんなことあるわけないだろ！」

僕はアスカのことを指差した。しかし、鳴海愛は僕のことを鋭い目つきで睨みつけた。

「確かにみんな最初は普通だった、でも……」

『でも、みんな死んだ』って言いたいんだと思う。でも、鳴海愛はそれ以上何も言わないで自分の席に戻って行った。その姿は重たい影を背負っているように見えた。

僕もわかっている。でも、そんなこと考えたくもない。そんなことあるわけじゃないか。

やがて授業がはじまったが、僕は授業どころじゃない。あのファントム・ローズも鳴海愛も僕が考えないようにしていることを言ってくる。

不安で堪らない。また、アスカがいなくなってしまうなんて考えたくもない。けど、どうしても考えてしまう。

悶々と考え事をしているうちに学校はいつの間にか終わってしまった。

僕は一目散にアスカの手を引いて帰宅した。もう、絶対離さない。

帰り道、アスカは僕のことを心配そうな顔をして見つめていた。けれど、僕は口を開かなかった。

もう、何がなんだかわからない。

本当は僕がアスカのことを心配しなきゃいけないのに心配されてしまっている。けれど、アスカのことを心配するってことは、まるでアスカに何かが起こるようじゃないか。

悪いことは考えちゃいけない。アスカはすぐそこにいる。アスカはずっと僕の側にいるんだから、心配することなんてないじゃないか。

僕は僕に言い聞かせようとするが、どうしても不安が消えない。

次第に腹が立ってきて、怒鳴り散らしたい気分になってきた。過ぎ去って行く風景。時間が進んでしまうのが怖い。今ここで時間が止まってしまえば、永遠にアスカと一緒にいられるのに……。

「涼っ！」

少し大きな声で呼ばれて僕ははっとした。

僕の腕は後ろに引かれ、その先ではアスカが少し怒った表情を浮かべていた。

「もお、家に着いちゃったよ」

「えっ!？」

気がつくくと、もうそこはアスカのマンションの前だった。

顔を紅くしていたアスカの表情が和らぎ、彼女は元氣よく僕に手を振った。

「じゃあね、涼、また明日！」

「じゃあ」

僕は軽く右手を挙げた。

アスカが僕に眩しい笑顔を見せてくれた。そして、だんだんと姿が小さくなって行く。

次の日、僕は学校を寝坊で遅刻した。今まで溜まっていたモノが一気に来たんだと思う。

二時間目の英語の時間が終わる頃、僕は教室の後ろのドアから静かに入った。

みんなの視線が僕に集まった。僕は遅刻なんて滅多にしないのでちよつと恥ずかしかつた。

ネイティブアメリカンの英語教師に席に早く着くようにと言われて席に着き、授業の準備をしながら何気に後ろの方の席を見た。

僕は『あれっ?』と思った。

アスカの姿がない。学校を休んだんだろうか?

休み時間になり、僕は友達にアスカのことを聞くと、やっぱり学校を休んでいるらしい。しかも学校に無断で欠席をしているらしく、先生がアスカが何で学校を休んでいるのかを生徒にしつこく尋ねたらしい。あの事件の後だから先生たちも気が気じゃないんだと思う。

僕は不安な気持ちになった。そして、すぐにアスカのケータイに電話をかけてみたが繋がらない。メールも送ってみたが返事は返ってこなかった。

僕の不安は大きくなっていく。もしかしたら、アスカに何かあったのかもしれない。

恐れていたことが現実になったかもしれない。

今日もアスカに会えることを信じていた。けれど、それは見事に打ち砕かれた。

その後、僕は全く授業に集中できなかった。そして、時間がどんどん過ぎていき、四時間目の終わりのチャイムが鳴り、昼休みになった。

僕はどうかして早退できないかと、ずっと考えていた。

保健室に行つて、病気のフリをしようと考えたりしたが、僕は結局無断で早退することにした。

僕は荷持つを教室に置きっ放しにして、何食わぬ顔をして、下駄箱まで行き靴を取つた。

昼休みは外に無断で食事に行く生徒が多いため、たまに校門で先生が目を光らせて立っていることがある。まさにここ数日はそれだった。

僕がどうしようかと下駄箱で悩んでいると、後ろから突然声をかけられた。

「私も行く」

僕は心臓を直接握られたくらいドキッとしてしまった。けど、後ろに居たのが先生じゃなくて鳴海愛だったことを確認した僕はほっと胸を撫で下ろした。

「どうして鳴海さんがここに？」

「椎名の家に行くんだろ、だったら私もいつしよに行く」

「別にいいけど、学校サボって平気なの？」

僕はこの質問をした後にそれが愚問だったことを後悔した。

鳴海愛は成績こそ良いものの、学校での生活態度は悪い。無断欠席・無断早退はよくするし、一度だけ彼女が先生と激しい言い争いをしているのを僕は見たことがある。

でも、鳴海愛の成績は学年でトップだし、テストはいつも満点を取っていた。

うちの学校ではテストが終わるたびに成績の良い上位一〇名の名前が廊下に張り出される。だから学年のみんなは鳴海愛が頭がいいことを知っていたし、先生ならもちろん知らないハズがない。それに彼女は授業はよく欠席するけどギリギリ進級できるよう考えて欠席してようだった。だから、結局先生たちはあまり強く出ることができないみたいだった。

鳴海愛が自分の下駄箱から靴を取り出している所に僕は声をかけた。

「先生たちが見張ってるけど、どうやって外に出る？」

「この学校に熱血教師なんていないから大丈夫だ」

「はあ？ どういうこと？」

「あいつらはどうせ校門に立ってるだけで、他の所なんて見回りもしない。柵を越えて外に出ているよみんな」

そう言って歩きだした鳴海愛のあとを僕は付いて行った。

僕らは適当な所から、校舎の外に出て、そして柵を登った。

鳴海は意とも簡単に柵を登って外に出た。それを見た僕は慣れてるんだな、と思った。

今になって鳴海愛への興味が湧いてくる。他の生徒たちを逸脱する彼女は僕らとは根本的に違う。彼女が何をしてようと僕は驚かないと思う。

学校の外に出た僕らは迷うことなく一直線にアスカの家に向かった。

アスカの住むマンションは学校から歩いて数分の距離にある九階建てのマンションで、アスカの部屋は角部屋の901号室だった。

アスカの家の前まで来た僕はインターフォンを押した。——しかし、少し待っても何の反応もない。それが僕の不安を駆り立てる。

そして、鳴海がインターフォンを押した。でも、やっぱり反応がない。

鳴海はもう一度インターフォンを押した。すると今度はすぐにインターフォンから声が返って来た。

《どちら様でしょうか？》

アスカの母親の声だった。だけど、その声はすごく疲れているというか、何かに怯えているように聴こえた。

「アスカさんと同じクラスの鳴海と申します。アスカさんはご在宅でしょうか？」

玄関のドアが開きアスカの母親が現れた。

「アスカに何の用でしょうか？」

そう言うアスカの母親の顔は蒼ざめているように見えた。

鳴海は玄関に足を一步踏み入れてから返事を返した。

「今日から、一週間の間学校の授業が午前中で終わるという連絡と、アスカさんが学校を、無断で欠席したので担任の先生に様子を見てくるように頼まれました」

今の鳴海は完璧な、優等生さんだった。嘘が嘘と全く感じられない。

「二人ともわざわざわざわざありがとうね。アスカ、昨日の夜から高熱を出しちゃって、ずっと看病していて学校に連絡するの忘れてたわ」

鋭い眼差しをアスカの母親に向けた鳴海が突然とんでもないことを口走った。

「本当ですか？」

その言葉にアスカの母親は突然恐怖の形相をして鳴海のことをドアの外に押し出そうとした。だが、鳴海は逆にアスカの母親を押し倒して部屋の中に入った。

「アスカの部屋はどこだ？」

「そっちだ！」

僕はアスカの部屋を教えつつ鳴海の後を追った。

鳴海が部屋のドアの前で足を止めた。そして、ドアを力いっぱい激しく開けた。

部屋の奥にいたアスカがカーペットにへたり込みながら、僕らを指差して囁っている。その光景を見た僕は背筋が凍った。

僕はアスカに人間の狂気を見てしまった。

「りょうちゃん、まなちゃん、こんにちわあ〜」

アスカは幼児のようなしゃべり方をして、手を伸ばしながら床に平伏するように頭を下げて、勢いよく髪の毛を振り乱しながら頭を上げたあとに壊れた囁いを発した。

この場にアスカの母親が目から涙をぼろぼろと落としながら、取り乱したようすで現れた

「今日の朝からずっとこうで、お父さんは明日にはやっと帰っ

て来れるって言ってたけど、私どうしたらいいかわからなくて」

そう言ってアスカの母親は床にへたり込んだ。

僕はアスカに駆け寄って、肩を思いつき掴み揺さぶった。

「アスカ、どうしたんだ!？」

アスカは僕と目を合わせようとしないう。いや、違う僕のことなんてお構いなしで頭を揺らしながら天井を仰いでいた。

そして、アスカは僕の瞳を愛くるしい瞳で見つめ、突然僕を押し倒して身体を覆い被せ、僕の唇と自分の唇を重ね合わせて舌を口にねじ込んで来た。

僕は突然のことに驚き、アスカの身体を突き飛ばした。

アスカは僕のことを哀しそうな眼で見た。

「りょうちゃんはアスカのこと、きらいなの？」

そう言って、アスカはどこからか取り出したカッターナイフで自分の手首を切った。

その光景を見たアスカの母親は叫び、僕は言葉を失った。

この場で唯一冷静でいたのは鳴海愛だった。

「大丈夫だ、人間は普通に手首を切ったくらいじゃ死ねない」

鳴海は続けてアスカの母親に向かって言った。

「警察と病院に連絡します」

鳴海はアスカの母親の返事を聞かずにすぐに自分のケータイを取り出し、警察と病院に迅速に電話をかけた。

そして、呆然としている僕を邪魔だと言わんばかりに押し退けて、アスカの腕の怪我の応急手当をしようとしたのだが、ア

スカは鳴海の身体を思いつきり押し倒した。

鳴海が予想だにできなかった攻撃を受けて床に尻もちを付いた隙を狙ってアスカは開いていた窓から身を乗り出し、大声を出して啖いながら、空に羽ばたいた――。

羽ばたく寸前、アスカは僕のことをちらっと見て哀しそうな笑みを浮かべていた。

時間が止まり、僕の耳から音が消えた。

衝撃のあまり声すら出せなかった、現実かどうかすら認識できないうち、幻の中で起きたことのようにだ。

鳴海はすぐに窓の外を見下げて、厳しい表情をするところはつきり言った。

「助かる見込みは、絶対はない」

その言葉は僕の耳には届かなかった。

――数分後、ものすごいサイレンの音を立てながら警察と救急隊員が駆けつけて、事故現場は立ち入り禁止となり、事故と関わった僕ら三人は警察の取り調べを受けた。

僕とアスカの母親は何かを話せる状態じゃなかった。だから鳴海が警察と話をし、僕はただ頷いているだけだった。そのため、ちゃんとした取り調べは後日改めて行われることとなった。

しばらくして僕の母親が僕の身柄を引き取りに来た。鳴海の両親は二人とも海外にいて、彼女は一人暮らしをしているために引き取りに来る人がいないらしい。

僕は母親に付き添われながら、幻の中を歩いているようだった。

でも、マンションを出た途端に僕は現実の世界に還った。そして、母親の制止を振り切って無我夢中で走り出した。

とにかく、全てから逃げたかった。

恐ろしいことが起きた。

周りに建物がどんどん後ろに流れて行き、自分がどこにいるのかもわからない。

アスカは自分の前で死んだというのに僕は何もできなくて……。

ただ、見てることしかできなくて、悔しくて、哀しくて、どうしようもなく……僕は大切なものを失った。

胸が苦しくて、吐き気がする。嗚咽が止まらない。

頭がクラクラして、薔薇の香が風に乗ってやって来た。

辺りには誰もいない。そして、あいつはまた僕の目の前に現れた。

僕の気持ちがそうさせているのかもしれないけど、ファントム・ローズの「仮面」は哀しそうな顔をしているように見える。ファントム・ローズの声は静かに言った。

「過ぎたことならばいつでも考えることができる。しかし、人間は未来を生きる者だ。未来は過ぎてしまつては未来ではない、今考えるべき未来のことを考えたまえ。そうしなくてはまた過去に悩ませれる」

今の僕には何かを考える気力なんて少しもない。過ぎ去った

過去のことに押し潰されそうだ。

これから僕に何をしろっていうんだ。自分が無力なことを思い知らされた。僕には何もできない。

ファントム・ローズの言った次の言葉に僕は自分の耳を疑った。

「還って来れるかはわからないが、椎名アスカはまだ生きていると思われろ」

「アスカが生きてる!? 莫迦言うなアスカは僕の目の前で飛び降りたんだ!」

「真実を知りたいのなら自分で調べるといい。自分の真実は自分にしか見つけられない、それは最終的に判断を下すのは自分自信だからだ」

そう言ったファントム・ローズの身体がその形を維持したまま全て薔薇の花びらに入れ替わり、上空に渦を巻きながら飛翔して行った。

ものすごい薔薇の香が辺りに立ち込めた。

僕は少し落ち着きを取り戻し、そして、改めて決意した。事件の謎と真実は僕の目で見極めると。

なぜだかわからないけど、ファントム・ローズの言う通りアスカが生きているような気がする。そう願いたいだけかもしれないけど、少しでも希望があるならそれにすがりたい。

このまま家に帰るべきか迷った。けれど、これ以上両親に心配させるのもよくないと思った。

学校を無断で欠席して、結果的にあんなことになってしまっ

た。明日から僕も先生に目を付けられてしまうだろう。

明日学校に行くべきだろうか？

学校に行つて鳴海に会わなきゃいけない。彼女なら僕の力になつてくれるに違いない。そういえば、彼女のケータイ番号聞いてなかった、失敗したな。

ゆっくり、歩きながら僕は事件を一から整理してみたけど、結局どれも確証がない。

そもそも消えた生徒たちは全員無関係で自発的に姿を消したのかもしれないし、全部ただの偶然だったのかもしれない。

でも、僕にはそうとは考えられない。『消えた人たち』・〈クラブ・ダブルB〉・〈ミラーズ〉、そして、ファントム・ローズ。全ては繋がっていると僕は思う。そう考えてしまうのが普通だと思う。

そんなことを考えていたら、知つてる道に辿り着いた。家はもうすぐだ。

自宅の前には母親が立っていた。母親は心配が張り裂けてしまったような顔をして、僕を出迎えた。

両親は僕に何も言わなかった。言えなかったのかもしれない。家族に会話はなかった。無言で夕食を取り、誰もしゃべろうとはしなかった。そして、時間だけが過ぎていった。

夜の深さが増し僕はベッドに入り、目を閉じた――。

暗闇が僕の心と身体を蝕んで行くような感じに囚われながら、僕は深い闇の中へ堕ちて行つた……。

次の日、僕は学校に着くとすぐに鳴海愛を探した。

彼女はいつも通り、僕よりも早く学校にいて、席に座って『多重世界』なんて名前の本を読んでいた。

彼女は僕に気付くと声をかけて来た。

「おはよう」

「ああ、おはよう」

鳴海は僕のことを『それで用件は何だ?』といった感じで、本から目を覗かせるように見た。僕はなぜだか慌ててしまつてすぐに返事を返した。

「事件についてまた調べようと思つて……」

「昼休みに渚と会うから、君も来るといい」

そう言つて鳴海は本に目を戻した。

気付くと周りの人たちが僕らのことをちらちら見ていた。僕が鳴海愛と話しているのが珍しいのか、鳴海愛がクラスの人としゃべっているのが珍しいのか、どちらかだと思ふ。ちよつと前までは僕もそうだったからわかる。

僕は何食わぬ顔をしながら自分の席に着いた。

前だったら僕も鳴海愛がクラスの人としゃべっているのを物珍しく見てしまったかもしれない。でも、今は違う。鳴海愛のイメージは僕の中でだいぶ変わっていた。

昼休みになり、僕は鳴海に連れられて屋上に連れて行かれた。

屋上は昼休みになると、ここで昼食を取ろうとする生徒の姿をぼちぼち見かける。その中の一人に椎風渚を見つけた。

床に座っている渚はニコニコしながら僕らを手招きしている。僕はそれに答えて軽く右手を挙げた。

それに答えてか、渚はより一層の笑みを浮かべた。

「春日先輩こんにちわ」

「こんにちわ」

僕は相手の元気の良さに少し押されぎみにあいさつを返した。渚はすでに一人でお弁当を食べていた。そのお弁当が手作りのお弁当で見栄えも綺麗だったので僕は聞いて見た。

「これ、渚が作ったの？」

「はいそうですよお、あたし料理得意なんです」

「ふーん、いいねえ。僕はこれだよ」

と言って僕は地面に腰を下ろしながらコンビニの袋からおにぎりや二つとペットボトルに入った清涼飲料水を取り出して少し苦笑いをした。

それを見た渚が笑みを浮かべる。

「じゃあ明日、あたしが先輩のお弁当作って来てあげましょうか？」

僕は笑顔を浮かべて快くその申し出を受け取った。

「ありがとう、楽しみにしてるよ」

渚はうれしそうな顔して腕を捲るようなポーズをした。

「任せて下さい、腕によりをかけてたくさん作って来ますからね」

僕は笑いながら鳴海のことをチラッと見て言った。

「あれ、鳴海さんはお弁当食べないの？」

「昼は食べない」

スタイルとかを気にして食べないのかなと思ったけど、本当はどうなんだろう？

「どうして食べないの？」

「食べる理由がないから」

「はあ？」

僕は思わず首を傾げてしまった。『食べる理由がない』、お腹が空いてないってことなのか？

僕らの会話を聞いていた渚が、口にいったばいに詰めでいたご飯をごくと一気に飲み込んでから、横から口を出してきた。

「愛ちゃん、ダイエツトでもしてるの？」

「いや」

それもそうだ、鳴海の身長は僕と同じかちよつと下くらいで足がスラつとしていてやけに長い、別にこれならダイエツトしなくていいと思う。

渚は口に手を当ててもぐもぐしながら、何かをしゃべろうとした。

「愛……どう……うぐう……げほっ」

食べものを喉に詰まらせた渚の背中を鳴海が擦り、僕は未開封だったペットボトルの蓋を開けて彼女に差し出した。

渚はそれを受け取ると、五〇〇ミリリットルを一気に飲み干して、『はあはあ』と肩で息をした。そして一言。

「死ぬかと思っただあゝ」

その光景を見た僕は思わず笑ってしまつて、横を見ると鳴海が真っ赤な顔をして口に手を当てて軽く咳き込んでいるのが見えた。無理して笑いを堪えてるように僕には見える。

僕はこの時思った。鳴海愛はいつも無理してるんじゃないか？ っ。ワザと人を寄せ付けないようにしたり、何があつても冷静で、クールなフリをしているように今なら思える。

そんなことを考えていて、回りのことなどすっかり目に入つてなかつた時に、横から声がかかつて僕は少しドキッとした。

「春日先輩、聞いてましたか？」

「えっ、何を？」

どうやら、僕が考え事をしてた時に渚が何かをしゃべつたらしい。

「あたし、ヘクラブ・ダブルBの噂を流したの誰かなと思つて調べてみたんだけど……」

「私も誰だか何度も調べてみたが、毎回一人の女子生徒に行き着いた」

「じゃあ、その生徒に直接聞いてみたら？」

僕の発言を聞いた二人の表情は何とも言えない渋い表情だった。

「どうしたの二人とも？」

鳴海はいつも以上に機嫌の悪そうな顔して言った。

「彼女はもうすでに死んでいる」

二人が調べたって言うんだから彼女が噂を広めた張本人であ

るとは思うけど、彼女が噂を最初に流した人物であるとは断定はできない。

結局何も掴めないのかと思った時、渚が手を上げた。

「はい、はい。えいと、その女子生徒の名前は藤宮彩<sup>ふじみやあや</sup>、三年生で最近思いつめた表情をよくしていて、授業中に保健室に行くことが多かったらしいですよ、それである日突然別人のように元気になってそれからヘクラブ・ダブルBの噂を流すようになったみたいです」

僕はピンと来た。

「つまり、藤宮彩はヘクラブ・ダブルBによって悩みを解消されたって訳だね。それと、保健室によく行ってた言ってたよね？ この事件で最初に消えたのは保健室の水鏡紫影先生<sup>みずかがみしかげ</sup>だ！」

僕が声を張り上げると鳴海愛は不敵な笑みを浮かべた。

「そう、それに水鏡紫影はまだ死んでもいないし可笑しくなってもいない」

この言葉に渚が付け足した。

「だから、水鏡先生は警察の取り調べを何度も受けているらしいですよ」

生徒が多く姿を消して死亡したこの事件だが、最初の生徒が消える前に姿を消した学校関係者がいた。その人物こそが、事件ではじめに失踪した人物——水鏡紫影先生。

水鏡紫影は保健室の先生で、失踪したのちに帰ってきた。やはり、この先生の記憶もあやふやで事件について何も覚えてい

ないらしかった。

僕の中で事件の糸口が見えてきた。藤宮彩と水鏡紫影先生は（クラブ・ダブルB）と何らかの形で関わったに違いない、そして、水鏡紫影先生は今回の事件の鍵を握っているに違いないと。

渚はお弁当箱のフタを閉めてバッグの中に放り込むと、勢いよく立ち上がった。

「じゃあ、あたし水鏡先生について詳しく調べてきますね！」  
そう言って渚は元気に走って行った。

渚の姿が見えなくなった所で鳴海が遠い目をしてぼそりと呟いた。

「……強いな渚は」

「どういうこと？」

「渚の友達は二人居なくなつた。一人はもうすでに死んでいる、もう一人はこないだ帰つて来たがいつ可笑しくなるとも限らない」

「……………」

僕は言葉がみつからなくて……。なんだかみんなッフリッをしてるだけなんだと思つた。

「渚は人前では元氣なフリをしているが、私だけの前だと大声を出して泣くんだ。渚の悩みや悲しさが痛いほど私の胸に突き刺さる」

鳴海はすごく哀しそうな顔をしていた。

僕は何も言えず、鳴海の横顔をただずっと見つめいた。

昼休みが終わり、いつものように五時間目が終わり、六時間目は先生たちの臨時の職員会議とかで自習になった。そして、何時ものように学校が終わった。

帰りに先生が明日からしばらくの間学校が休みになることを告げ、生徒に早く帰るように促した。臨時の職員会議で急遽決まったらしいけど、なぜ学校が休みになるのかまでは説明はなかった。きつと事件が絡んでいるに違いないと僕は思わずにいらなかった。

今まで学校は消えた生徒たちとの関係を否定していた。たまたま学校の生徒が居なくなっただけで学校は無関係だと、だから大騒ぎになった後でも学校の授業は普通どおりに行われていた。でも、今回は何かがあったに違いない。

教室を出て行く生徒たちの顔はみんな不安で押し潰されそうな表情をしている。

そんなクラスメートの表情を見ると、鳴海が今まで僕が見ただ中で一番不機嫌そうで恐い顔をして僕に近づいて来た。

鳴海は僕の瞳を睨みながら、重たそうな口をゆっくりと開いた。

「……大変なことになったかもしれない」

「どうしたの？」

「渚のケータイに連絡がつかない」

普段の状況だったら、電源切つてるとか電波の届かない所にいるだけってことでそんなに気にもしないけど、今は状況が状

況だけに不安が積もる。

鳴海が重たそうに口を開いた。

「それにもう一つ」

「……………」

僕は思わず唾を飲み込んだ。

「これは職員室を盗聴してわかったんだが」

「盗聴!？」

声を張り上げてしまった僕に鳴海の激が飛ぶ。

「話を最後まで聞け！」

「う、うん」

「六時間目の職員会議を盗聴したんだが、どうやら水鏡紫影は被害者兼重要参考人から容疑者に変わったらしい。しかも、水鏡の行方が五時間目からわからない、そのため警察が血眼になって彼女を捜索しているみたいだ」

六時間目に鳴海を見た時、すごく厳しい表情をしてイヤホンを付けて音楽を聴いていると思ったら、まさかあれが盗聴をしていた何て夢にも思わなかった。それより何時の間に職員室なんか盗聴器なんて仕掛けたんだろう？

「とにかく、渚の教室に行ってみよう」

と僕が提案し、僕らは急いで渚の教室に足を運んだ。

渚の教室に着くと数人の女子生徒が深刻そうな顔をして話していた。その生徒たちは教室に入った僕らをいっせいに見た。

そして、一人の女子生徒が僕の顔を見て言った。

「渚の知り合いの先輩ですよね？」

僕は思い出した、確かこの前にこの教室に来た時、渚と話していた友達だ。

「そうだけど」

僕がそう言うとその子は酷く不安そうな顔をして言った。

「渚が五時間目から居なくなっちゃって……」

その言葉を聞いた鳴海が聞入れず大声で叫んだ。

「行くぞ涼！」

この時の鳴海は僕の見ただ中で一番感情的だった。

足早に教室を出て行く鳴海を僕は追いかけるようにして教室を後にした。

僕らは取り合えず、事件の鍵を握る水鏡紫影先生の自宅のマンションに行くことにした。だけど判り切っていたことだけど、水鏡先生は自宅には居なかった。

あきらめて帰ろうとした僕らにある男が呼び止めた。

「君たちちよつと話があるんだが」

男の風貌はスーツにネクタイの中年で少し疲れたような顔をしていたが、その瞳は獣が獲物を見据えるような鋭い目をしていた。

それに負けないぐらいの目で鳴海は男を見て言った。

「何者だ？」

男はそう言われるとスーツの内ポケットから警察手帳を出し僕らに見せ付けた。

「君たち水鏡紫影の居所の心当たりはないかい？」

「無い」

鳴海にそう言われた刑事は頭をポリポリとワザとらしく搔いた。

「そうか……。でも、事件の事を調べているなら、子供の出る幕じゃない」

と言ってニカッと口元が嫌な笑いを浮かべた。

鳴海は何も言わずに刑事の横を、擦り、抜けて行った。それを見た僕は刑事と視線をワザと合わせないようにして鳴海の後を追った。

鳴海の表情はどんどん不機嫌さを増していき、マンションから出て僕に話しかけた時の表情を見た僕は彼女に殺されるんじゃないかと思つたほどだった。

「涼にはこれから学校に行つて欲しい、全てはあそこで起こっている。私はこれから調べる事ができたから後は頼んだ」

そう言つて鳴海は僕の返事を待つ前に走つてどこかに行つてしまった。

行方不明になった生徒たちはみな、学校の中で行方不明になったと言われている。だから僕は思うんだ、今回の事件は学校を中心に蠢いているんじゃないかって。きっと、あそこに何かがある。

残された僕は鳴海に言われた通りに学校に行くことにした。

学校に着いた時にはもう夜の七時くらいで、いつもより早く校門は閉められて鍵が掛けられていた。

生徒も教師も今日は早く帰宅させられて、学校には人の気配

がなかった。

僕は辺りに人が居ない事いちよう確認して正門をよじ登ろうとした。だけど、運が悪かったのか僕は後ろから『おい！』と声をかけられてしまった。

僕は驚き後ろを見ると、あの時の刑事が立っていた。

僕は完全にしまったと思った。

「何してるんだ、まさか学校に忍び込む気じゃないだろうな？」

「……………」

僕は何も言わなかった。こんな状況で言い訳しても無駄だと思っただ。

「家まで送ってやるから、こっち来い」

僕は刑事に連れられるままに車の助手席に乗せられ、無理やり自宅まで送り届けて貰った。

玄関で僕と刑事を出迎えた母親は驚いた顔をした。当たり前だ、息子が刑事に家まで送って貰うなんて、何かあったと思うのが当然だから。

僕が何も言わずにいると、刑事が母親に向かって僕がこれ以上事件に首を突っ込まないようにと注意をして帰って行った。

僕はその後、母親に父親の前まで連れて行かれて二人にいろいろと注意された。

母親は頼むから危険なことはしないでと泣き落としをして、父親にはこっ酷く叱られた。そして、僕は学校がはじまるまでの間自宅から一步も出ちゃいけないと自宅謹慎命令を出された。

僕はそんなことに従うつもりなんて微塵もなかった。当たり前だ、僕にはしなくちゃいけないことがある。

深夜になり両親が寝静まったのを見計らって僕は家から抜け出すことを決意した。これから僕は学校に行く。

自分の部屋から出て、音を立てないように階段を下りて、玄関のドアをゆっくりと開けて外に出た。

音をなるべく立てないように玄関の鍵を掛け終えた僕は走り学校に急いで向かった。

静かな闇の中を僕は走って学校に向かっていた。

深夜に学校に侵入して僕は何を調べようとしているのか、自分でもわからない。けれど、行かなきゃいけない。

僕は何かと呼ばれている。

学校についた僕は今度はフェンスを登って学校内に侵入した。今度は運が良かったのか誰にも見つからずに学校に侵入することができた。だけど、問題はこれから校舎内にどうやって入るかだった。

どこかから校舎内に入ることができないかなと校舎の周りを歩いている僕の目にある人物の人影が飛び込んで来た。

——水鏡紫影先生だ！

僕は水鏡先生に気付かれないようにこっそりと後を追った。

すると、校舎の裏側に辿り着いた。

僕の心臓が激しく脈打つ。

水鏡先生は立ち止まり誰かを待っているようだった。そして、すぐに二つの人影がまるで闇の中から這い出したように水鏡先

生の前に現れた。

二つの影は同じ形をしていて、徐々に月明かりに照らされて色が付いていく。

僕は相手に見つからないように物影から目を凝らして三人を見た。

水鏡先生といふ二人の人物は同じ格好をしていて、そして、異様だった。あのファントム・ローズといい勝負かもしれない。真上から見ると、つばがひし形をした大きな帽子を被り、暗がりによくわからないけど恐らく色は白とクールブラウンを基調とした質素なドレス姿で首には鎖が巻き付けられ、手には銀色の金属の棒の先端に大きなリングが付いている杖のような物を持っている。そして、何よりも僕の目を引いたのは、目の部分に包帯のようにグルグル巻かれた布だった。

水鏡先生が謎の人物たちに何かを話しているけど、何を言っているのか良く聞き取れない。

「……捜査……女に……捕まるのも……だろう」

やっぱり何を言っているのかわからなかったけど、水鏡先生が謎の人物の名前をはっきりこう呼んだのはわかった。

「ミラーズ」

僕はその言葉を聞いた瞬間には身体が動いていて、もう三人の人物の前に飛び出してしまっていた。

僕が飛び出して来たのに驚いているようすの水鏡先生とへミラーズの動きが止まってしまっていた。

いや、違った。僕が飛び出して来て驚いて止まっているんじゃない。

水鏡先生たち同様に、それに気付いた僕は動きを止めてしまった。

薔薇の香だった。僕ら全員の動きを止めさせたの風に乗って運ばれて来た薔薇の香……水鏡先生たちもこの香に何かを感じ取り動きを止めたに違いない。

あいつが現れるに違いない。

月明かりだけが照らす夜の闇の中、怖ろしく白い仮面は確かに笑っていた。間違いない、ファントム・ローズだ。

ファントム・ローズは僕と水鏡先生の前に立ち、へミラーズのことを見ているようだった。

へミラーズの一人が月光を浴び、銀色に輝く杖を構えてファントム・ローズに襲い掛かった。

揺らめくファントム・ローズはどこからともなく一輪の赤薔薇を取り出すと、その匂いを嗅ぎ天に掲げた。

すると、ファントム・ローズの周りを無数の薔薇の花びらが竜巻のように舞い上がった。

美しくも荘厳な薔薇の花びらはへミラーズに向かって降り

注いだ。それはまるで血の雨のようで、薔薇の花びらは刃となり、〈ミラーズ〉の身体を容赦なく切り裂く。

激しく舞い散る紅に彩られた〈ミラーズ〉は地面に倒れ、そこにファントム・ローズは空かさず白薔薇をダーツのように投げつけた。

薔薇の花を突き刺された〈ミラーズ〉は口元を酷く苦痛に歪ませ、人の声とは思えぬほどの呻き声を張り上げた。すると、白かった薔薇の花が見る見るうちに紅く染まり、それと同時に〈ミラーズ〉の身体が枯れ木のように萎んでいき、衣服だけがその場に残され、その衣服さえも最期には砂になって舞い散った。

ファントム・ローズは〈ミラーズ〉の居た場所に残された一輪の真っ赤に染まった薔薇の花を拾い上げ匂いを嗅ぎ言った。

「やはり、人の血の匂いではないな」

僕は幻のような出来事を目の当たりにして、頭が真っ白になりかけた。でも、今ここで起きていることを見逃す訳にはいかない、事件の手がかりが目と鼻の先にあるのだから。

水鏡先生が大声で叫んだ。

「世界の調和を望まないファントム・ローズを殺してしまいなさい！」

僕が水鏡先生のいる方向を振り向くと、そこには六人の〈ミラーズ〉がいつの間にか集まっていた。

一人のミラーズを水鏡先生の横に残し、残り五人のミラーズが月光を浴び薔薇の匂いを嗅ぎながらたたずんでいるファント

ム・ローズに襲い掛かる。

ファントム・ローズは動こうとしない。そして、ミラーズたちがいつせいに杖を振り上げて飛び掛かるうとした時、薔薇を持つファントム・ローズの手がスナップを利かせるように動かされ、薔薇の花が鞭のようになり、撓り、蛇のようにならねった。鞭へと変化した薔薇の花が月下のもとで華麗に舞うファントム・ローズともに〈ミラーズ〉たちを打ちのめす。

弱まった〈ミラーズ〉に止めを刺すべく、五本の白薔薇が天に舞い上がり、槍の雨と化して〈ミラーズ〉の身体を貫いた。薔薇は紅く染まり、〈ミラーズ〉の身体は先ほどと同様に萎んでいき、衣服は砂と貸して消えて逝った。

白い仮面が不敵な笑みを浮かべる。

「世界のバランスを崩そうとしているのは、お前たちではないのか？」

手に持った薔薇をファントム・ローズは水鏡先生に付きつけた。しかし、水鏡先生は全く動じるようすを見せず、声を張り上げながら反論した。

「全ての人々の魂を一つの存在として、世界を一つのモノとして統合させるのよ。それこそが完璧な調和。悩みを持つ人々は他者と溶け合い、他人を知り、全てを知る。全てを知っているモノが悩むことなんてないでしょう？」

「人の悩みを強制的に他者が解決して何の意味がある？ 世界は一人一人に与えられている。自分の世界は自分自身が管理するべきなのではないか？」

水鏡先生がファントム・ローズの言葉聞いてせせら笑った。「そういうあなたこそ、その坊やの世界に首を突っ込み過ぎているんじゃないの？」

「私は迷える仔羊にきつかけを与えてるに過ぎない、最終的な判断は彼の決めることだ」

僕には二人が何を言っているのかさっぱり理解できなかった。魂や世界を一つにするとか、水鏡先生はいったい何をしようとしているのだろうか？

水鏡先生が残った一人の〈ミラーズ〉にファントム・ローズに襲い掛かるように命じて、その隙に彼女は闇の中へと逃げて行く。

ファントム・ローズは襲い掛かって来た〈ミラーズ〉を軽くあしらひ地面に叩きつけると、急いで水鏡先生の後を追って闇の中へと姿を消してしまった。

残された僕は動かずに地面に倒れこんでいる〈ミラーズ〉に近づいた。

〈ミラーズ〉とはいったい何者なんだろうか？

奇妙な服装と、そして何よりも僕が気になつていたのは目に巻かれている布だ。

〈ミラーズ〉の素顔を見てやろうと思った僕は、〈ミラーズ〉の顔の横にしゃがみ込み、巻かれている布を取ろうとした。布に恐る恐る触れようとしている僕の手が震える。そして、布に手を掛けたもののきつく巻かれていてなかなか取れない、仕方なく僕は力いっぱい強引に外した。

へミラーズ〉の素顔が露わになり、それを見た僕は愕然となり言葉を失った。

息を呑んだ。

信じられなかった。僕の目の前で死んだはずの椎名アスカの顔がそこにはあった。

目を閉じて無表情で気を失っていると思っていたへミラーズ〉が、突然目をかっと見開き不敵な笑みを浮かべた。

僕はその瞬間、頭を殴られたような激痛を覚え、その場で気を失ってしまった――。

薄明かりの中で頭をふらつかせながら僕は意識を取り戻した。手足が動かない。僕の口と手足は縛られていて、身体の自由は奪われてしまっていた。

部屋の明かりは数十本の蝋燭だけで薄暗く、部屋の大きさ、ましてやここがどこなのかなど見当もつかなかった。そもそもここはまだ学校内なのだろうか？

僕がそんなことを考えていると、目の前の闇から大勢のへミラーズ〉たちが浮かび上がってくるように現れた。そして、最後に水鏡先生が姿を現し、僕に向かって微笑んだ。

闇の奥から人を抱きかかえたへミラーズ〉が二人現れた。

一人目のへミラーズ〉が抱えているのは僕と同じ学校に通う三年生の先輩だ。委員会が同じで世話になった記憶がある。

そして、もうひとりのへミラーズ〉が抱きかかえていたのは、椎風渚だった！

やっぱり彼女はこいつらにさらわれていたんだ。

二人を抱きかかえた〈ミラーズ〉たちが僕の前を通り過ぎて行く。その〈ミラーズ〉の進む道の両脇には蠟燭が順々に灯って道を示していく。

そして、二人の〈ミラーズ〉の足が止まると同時に、眩い光を放ちながら人の全身を映せる大きさの古めかしい鏡が現れた。三年の先輩を抱きかかえていた〈ミラーズ〉が、先輩を鏡の前に降ろして鏡から離れると、先輩の身体がまるで糸で操られるような動きで立ち上がった。

最初は真っ黒で何も映し出されなかった鏡に徐々に先輩の全身が映し出されていく。

鏡を見ていた僕は何か不自然な感覚に襲われた。……あの鏡、逆さに映ってない！

鏡は普通、物が逆さに映るはずだ。でも、あの鏡は違った。鏡がカメラのフラッシュのような光を放ったと同時に先輩の身体が糸を切られた操り人形のように地面にぱたんと倒れた。だけど、鏡に映った先輩の姿は立ったままだ。

そして、何よりも僕を驚かせたことは、この後に起こった。鏡の内に潜む人影が自ら意思で動き、鏡の表面が水面みなものように揺れる。

手が出た、足が出た。鏡の内から人が這い出して来る。何が起こったのか全くわからないで驚いている僕は、いつの間にか近づいて来た水鏡先生に声を掛けられてまた驚いた。

「何をしたかわかったかしら？」

「……………」

口を縛られている僕は無言で首を横に振った。

「あの〈鏡〉は私が偶然、学校の地下室で見つけた物なのよ。私は〈鏡〉に言われたの、一緒に悩みのない世界をつるうって」

水鏡先生は僕の口に縛られていた布を取ってくれた。

しゃべるようになった僕はすぐに水鏡先生に質問をした。

「あの鏡がしゃべったって、どういうことですか!？」

「あの〈鏡〉が何だかは詳しく知らないけれど、あの〈鏡〉意志を持っているのよ。そして、私と同じ夢を抱いていた」

「『悩みのない世界をつくる』ですか?」

水鏡先生は小さく頷いた。

「そう、私は保健室で多くの学生たちの悩みや相談を受けたわ。その悩みを解決させてあげたかった。そして私はあの〈鏡〉に出会ったの」

「悩みを解決させるってどうやって。それにどうして生徒たちをさらったんですか?」

「あの〈鏡〉は悩みや不安をエネルギー源としていて、そういった人々の魂を体内に吸収し、一つのものにする能力を持っているの。そこで私は藤宮彩という保健室によく悩みを抱えて訪れていた生徒にある噂を教えて、〈クラブ・ダブルB〉を彼女に探させると同時にいろんな生徒に噂を流してもらい、悩みを持った生徒を探したのよ。そして、他の者に気付かれぬようにして悩みを持った生徒に近づき、〈鏡〉の元へ連れて行った」

僕の頭は完全に混乱している。そんな僕が言えたのはこんなことくらいだった。

「あ、アスカは、死んだはずのアスカに会いました。どういうことですか？」

「今見たでしょう、〈鏡〉の力を？」

「今？」

「〈鏡〉は映し出した人の肉体と魂を複製することができるのよ。複製された人間は〈ミラーズ〉となり、その〈ミラーズ〉からまた複製された人間が家に返されるのよ。でも、複製を繰り返したモノはあまり長持ちをしないのよ、そのためすぐに壊れてしまい精神異常をきたしてしまう、それが難点だったわね。でも、時間稼ぎができればそれでよかったのよ」

鏡には内面までは完璧に映し出せないということなのかもしれないと僕は思った。だから複製するたびに出来が悪くなるんだと――。

渚を抱えていた〈ミラーズ〉が渚のことを鏡の前に降ろした。それを見た僕の頭に疑問が次から次へと沸いてくる。

「複製された、最初の本人はどうなるんですか？」

「本人は最初の複製の時に〈鏡〉よって魂を抜かれ、魂は鏡の中に吸い込まれて、魂同士が混ぜ合わされて一つのモノになるの。全ての人間が一個の個体として存在する、そして悩みは全て解消されるわ」

「あ、あの、肉体はどうなるんですか？」

「肉体はもう不要でしょ？」

「じゃあ元には戻れないってことですか！」

僕は大声を出した。

「元に戻る？ どうして？」

僕は水鏡先生の言葉に愕然とさせられた。魂は混ぜ合わされて、肉体はもうないということなんだと思う。つまり、生徒たちは……アスカはもう帰って来ないってことなんだと思った。

渚の身体が糸で操られるように立ち上がった。ダメだ、どうにかして止めさせないと渚まで……。

僕は大声で叫んだ。

「止めろ！ 今すぐ止めるんだ！」

水鏡先生は僕に向かって微笑みこう言った。

「あなたも一緒になれば、そんな些細な事気にしなくなるわ。さあ、あなたも一緒になりましょう」

「イヤだーっ！」

僕が大声で叫んだと同時に辺りを照らしていた蠟燭の火が全て消え、辺りが暗闇に包まれたかと思うと、僕の鼻を薔薇の香りが衝いた。

闇の中で激しく、何か<sup>が</sup>割れる音がして、大勢の悲鳴があった。

僕は頭がクラクラして意識が朦朧となり、そのまま気を失ってしまった――。

僕が目を覚ましたの自宅のベッドの上だった。

時計の針は朝の七時半を指していて、カレンダーに目をやる

と今日からまた学校がはじまる日にちだった。

僕は学校に行く気など全くっていうほどしなかったけど、いろいろなことが気になって仕方なく学校に行くことにした。

学校はいつも通りだった。クラスに入ってもなんら変わった雰囲気もない。

……いや、何かが違う。この前まで休んでいた生徒たちが登校している。事件で登校を控えていた生徒が登校している。

鳴海愛と話があったけど、彼女は学校に来ていないようだった。だから、僕はすぐに椎風渚の教室に向かった。

渚は教室にいた。

教室で楽しそうに友達と話していた渚だったけど、僕に気づくとすぐに僕に駆け寄って来て、そのまま僕の手を引いて、普段生徒たちには余り使われることのない学校の隅の方にある階段の前まで引っ張っていかれた。

そこで渚が顔を少し膨らませて、僕のことを上目遣いで睨んだ。

「涼ったら、あんまりあたしの教室に顔出さないでって言うでしょ？」

「えっ、な、何が」

突然変なことを言われて僕は戸惑った。

「あたしたちが付き合ってるの一樣周りには内緒なんだからあ  
」

「えっ、僕らが付き合ってるだって!？」

「ひっどお〜い。とぼけちゃって、もしかして、好きなひとが

できてあたしと別れたいとか？」

「そ、そうじゃなくて……あの」

何が何だかわからない、僕が渚と付き合ってるなんてどういうことなんだ？

「涼の方からコクってわたしたち付き合ったんだよお」

渚は今にも泣きそうな瞳で僕のことを見ている。

でも、僕は渚と付き合った記憶なんてない。……いや、待てよ。

「僕たちさあ、屋上で出合って、一緒に昼飯食べるようになって、それで一緒に帰るようになって、学校の帰り道で僕が渚に告白して……それで……」

「そうだよ、涼があたしのこと『好きだ』って言って、そのまま抱きしめたんじゃない！」

そう、そうだった。……いや、違う、そんな記憶なんてない。……やっぱりある、でもない。

僕は混乱する頭のまま、あの事件について話を聞いた。

「ヘミラーズ」は、ヘクラブ・ダブルB」は、消えた生徒たちは？」

「いきなり何の話してるの、マンガかアニメの話？　そうやって話をすり変えるつもり？」

「そ、そうじゃなくて、事件はどうなったの、だって渚はさらわれて、いや、だって、僕らは鳴海さんと一緒に事件を追って……」

そして、予期せぬ不思議な答えが返ってきてしまった。

「鳴海さんって誰？」

この言葉を聞いた僕は血の気が引いてぞっとした。

「鳴海愛だよ、渚の家に住んでる僕と同じクラスの」

「隣りに？ ……そんな人いないけど？」

もう、僕には何がかわからなかった。

「大丈夫？ 涼の顔真つ青だよ、保健室に行った方がいいんじゃない？」

そうだ、保健室だ、水鏡先生はどうなったんだ？

でも、保健室に行くのが恐かった。何か嫌な感じする。正直もう家に帰れたかった。

「ねえ涼ったら、だいじよぶなの？」

「あ、う、うん」

その時、学校のはじまりを告げるチャイムが廊下に鳴り響いた。

「あ、朝のホームルームはじまっちゃうよお、早く行かないと遅刻にされちゃう。ほら、涼も急いで！」

「そ、そうだね」

僕と渚はいっしょに走って、それぞれの教室へと急いだ。

教室に戻った僕はまた鳴海愛を探したが、どこにもいない。

今日は休みなのかもしれないけど、僕はもっと嫌な予感がしていた。

鳴海愛の席がない。ないというか、別の人が座っているという方が正しいかもしれない。クラスから生徒の席が一人分消え

てしまっていた。

一時間が終わり僕はすぐに友達たちに事件のことを聞いて見たけど、ヘクラブ・ダブルB、(ミラーズ)って何？　と言われてしまった。消えてしまった生徒の名前も出してみたがそんな人学校にいたっけ？　と言われてしまった。

僕はその後もいろいろな人に話を聞いたけど誰も事件について知っている人はいなかった。そう、まるでそんな事件なんて最初からなかったように……。

消えた人たちは最初から存在していなかったことになっていった。

そう言えば最初から居なかったような気がしなくてもない。でも、居たという記憶もある。

昼休みになり僕は意を決して保健室へと足を運んだ。

そこにいたのは水鏡先生とは違う女の先生だった。でも、僕はその先のことを知っているけど、知らない。

最初からいたような気がする。この保健室の先生との過去の記憶が確かに頭の中にはある。だけど、知らない。……知っているけど、知らない。

僕はその後の授業など一つも身に入らなかった。今日一日中こんな感じだった。

そして、混乱した頭のまま家路についた――。

家に帰る途中、生物の気配が一気にすうーっと消えていき、薔薇の香がした。そして、あのファントム・ローズがまたも僕の前に姿を現した。

白い仮面は、無表情だった。

「失われた魂は、もう決して元に戻ることはない。だから、世界はこういう形を取らざるを得なかった」

つまり、事件に関することを全てが存在しなかったことにしたのだと。

だけど、僕の記憶の中には今の世界の記憶と前の世界の記憶が一緒に存在してしまっている。なんで、そんなことになっているんだろう？

ファントム・ローズは言った。

「世界は本来、一人一人に与えられているのが原則だ。だけど、君は世界から弾かれた」

僕にはファントム・ローズが何を言っているのか全くわからなかった。

「意味がわからない、僕の恋人のアスカはどうなったんだ？」

「君の恋人は椎風渚だろ？」

そう僕の恋人は椎風渚だ……でも。

「……でも、違う！」

「椎名アスカなんて人間は最初から存在しなかった。涼、君は私と同じように世界から弾かれてしまったんだ。自分の世界を持たず、人の世界に生きる者、そういう存在なんだ」

ファントム・ローズの、仮面は酷く哀しそうな顔をした。

「私にはこうなることがわかっていて。けれど君ならばこの呪縛から逃れられるのではないかとも思っていた。しかし、結局君は世界から弾かれた」

そして、ファントム・ローズは渦を巻く多量の薔薇の花びらに囲まれ姿を消した。

大量の薔薇の花びらは風に煽られ、天を舞い、世界を薔薇の香で満たした。

僕は目を瞑りその場を動くことができなかつた……。

終わり方は人それぞれだと思う。

でも、僕はこの終わり方には納得していない。

消えた人は結局帰ってこなかつた。

いや、居なかつたことになってしまった。

全てが幻のようだ。今僕が生きている世界さえも……。

ハザマ

Case X 渚

——世界分裂化現象。

〃弾かれたモノ〃である春日涼は〃世界を渡るモノ〃であるという。

そんな感じで、あたしの前に現れた青年は説明した。

あたしにはなにがなんだかわからなかった。

涼の様子はたしかに可笑しかったけど、それが失踪の前触れだなんて思いもしなかった。

ある日、涼はあたしにこんなことを言った。

——君はアスカの代わりなんだ。って……。

それを聞いたあたしは涼に一方的に怒りをぶつけたけど、涼は老衰したみたいにも何も言わずにいた。

涼が失踪したのはその後すぐだった。

最初はあたしのせいかと思ったけど、もしかしたら違う原因があるかも思いはじめたのは、冷静になってきた最近のこと。

そんなときに彼はあたしの前に現れた。

名前は影山<sup>かげやま</sup>彪斗<sup>あやと</sup>。あたしより三つも年上らしい。だから一九歳ね。

彪斗はあたしの前に突然現れ『春日涼について知りたいこと

がある』っていきなり言われたの。涼のことを知りたいのこっちだよって思った。

それで近くの喫茶店に入ることにしたんだけど、この彪斗ってひと、そーとーキテるよ。

あたしものね、こういう話キライじゃないけど、現実とアニメとかの区別くらいできる。可笑しいよこの人。

「あたしもう帰る」

こんな人と付き合ってらんない。まあ、カフェオレおごってもらったけど。

「まだ話は終わってないよ渚さん」

席を立てて帰ろうとしていたあたしは思わず足を止めてしまった。

「名前言ったっけ？」

そのときは名前を呼ばただけで足を止めちゃったけど、涼のこと聞きたいってあたしのとこに来たんだから、あたしの名前くらい知ってて当然だよね。

でもね、彪斗はこんなことを言ったの。

「アスカ、ファントム・ローズ、ミラーズどれかに聞き覚えは？」

それは全部、涼が失踪する前に口に使っていた言葉だった。彪斗がなにか知っているのは間違いないと思ったの。だからあたしはまた席に戻った。

「君はアスカの代わりなんだって涼に言われた。涼の本当の恋人はあたしじゃなくて、アスカなんだって。アスカっていった

「誰なの？」

「椎名アスカはすでにミラーズになって世界から抹消されてしまったよ」

「世界から抹消って、殺されたってこと？」

「なんだかすごい話になってきたみたい。」

「殺されたんじゃない。実験体にされて……いや、やめよう。説明だけでは実感できないものもある」

「それってあたしばかりにしてるの？」

「違うさ、知らないことは理解できない。椎名アスカは死んだようなものと考えてくれていい。しかし、春日涼は椎名アスカを蘇らせようとしている。それが要約さ」

「死んだ人を蘇らす？」

「そんなゲームとかじゃないんだし。でも、あたしを見つめる彪斗の瞳は嘘を言っていない。かなり大真面目。」

「僕がさっき説明したことを覚えているかい？」

「どの話？」

「世界は人の数だけあり、分裂を続けている。それを世界分裂化現象という」

「うん」

「しかし、世界はもともとひとつだった。いや、この話もよそう。つまり、三人の人間にたいして、二つしか世界がななければ、一人は余ってしまう。その余りになってしまったのが春日涼さ」

「なにがいたいんだか、ぜんぜんわかんない。」

この人の説明って順序だっつてないし、言ってることも意味不明。

だから、あたしは一番聞きたいことを考えて質問を投げつけることにした。

「涼はどこにいるの？」

「それは最初に言ったはずだ」

「聞いてない」

「そうか、すまない。記憶障害なんだ。弾かれた春日涼には自分の世界がない。だから人の世界を渡り歩く。世界のどれかに春日涼はいる」

また意味不明な話が始まった。

こうなったら、こっちだっつて要点だけ言っつてやる。

「涼はあたしが自分で探すから、あなたの知ってる手がかり全部話して」

「君はもうこの件から手を引いたほうがいい……といたいところだが、君はすでに世界剥離が始まってしまっている」

「だーかーらー、あなたの言っつてること全部意味不明！」

もういい。こんな人と話してられない。

あたしは席を立ち上がって帰ろうとした。

帰ろうとする彪斗に腕を掴まれ、世界が揺れたような気がした。

地震じゃなくて、世界そのものが歪んで揺れた。

驚いているあたしから彪斗はすぐに手を離れた。

「すまない、君の世界剥離を早めてしまった」

「世界剥離って……」

「君も世界から弾かれた存在になる」

「意味わかんない」

「春日涼や私と同じ存在になる」

わかないことばかり。わかんなさすぎて、なにを質問すればいいのかもわかんない。

「同じってなに？ 同じなったら涼に会えるの？」

「見つけ出すことができれば会える。今の君では、春日涼が君の世界に侵入して来ない限り会えない」

「だから世界剥離すればこっちから涼を探しにいけるってこと？」

「僕らは春日涼の行方を捜している。僕らの仲間になるかい？」

「なれば涼に会える？」

「探し出せば」

「だったら仲間になる！」

「君が世界剥離したら会おう」

——消えた。

人間が忽然と消えた。

あたしの目の前から彪斗が消えてしまった。

周りの人たちは人が消失したというのに、誰も驚いていない。まるで最初から、そんなことなかった。影山彪斗なんて人物そこにいなかったように周りの時間が流れている。

でも、あたしの前には彼の飲んでいたコーヒーカーップが置い

である。それが彼のいた証拠だ。

あたしは近くの席にいた人に尋ねてみた。

「あたしの前に座って人、消えましたよね？」

相手は不思議そうな顔をしている。まるであたしが頭可笑しくなったみたい。

そんなはずない。だって、コーヒーカップがそこにあるのに……。

あたしのカフェオレと彪斗のコーヒーを運んできたウエイトレスが通りかかったので、あたしはすぐに腕をつかんで呼び止めた。

「さっきコーヒーを運んでもらったとき、あたしの前に男の人が座ってましたよね？ コーヒー頼んだ男の人？」

ウエイトレスはあたしのことを不思議そうな顔をして見つめている。

「コーヒーはお客様が注文なされたものですが？」

「あたしが頼んだのカフェオレで、コーヒーを頼んだのはあたしの前に……」

駄目だ。本当に頭が可笑しくなってきた。

頭が可笑しいのはあたし？

それとも周り？

ファミレスからの帰り道、あたしは頭が割れそうに死にそうだった。

本当はもう死んでるかも。

なんだか自分がいる現実の世界じゃないみたい。

世界が歪んで見える。

道路が波打ってる。

……もう駄目。

あたしはアスファルトの上に寝そべった。

世界がグルグル回る。

空が回ってる。

空が青から急激に赤に変わった。燃えていような赤。

薔薇の花びら。

真っ赤な空よりも赤い薔薇の花びらが、ゆらゆら落ちてくる。

鼻を突く薔薇の香り。

「私のせいだ……すまない」

男の子の声？

女の人の声かもしれない。

白い仮面があたしを空から覗き込んでいる。

「あなた誰？」

「ファントム・ローズ」

涼が口走ってた名前だ。

「あなたのこと涼から聞いたことある」

「そう、私は涼を救うことができた。しかし、それをしなかったがために、君までも世界から弾かれてしまった」

また弾かれただつて……それって共通語なわけ？

ファントム・ローズが差し出した手に掴まって、あたしはゆっくりと立ち上がった。

白い仮面があたしの顔に近づいた。

「君はすでに現実剥離してしまった」

またそのことば。

「現実剥離ってなに？」

「例えば、自分の家を失い、路上または人の家に住んでいる状態。ただし、無断でという意味だ」

「だんだん読み込めてきた……」

けど、現実だとは思えない。まるで夢の中にいる気分。

そういえば、周りに人の気配がしない。生活の雰囲気がない。夢の中にいるのかもしれない。

けど、それをファントム・ローズは否定する。

「夢はここよりも現実的だ」

「ここはどこ？」

「世界の狭間。人が住んでいる家と家の間とでもいえばいいだろうか」

……あれ？

急にあたしは恐ろしい震えに駆り立てられた。

「あたしの名前なんだっけ？」

それだけじゃない。他のことも……ママとパパの名前も……。

「あたしは？」

「思い出すんだ。思い出せなければ、君は世界から消える」  
消えるって死ぬってこと？

いやだ……死にたくない……けど、思い出せないよ。

夕焼けが急に星空に変わって、夜の澄んだ空気に男の声が響

き渡る。

「君の名前は椎風渚。椎名アスカの代わりだよ」

道路に向こうであたしたちと向かい合うように立っている人影。黒い服を着て、顔には仮面——ファントム・ローズに似てる。

そして、あたしはあの声を聞いたことがあるような気がする。ファントム・ローズの無機質な仮面が哀しそうな表情をした。

「ファントム・メア」

呟くファントム・ローズの言葉にファントム・メアが深く頷く。

「そう、ファントム・メア……それが世界から弾かれた僕の仮初めの名。自分自身だけでは自分が証明できないだなんて、ばかげてると思わないかい？」

「だから、私たちはファントムなのだ。世界は全ての者に平等に与えられている。個人の持つ世界が己を証明してくれる。しかし、自己の世界から弾かれてしまっただけは、他に自己を証明してもらわなければ、消えてしまう。自分自身がここにいて感じるだけでは、想いが弱すぎる」

「すでに僕たちは顔を持たない」

「だから私たちはファントム」

「けどさ、僕には君の真の顔が見えるよ」

ファントム・メアは少し間を空けて言葉を続けた。

「——鳴海愛」

そして、ファントム・ローズも言葉を続けた。

「私には君が春日涼に見える」

このとき、あたしにも見えてしまった。

二人の仮面がヒトの顔に見えた。

よく知ってる二人の人物。

「涼、愛ちゃん！」

二人ともあたしを見て微笑んだ。

あたしは自分の名前も思い出し、あたしが涼の恋人じゃないことにも気づいてしまった。

学校で怪奇事件がはじまりだった。

涼があたしの腕を掴もうとしたとき、鞭が飛んで涼の手を弾いた。

鞭を放ったのは愛ちゃんだった。

「どうして？」

なにがなんだかわからない。

仮面の二人があたしの知り合いで、愛ちゃんがどうして涼のことを？

愛ちゃんが素早く動き、あたしの身体を抱きかかえた。

「ファントム・メア……なぜ君は渚を狙う？」

「推測はできるだろ？」

「椎名アスカに関係があるのか？」

「アスカの復活には渚が鍵を握ってるからね」

愛ちゃんはあたしを背中に回し、涼に向かって襲い掛かった。

なんで二人が争ってるの？

二人になにがあったの？

わけわかんないよ。

「ひゃっ!？」

急にあたしの身体が後ろに引っ張られた。

後ろからお腹を抱きかかえられてる。

いったい誰？

愛ちゃんの手があたしに伸ばされる。

けど、愛ちゃんの背後に涼が……。

——消えた？

それだけじゃない。

夕焼け？

さっきまで夜だったのに、また昼間に戻ってる。

後ろに気配がする。

「誰?？」

「俺だよ、影山彪斗。世界剥離したらまた会う約束だっただろう?？」

それはそうだけど、涼と愛ちゃんはどこに行ったの？

「なにがあったの?？」

「メアとローズはまだ〈狭間〉で戦っている。ここは現実だ。

君は世界剥離をして、自分を失わずに耐えた」

あのまま自分の名前も全部忘れていたら、あたしはどうなってるんだらう？

彪斗があたしの手を握った。

「なにをするの?？」

「ここは俺の世界じゃないから、うまく魔法が使えないんだ」

「魔法？」

「俺は魔術師なのさ」

次の瞬間、あたしは誰の部屋にいた。

「俺の部屋にようこそ、椎風渚さん」

俺に部屋って、また別の場所に一瞬で来たの？

なんだかなんでもアリって感じ。

あたしはベッドの上に腰掛けて部屋を見回した。

本棚に分厚い本が入ってるほかは、綺麗さっぱりなものもない部屋。寝るときに使ってるだけって感じの部屋。

「渚さんの部屋はどこがいいかな？」

「えっ？」

「君はもう自分の家に帰らないほうがいい」

「どうして！」

「君はすでに世界から弾かれている。君に帰る場所はないんだよ。それに俺の傍にいたほうがいい」

大きな事件に巻き込まれてしまったことはわかっている。

いろいろなものを失ってしまったような気がする。

「あたしの失ったモノ……取り戻せる？」

「なんとも言えないな。ただ……」

「ただ？」

「——春日涼は僕らの敵だ」

あたしはいったこれからなにを……？

ミラー

Case1 虚

君は世界の成り立ちについて考えた事があるかい？

世界は結局のところ、記憶によって創られているんだ。

でも、僕には世界を創る力は無い。僕は世界から弾かれた者だから……。

ファントム・ローズは僕に言った。『君は世界から弾かれた』と……？

未だに意味はわからない。でも、僕の周りで不可思議なことが起きたことはわかる。

でも、その不可思議なことも結局なかったことになった。僕を除いては……。

僕はこの世界で数日の時を過ごした。

前の世界と変わった点は、多くの人々がいなくなったことくらいだと思う。それ以外は前と表面的には変わらない。

毎日普通に起きて、学校に行く。学校に行く途中にこの世界で用意されていた彼女——椎風渚を迎えに行って一緒に学校に行く。

前の世界での彼女は椎名アスカという同じクラスの子だった。

彼女は前の世界で僕が巻き込まれてしまった事件で行方不明になり、ミラーズとして再び僕の前に現れ、そして、どうなったのかはさっぱりわからない。この世界にいないという事は死んでしまったんだと思う。

本当は死んでしまったかどうかともわからない。そもそも死というものもこの世界ではよくわからなくなってしまった。世界は全て幻のようで、僕は全てのが夢の中で起きている事のように実感がわかない。

僕はいったいなにをすればいいんだろう？

このまま世界に流されて生きて……いけるのだろうか？

自分の存在があやふやに思えてくる。

とくに渚といないときは、自分が消えそうで怖い。

両親でさえ他人に思えるときがある。渚以外はみんな他人に思える。

やっぱり世界に流されたままじゃ生きていけない。

でも不安なんだ。

僕は渚に依存してる。

好きかどうかは正直わからない。相手は僕のことを想ってくれている。僕も相手のことが好きだって感情がある。けど、この感情は本物なのだろうか？

だって僕の彼女は椎名アスカじゃないか！

頭が混乱する。

渚と長くいればいるほど彼女のことを好きになっていくような気がする。そして、僕の中から椎名アスカが消えていくんだ。

椎名アスカという記憶その物が消えていくような気がする。

椎名アスカを忘れちゃいけない。今じゃみんな覚えてない。

僕が忘れてしまったら、本当にいなかったことになってしまう。

でも、今日も僕は渚とデートをする。

学校が休みのときでも毎日会っている。自然とそうになっている。渚と離れてはいけない。不安と危機感がある。

土曜日の今日は電車に乗って大きな街で適当になにかする予定だった。

僕は待ち合わせの場所の駅に向かっていた。

駅まで続く街並み。

風景がぼやけて曖昧に見える。最初は視力が下がったのかと思っただけ、そんな急激に下がるわけではない。恐ろしいことにこの現象は渚がいないときに起こるんだ。

僕が抱えている問題は精神的な不安だけじゃない。

渚が近くにいないと、物理的な問題まで生じるんだ。

もう渚なしじゃ生きていけない。

ぼやけて見えるのは風景だけじゃない。ほかの物もすべて、人の姿さえもぼやけて見える。

僕の周りの人たちは渚がいなくても、比較的判別できる程度は見える。けど、まったく知らない人になると、本当にわからないんだ。

そのことに関連していると思うんだけど、渚がいないときに他人から話しかけられたことがない。まるで幽霊になってしまった気分になる。

それとも周りがみんな幽霊なのだろうか？

こんな世界じゃ生きていけない……前に本気でそう思ったことがあった。けど、そう思った途端に、世界が歪んで僕自身の名前すら思い出せなくなりそうになった。あんな恐ろしい経験もう二度としたくない。だから僕はこんな状況でも絶対に生きていくと決めた。

そのためには渚は絶対不可欠なものなんだ。

僕の足は自然と速くなっていた。

渚にさえ会えば、このぼやけた世界から抜け出せる。

風景も行き交う車や人々も、みんなぼやけてしまっている。

そんな中、目の前にぼやけていない若い男が現れたんだ。

まったく知らない人だ。

僕にとつてそれは驚きだった。

しかも、その人は僕に話しかけてきたんだ。

「春日涼君だね？」

さらに名前まで呼ばれるなんて思いもしなかった。

軽いパニックになってしまって、口ごもって返答することも

できなかった。

慌てる僕の姿を見ながらも、当たり前のように男は平然としている。

目の前の男はなにかが違うと確信した。この世界では異質な存在としか思えない。

少し時間を置いてから、ようやく答えることができた。

「そうですけど？」

やっと絞り出せたのがその言葉だ。

男は真顔でうなずいた。

「少し時間をもらえるかな？」

「それは……」

僕も相手のことが気になる。けど渚に会わなくちゃいけない。馱はすぐそこだ。

今の僕にとって渚は何よりも大切なんだ。それよりも目の前のことを優先していいのか？

決して大げさではなく、このことは未来に関わる決断が迫られてる気がする。

大丈夫、少しくらい大丈夫だ。この人と話そう。

「少しだけなら大丈夫です」

「ありがとう。まずは自己紹介をしよう、これは相手を認識する上でとても大切なことだ。僕らのように、弾かれたモノは特に」

「!?」

やっぱりそうさ。この男は周りとは違う。

弾かれるなんて言い回しをするのはファントム・ローズくらいだ。

僕の置かれている状況、このぼやけた世界のこと、きっとこの男はなにか知ってるんだ。そうでなきゃ合点がいかない。

「僕の名前は影山彪斗。絶対に忘れないで欲しい」

その名前を深く胸に刻み込んだ。

絶対に忘れない。

両親でさえ他人に思える世界で、ぼやけてしまうこの世界で、影山彪斗を忘れないことを難しいことだと思う。

今は目の前ではっきりしてる影山彪斗も、いなくなった途端に記憶がぼやけてしまったり、すっかり無かったことになる可能性だってある。

今だって僕は多くの記憶を失っているかもしれない。

記憶を失っていることすら自分で気づいてない可能性だってあるんだ。

物理的な証拠を残していても無駄なんだ。この世界に椎名アスカの物は残っていない。椎名アスカは僕の中にしかないんだ。

大丈夫、僕は忘れない。

そう思ったばかりなのに、突然影山彪斗の姿がぼやけはじめた。

なんでそうなってしまったのかわからない。

大丈夫、僕の中で影山彪斗の名前は生きている。ぼやけてしまったその顔もちゃんと思いつくことができる。ぼやけてしまっているのは僕のせいじゃない。

けど、このまま影山彪斗が消えてしまったら自信がない。

影山彪斗も自分の存在がぼやけていることを自認したみたいだ。

「タイムリミットのようなのだ。この世界は僕との関わりが薄い……また……ように……なるべく……努力する」  
ぼやけていたものが霞み消えてしまった。

それは消失だった。

人間が僕の目の前で消えた。

今の僕にとっては驚くことじゃない。

そして、焦ることもなかった。

影山彪斗はちっとも慌てていなかった。

最後の言葉はよく聞き取れなかったけど、きっとまた向こうから会いに来る。そんな気がする。

だからこの件に関して僕ができることはない。

今僕がすることは渚に会うこと。

急いで僕は渚の元に向かった。

だんだんと辺りの景色が鮮明になってきた。知らない人たちの顔もちゃんと認識することができる。近くに渚がいる証拠だ。

どの程度の範囲内かはまだはっきりしないけど、渚を中心にしてみるモノが鮮明になっていくのはたしかだ。たとえば学校なんかだと、渚が学校にいれば学校全体が鮮明になってる。

ほかにも渚とよく通る道は、僕ひとりのときでも鮮明だ。でもこれは一緒に通る道じゃなくて、渚がよく通る道のような気がする。一緒に通ったことがない道でも鮮明なときがあるからだ。

この世界が渚を中心に行っているのは間違いなかった。

渚は駅の改札口の近くにいた。

「ごめん待った？」

「ううん、ぜんぜん待ってないよ」

渚の笑顔を見るとほっとする。

周りも鮮明で、何事もない日常を取り戻せた。

この当たり前の景色が僕にとっては特別で、とても大切に心の安まる空間だ。

やっぱり僕は渚なしじゃ生きられない。

「どうしたの涼？」

「えっ？」

どうやら僕は重い表情をしていたらしい。渚が僕の顔を覗き込んでいる。

今は何事もない日常でも、渚と別れたらぼやけた世界に引き戻される。それが僕は怖かった。だからずっと渚と一緒にいるわけにはいかない。

でもいつまでこんなことが続くのか？

きつと今のままじゃ一生続く。

渚と死ぬまで二四時間ずっと一緒にいる方法を考えることが現実的なのか、それともこの呪いのようなものから抜け出すほうが現実的なのか。

今の僕にはここから抜け出す術がわからない。

ファントム・ローズもあれ以来僕の前に姿を現さない。最後に会ったのは、世界がこんなことになってしまった日だ。学校に行ったら渚が僕の彼女ということになっていた。

なぜファントム・ローズは僕を助けてくれないのか。と言っても、もともとファントム・ローズに僕を助ける理由なんてないかもしれない。目的だっけはつきりしないんだ。

今もてる希望は影山彪斗の存在だ。

結局、僕からできることはなにも思い付かない。

考えてみれば、はじめっから流されて巻き込まれて、こんなことになってしまった。

僕になにができるんだ……。

「ねえ、涼ってば！」

大きな渚の声で僕は我に返った。すっかり悩んでしまっ  
て周りが見えてなかった。

「ごめん、ちょっと考え事してた」

「なんか変だよ最近？」

「そんなことはないよ」

「絶対ウソ、なんかあたしに隠してるんでしょ？」

渚の言うとおりのウソだ。でも隠そうと思っ  
て隠しているわけじゃなくて、話してどう  
こうなるわけじゃないと思っ  
てるだけだ。結局話さないんだから隠し  
事と同じか。

不安そうな顔をした渚が顔を近づけてくる。

「もしかしてあたしたちに関わること  
じゃないよね？」

「どういう意味？」

関わることって言ったならそうだけ  
ど、きっと渚が言いたいのは  
そういうことじゃないと思う。だ  
って渚は僕の置かれてる状  
況を知らないんだから。

「ねえ……涼？」

消え入りそうな声だ。悲しそうな目  
をしている。

「なに？」

「あたしのこと好きだよね？」

「……………」

僕は答えられなかった。

渚のことが好きだって気持ちはある。それは僕の中にある感情で、無理強いをされているわけじゃない。でも、僕はそれを信じられない。

気持ちはそう訴えていても、世界がこうなる前は違ったって記憶が僕にはあるからだ。

頭が混乱する。

自分の感情が信じられないなんて、本当になにを信じていいのかわからなくなる。

僕が答えずにいると、渚は今にも泣きそうな顔をした。

「あたしのこと好きじゃないの？」

「……好きだよ」

絶対にうまく言えてない。

好きだって気持ちはウソじゃないんだ。でもうまく言えない。渚の表情はもっと不安そうで悲しい顔になってしまった。

おかしい。

世界がぼやける。

渚が近くににいるのに世界がぼやけていく。

なんだか頭もぼーっとする。

意識が遠のく。

身体から感覚が消えていく。

違う……これは……イヤだ……僕が消えるんだ！！

「涼！」

急に視界と意識がはつきりした。

目の前にある渚の顔。

倒れた僕は渚に抱きかかえられていた。

周りを行き交う人たちも僕らのことを見ている。

恐ろしいことが起きた。

あれはただ気を失いそうになったんじゃない。僕がこの世界から消える気がした。いや、あのままだったら消えていたと思う。

やっぱりそうなんだ。

この世界は渚を中心に行っている。

そう……だから、僕は渚によって生かされてるんだ。

本当はそんな気がしてた。でも怖かったら考えないようにしてたんだ。でも僕は確信してしまった。

渚が僕を捨てたとき、僕はこの世界からも捨てられる。つまり消えるんだ。

それは死ぬということなのだろうか？

きつと少し違う。

ほかのみんなと同じように、はじめから無かったことにされるんだ。

僕はどうしたらいい？

渚のことが好きだって気持ちはある。その気持ちを疑わなければいい。今はそれでいい。そうするしかないんだから。

僕は立ち上がった。

「ごめん……ちょっと調子が悪かったただけなんだ」

「あたしこそごめん。体調悪かったからあんな表情したんだね、なんか勘違いしちゃったみたい」

そう言って渚は笑った。

でも、その表情とは裏腹に不安なことを考えていないだろうか？

本当に倒れたんだから、体調が悪いつて言うのは信じてくれたと思う。

好きかどうかの問いは渦巻いているかも知れない。

「渚のこと好きだよ」

「うん、あたしも涼のこと好き」

渚に不安がないことを祈るしかない。あつたとしても、早く消えて欲しい。

なんだろう、とても後ろめたい気持ちがある。

嘘はついてない……でも……。

地下ホームに僕たちは下りた。

まばらに見える人たち。

何気なく壁の広告を見ていると渚が声をかけてきた。

「ねえ、涼？」

「なに？」

「体調悪いのに出掛けて大丈夫？」

「大丈夫だよ」

出掛けることは問題じゃない。僕は渚と一緒にいなければいけない。

ホームにアナウンスが流れ、すぐに電車がやってきた。

電車に乗ると席がまばらに空いていた。けど二つ並んで空いている場所はなくて、渚を座らせて僕はつり革につかまることにした。

「あたしが座って大丈夫？」

渚はまだ体調を心配してくれていた。

「大丈夫だよ」

「向こうの席空いてるから座ったら？」

「いいよ、近くにいるよ」

僕は微笑んで見せた。それに渚も微笑んで返してくれた。

緩やかに動き出す電車。

暗い窓に映り込む僕の姿。

ここに僕はいる。

窓に映っているのは僕以外の何者でもない。

間違いなく僕の顔。

たまに不安になるときがある。そこに僕の顔がなかったらつて。

渚といるときはまだいい。家で独りでいるときに鏡を見たりするのが怖い。もしも自分の顔がぼやけていたら、恐ろしくてたまらない。

僕は僕だ。

大丈夫、心も体も僕のものだ。

そんな当たり前のことが今じゃ当たり前じゃない。

窓を見ると不安そうな顔をした僕が映っていた。そんな顔をしてちゃいけない。不安はそれに見合った結果を呼び寄せる。

こんな顔してたら渚だって不安に思うじゃないか。

笑顔を作ろう。

窓を見ながら表情を変えようとした。

しかし、僕の表情は笑顔どころか恐怖に染まってしまった。

恐ろしいことが起きてしまった。

僕は慌てて振り返った。

向かいの席に何事もなく座っている人々。

だが、再び顔を戻した窓に映り込む人々の姿は――へミラーズ――！

まさかこんな場所に現れるなんて!?

渚が叫ぶ。

「きゃーっ、涼っ！！」

すでに鏡となった窓の中だけではなく、こちらの世界の人々もみんな〈ミラーズ〉に変わってしまっていた。

僕は慌てて渚の腕をつかんで立たせると、そのまま胸に抱き寄せた。

席に座っていた〈ミラーズ〉たちが一斉に立ち上がった。僕らに逃げ場はない。

隣の車両にも目を配ったけど、向こう側も〈ミラーズ〉で溢れている。

なにがなんだかわからない。なんで〈ミラーズ〉が現れるんだ。もう全部無かったことになったんじゃないやなかったのか！

〈ミラーズ〉たちがじわじわと寄ってくる。

僕らになにをする気なんだ。なんの目的があって現れたんだ！

まだ〈ミラーズ〉に関してはわからないことばかりだ。

僕は、僕は……巻き込まれただけなんだ！

〈ミラーズ〉たちの手が僕らに伸びる。

もうダメだ！！

強く目をつぶった。

悲鳴があがった。

それは渚の叫び声だった。

恐る恐る目を開けると、そこには紅く彩られた〈ミラーズ〉の姿。

ゆっくりと〈ミラーズ〉たちが崩れ落ちていく。

薔薇の香りが鼻を突く。

その先に立っていたのは――。

「ファントム・ローズ！」

僕は叫んだ。

また僕はファントム・ローズに会ってしまった。

薔薇の鞭が舞い、白い薔薇が紅く染まっていくのを僕は見た。  
恐ろしい光景。

まるでマネキンのように（ミラーズ）たちが倒されていく。

あまりにも無機質な光景なのに、血があまりにも生々しく流れている。

渚は眼を見開いたまま瞬き一つしていない。

誰もこんな光景現実だとは思えない。

でも僕は知っている。

現実だろうが夢だろうが、そんなことどうでもいいんだ。

目の前で起きていることから逃れられない。

電車が止まった。

ドアが開いた瞬間に何事も無かったことにされた。

電車には僕ら以外乗っていない。倒れた（ミラーズ）たちも、  
血の一滴も残っていない。そこにはファントム・ローズの  
姿すらない。

ホームにいた人々が電車に乗り込んでくる。

僕は渚の腕を取って、人の波に逆らってホームに出た。

渚の身体が重い。力がまったく入っていない感じだ。

近くにベンチがあったので、そこに渚を座らせた。

渚の眼は虚ろでどこを見ているのかわからない。ショックを受けているのは見て明らかだ。

なんて声をかけてあげればいいんだろう。

「大丈夫？」

そんな言葉しか思い付かなかった。

返事は返ってこない。

こうやって渚を見ているとわかる。僕のは感覚はおかしくなってるんだ。おかしくなってしまうたこの世界で、一番おかしくなってしまったのは僕かもしれない。

渚の横の席に座った。

世界は何事も無かったように流れている。

行き交う人々。

ホームの反対側にやって来た電車。

さっきの出来事は白昼夢じゃないかって思えるくらいだ。

でも僕はこの世界でどんなことが起きても、それが特別なことだとは思わないだろう。

そう思えるということは僕がおかしくなっているということだろう。

それとも、僕だけが正しくて、周りがみんな変なのだろうか？

おかしくなる前の世界がまやかashiで、今の世界が本当の世界の姿だったら、それに気づいている僕はおかしくないんじゃないか？

でもこのおかしな世界がまやかashiだったら、こんな世界を見

ている僕がおかしいんだ。

……こんなこと考えても仕方ない。

起きていることが今の僕にとつては全部現実なんだ。そう思わないと生きていけない。目を背けたくても見えてしまうんだから。

渚の様子をうかがうと、まだ立ち直っていないようだった。やっぱりどうしてあげたらいいのかわからない。

パニックになって取り乱してるなら、落ち着くようになだめるけど、渚は完全に放心状態だ。

僕は渚の手を握った。

その手は冷たかった。渚の身体から体温が奪われていた。

「もう大丈夫だよ渚」

その言葉がどれほどの効果を持つのかわからない。

時間が流れる。

とても長く感じる時間だ。

この時間の間にまた〈ミラーズ〉が現れないとも限らない。

でも僕になにができる？

とりあえず電車にはもう乗らない方がいいだろう。

帰りはどうしよう。一駅だけでよかった。歩いて帰れない距離

離れないからな。

こんな心配してる場合じゃないのが普通か。

〈ミラーズ〉はどうして現れたのか？

それはわからない。

〈ミラーズ〉はどうやって現れたのか？

まず〈ミラーズ〉は窓に映った。そのときすぐに振り返ったけど、まだそのときはみんな普通で〈ミラーズ〉なんかじゃなかった。また窓に顔を戻してすぐに車内にも〈ミラーズ〉が現れたんだ。

前に〈ミラーズ〉と関わりがあったのは〈鏡〉だ。でもあれは特別な〈鏡〉だった。電車の窓が特別な物だったとは思えない。いや、でも……鏡っていうのは気になる。

もしも鏡が〈ミラーズ〉の出現に関わりがあったとしたら、そんなのどうやって回避したらいいんだ。鏡の代わりになる物なんていくらでもある。

〈ミラーズ〉が僕、もしくは渚を狙っているのだとしたら、なにもできないなんて言ってもらえない。

僕に〈ミラーズ〉と戦えっていうのか？

そんなの無理だし、なんの解決にもならない。

わからないことが多すぎる。

今考えても堂々巡りしそうだ。

ファントム・ローズはまた僕の前に現れるのだろうか？

そうだ、影山彪斗はいっつ現れるのだろうか？

……結局、受動的なんだ。

なにかアクションが起これないとなにもわからない。

解決の方法はわからない。どこへ向かえばいいのかもわからない。なんの解決にもならないなんて考えないで、今は目先の問題を片付けていこう。

まずは渚のことだ。

「大丈夫、渚？」

ほかになんて言っているのかわからない。

心配いらなん言葉を言っても、僕自身がなにが心配いらないのかわからない。心配なんて言い出したら心配ばかりだ。

どうしてなのか僕が迷っていると、やっと渚が口を開いてくれた。

「……あつたんだよね？」

「えっ、なにが？」

その言葉だけじゃ僕はなにを言っているのかわからなかった。さらに渚は言葉を紡いだ。

「本当にあつたことなんだよね？」

やっと理解した。

「うん」

多くは語らず僕はうなずいただけ。変にしゃべりすぎて刺激しない方がいいと思った。

うつむいていた渚が僕と眼を合わせた。

「涼は怖くないの？」

怖くはなかった。でもそれをそのまま言っているものだろうか。自分も怖かったと言うべきか、それとも気の利いたことを言ったほうがいいのか。

僕が考えていると渚が先に口を開いてしまった。

「ぜんぜん怖くなさそうにしてたから……でもそれが逆に怖い」

「どういう意味？」

「なんのあれ!? ホントにあったことなんだよね? あたしだけが見てたわけじゃないよね?!」

急に取り乱したように声をあげた渚。

僕は落ち着かせようと渚の両肩をつかんだ。

「大丈夫だよ、落ち着いて」

「スゴイ怖かったよ……なんなの……なんなの……教えてよ涼?」

放心から立ち直ったと思ったら、それがパニックを呼んでしまったみたいだ。

渚の眼から涙がこぼれていた。

「僕に聞かれてもわからないよ……」

関係ないとは言わないけど、僕だってわからないことばかりなんだ。それに本当のことを言ったらどうなるんだろう?

目の前であんなことが起きれば、僕の話だって信じてくれるかもしれない。けど、それによって新たな問題が生じないとは限らない。

それにすべては話すことはできない。

椎名アスカのことは話せない。渚は椎名アスカの代わりなんて言えるだろうか。そんなことを言ったら、渚が不安になるだけだ。

僕の存在がここにあるのは、きっと渚のおかげなんだ。どのような感じで渚が関わっているのか、詳しいところまではわからなくても、渚が不安定になることは僕自身にも影響を及ぼす

ことはもうわかっている。それは認めなきゃいけない事実だ。

ご機嫌取りみたいなことをしなきゃいけないんだ。みたいなじゃなくて、完全にご機嫌取りだ。でもご機嫌取りって言い方は嫌なんだ。

渚が好きだって気持ちもあるから。

その気持ちに歯止めをかけるものがあるのも事実なんだ。

こんな世界になってしまってから、僕は突然渚のことが好きになっていった。でも前から好きだったっていう気持ちも混在してるんだ。

今の気持ちはどうなんだろう？

気持ちは変わったのか、それとも変わっていないのか？

僕は前よりも渚のことが好きになっている。それは世界がこうなったときに植え付けられたものじゃない。その気持ちは信じていいものなんじゃないか？

じゃあ前から渚のことが好きだったって言う記憶を嘘なのか？

ずっと付き合い合ってた記憶があるのに？

付き合いはじめは渚のほうから告白してきたんだ。今でもちゃんと覚えてる。

自分の記憶に惑わされるなんて、なにを信じていいのかわからなくなる。

大丈夫、今あるモノだけを信じればいい。

渚が僕の手をギュッと握った。

「教えてくれないの？」

「だから僕にも……」

「ウソつかないで……だってあの……あれ、よく思い出せない……」

「どうしたの？」

「あたしたちを襲おうとした人たちを殺した人の顔が思い出せない」

顔なんてはじめからない。だってファントム・ローズははじめから仮面だ。

でも仮面をつけてることを忘れるだろうか？

絶対に印象に残ることだと思う。

それともショックで記憶が欠如してしまったのだろうか？

僕は尋ねる。

「その人がどうしたの？」

「たしか……思い出せないけど……涼がその人に向かってなにか……言ってたのに、思い出せないよ」

あのときたしか僕は、ファントム・ローズの名を叫んだんだ。それを見られたら、僕がなにか知ってると思われるな。

渚の記憶は曖昧だ。ここは知らんぷりを通すべきだろうか、それとも言った方がいいのか？

もう渚のことを巻き込んでしまっている。

僕は渚から離れることはできない。

これからも渚と一緒に同じような目に遭うかもしれない。だってこの話題は避けられないような気がする。問題は話すにしてもどこまで話すかだと思う。

椎名アスカの話はできない。

渚が僕が存在できることに関わっていることも伏せた方がいい。変に意識されると危ないような気がする。

「僕にもわからないことばかりなんだ」

「やっぱり知ってるんだね」

「ごめんねウソついて。でもわからないことが多すぎて、どうやって話したらいいのかわからないんだ」

ウソはついてない。

「聞かせて、涼の知ってること」

「……………」

言葉が出てこない。困るとすぐに黙ってしまふ。

まずは場所を変えよう。

周りの人には聞かれたくない。

「別の場所で話そう。もっと落ち着いた場所で」

そんな場所どこにあるんだろう？

〈ミラーズ〉は突然現れたんだ。どこだって落ち着いていない。

僕は立ち上がって渚の手を引いた。

「帰ろう。電車はもう乗らない」

「うん」

「仕方ないから歩いて帰ろう」

「……………」

どうせこれからどこかに出掛ける気力もない。なら帰るのがいいと思う。

僕らは地下ホームを上がりはじめた。

明るい話題をする雰囲気でもなかった。

家路の間、僕らはほとんど無言。

けど、手はしっかりと握り合っていた。

とりあえず渚の家に向かうことになった。距離的にも僕の家より近いし、住み慣れた家のほうが渚も落ち着くだろう。

渚の部屋には何度も入れてもらったことがある。母親にも会っている。——という記憶がある。世界がこうなってしまうてからは、部屋に入ったことも母親に会ったこともない。

記憶が混在すると、感情も混在する。

だから渚の家に行って部屋に入るというのは少し緊張する。

歩くには長い距離だったけど、もうすぐ渚の家だ。

もう見えてきた。

一件隣が渚の家だ。

僕はふと通り過ぎようとした家の表札を見て驚いた。

——鳴海。

そこにはないはずの物だった。

それは前の世界での話だ。

渚の家の隣に鳴海家はなかったことにされているはずだった。道路の向こうからこちらに向かって歩いてくる人影。

風に揺れる長い黒髪。

渚が笑顔になった。

「愛ちゃん、こんにちわ！」

間違いない。

前から歩いてきたのは鳴海愛だ。この世界にはいないはずの鳴海愛がいる!?

「こんにちは」

凜とした声で鳴海はあいさつをした。なにも変わってない。何事もなかったように鳴海愛がそこに存在している。

どうしてだ!?

世界が変わった。

何かが起ころうとしているのか、すでに起きているのか？  
もうきつと起きている。

あの〈ミラーズ〉も現れたんだ。

鳴海が近付いてくるにつれ、なぜか渚は泣きそうな表情をした。  
た。

そして、涙がぼろぼろとこぼれ落ちた。

「あれ……なんで泣いてるんだろ？」

渚は自分が泣いている理由がわからないみたいだ。

鳴海はなにも言わず渚を抱き寄せた。

なにが起きているのかわからない。

〈ミラーズ〉が現れて鳴海愛が現れた。

もしかして鳴海愛はすでに〈ミラーズ〉なのか!?

だとしたら渚を守らなきゃいけない!

でも、二人の間に割って入れる雰囲気でもなかった。僕の考えが違ったら最悪だ。もう少し見守ってみよう。

渚は鳴海の胸で泣き続けていた。

「どうしてか……わからないんだけど……涙が止まらなくて……」

「泣きたい時は泣けばいい。私はいつでも渚の近くにいます」

「でも……こんなこと言うと変に……思われる……かもしれないけど……もう一生会えないと思ってた人に……会えたみたいなの。あたしバカみたい……だって愛ちゃんには昨日も会ってるのに」

昨日？

やっぱり世界が改変されてる。

僕と鳴海はクラスメートだった。昨日はちゃんと学校だってあったけど、鳴海は存在してなかった。

……ん？

おかしい。

僕はある疑問にぶち当たった。

世界や渚の記憶が改変されている。にも拘わらず、僕の記憶に変化がない。それはおかしい。

今みたいな世界になってしまったとき、僕は記憶の混在に悩まされたんだ。今だってそれに悩まされている。二人の彼女の存在と、二人を好きだという嘘じゃない気持ち。そういう記憶の混在が僕の中には起こっていない。

もしも昨日から鳴海がいたなら、僕にもその記憶があるはずだ。

やっと涙を拭って渚は顔を上げた。

「ねえ、愛ちゃんもあたしのウチに来て。愛ちゃんは絶対あたしのことを助けてくれる。絶対頼りになるもん！」

「なにかあったのか？」

「……うん」

渚は暗い表情をして小さくうなずいた。

たしかに鳴海は頼りになる。前の世界でも一緒に事件を追ってたんだ。ただこの世界ではそういう事実はないことになってるけど、きつと今の世界でも頼りになりそうだ。

僕ら三人は渚の家に入った。

まるでデジャブだ。

入ったことがないのにある。記憶にはある風景。

二階の渚の部屋も記憶にある通りだ。

僕はいつもと同じ場所に腰掛けた。ベッドを背中にしたカーペットが僕の定位置という記憶があった。

渚は僕と鳴海を残して部屋を出て行こうとした。

「飲み物取ってくるね」

僕が後を追おうと立ち上がると渚は続けて言う。

「いいよ、待ってて」

渚はひとりで行ってしまった。あんなことがあったのに、ひとりにするのは心配だったけど、もうだいたいぶ落ち着いたのかもしれない。もしかしたら鳴海効果なのだろうか？

これまで鳴海と二人つきりになったことはあったけど、こうやって小さい部屋の中で二人つきりにされると緊張する。女子ってことを意識するんじゃないくて、鳴海は変な気迫みたいなの

を放ってくるからだ。

沈黙は耐えられない。それに聞きたいこともあった。

「本当に鳴海愛なんだよね？」

普通だったら馬鹿な質問だろうな。

「なんだ藪から棒に？」

そんな風に返されるのが普通だよ。

でも、僕の記憶が正しければ、絶対に鳴海愛は昨日までいなかったはずの存在なんだ。

「鳴海って昨日学校休んだ？」

「影が薄くて悪かったな」

いや、鳴海の影は濃いよ。クラスでは浮いてるけど、それは濃すぎるからなんだ。

そういえば僕と鳴海の関係ってどうなんだ？

前の世界では事件を追うまで関わって来なかったけど、この世界での関係はどうなんだろう？

僕の記憶が改変されてないせいで、どう接していいのかわからないな。もしかしたら、こうやって話すのはじめてだったりして。

渚と鳴海は幼なじみのようなものだった。とすると、僕と渚は付き合ってるんだから、鳴海ともそれなりに関係があると思うんだ。

気にしてたら会話がなにもできない。

初対面だろうがなんだろうが普通に接しよう。初めてでもフレンドリーな人はいるし、逆に友達だったとして変に畏まって

たら変だもんな。

「あのさ、〈クラブ・ダブルB〉って知ってる？」

前の世界の記憶を尋ねてなにか意味があるのだろうか？

でも突然現れた鳴海はほかの人と違う可能性だってある。

「知らないな」

鳴海の答えに僕は落胆した。

でも鳴海は嘘をついているのかもしれない。嘘をつく理由はわかんないけど、そういう可能性だってあるんだ。

僕はさらにたずねることにした。

「じゃあ〈ミラーズ〉って知ってる？」

「それも知らないな」

やっぱり鳴海もこの世界の住人なんだ。それが当然なんだ、この世界では。

鳴海がこの世界に現れたのは偶然じゃないと思う。きっと〈ミラーズ〉が現れたのと関係があるって考えた方が自然だ。

だってその日の今日の出来事なんだから、結びつけない方が変だと思う。ただ鳴海愛自身が何らかの重要な意味を持って現れたかどうかはわからない。

もしかして鳴海以外の人たちも戻ってきたのか？

その可能性はある。

いかなかったことにされた人たちがこの世界に戻ってきたなら、その中の一人として鳴海がいても変じゃない。

月曜日になったらたしかめてみよう。学校でだったら簡単なたしかめられるはずだ。

「いつも様子が違うが平気か春日？」

「えっ？」

鳴海に突然名前を呼ばれた。

最近考え事が多くなって、周りが見えてないことがよくある。今もそうだったみたいだ。

「平気だよ……いや、平気じゃないのかな」

「なにかあったのか？」

「いろいろとね。渚が帰ってきたら話すよ」

「そうか、渚の様子も変だったからな」

僕は重たい表情をした。

起きたことに僕はショックを受けたりはしてないけど、〈ミラーズ〉が現れたって問題は深刻だ。いくら鳴海が頼りになるって言っても、こんな普通の人から見たら超常的なものに巻き込んでいいのだろうか？

巻き込みたくなって気持ちもあるけど、少しでも誰かの手を借りたいてっていう気持ちもある。だって僕だけじゃなにもできないんだ。本当に僕は無力だよ。

それにこれは僕だけの問題じゃなくて、渚にも関わりのあることなんだ。鳴海がいてくれたら渚を支えてくれる。少しでも渚を支えてくれる人がいれば僕も助かる。

話すだけ話そう。深く関わるかどうかは鳴海に任せよう。ずるい方法だと思うけど、それがいいと思う。この流れから言っても、僕が話さなくても渚はきつと鳴海に相談するはずなんだから。

渚がコップ三つと一リットルのペットボトルを抱えながら帰ってきた。別の意味でついていけばよかった。

「あ、おっとと、あつ、あつ、ペットボトルがすべり落ちる！」

渚が叫んだ。

慌てて僕はペットボトルをつかむ。

落ちそうだったのはペットボトルだけじゃなかった。

落ちそうになったコップを鳴海が受け取った。

危なかった。

渚は笑って見せた。

「あはは、涼も愛ちゃんもありがと♪」

いつも渚だ。こういう姿を見ると安心する。でも、こういう姿を見てしまうと、このまま話をしないで帰りたくもなってしまう。

逃げれるものなら逃げたいよ。

きつとそれはできないことなんだ。

渚がコップにジュースを注いでくれた。グレープの匂いがする。

今まで気づかなかったけど、すごいのが渴いてるみたいだ。

いろいろあったし、けっこう歩いたりもしたからな。

一気にジュースを飲み干した僕を見て渚が笑っていた。

「涼、飲むの早い。あたはまだ一口も飲んでないのにい」

そう言いながら渚がコップに口をつけようとした瞬間！

「キャーッ！」

渚の絶叫と共に持っていたコップが宙を舞った。

そのコップから伸びていた人間の腕!?

突然のことに僕は動くことができなかった。

ジュースが飛び散って溢れ、床に叩きつけられたコップが割れた。

もうそのときには腕なんてなかった。

目の錯覚だったって思えるくらいの出来事だったけど、目撃者はひとりじゃないんだ。

僕は渚の身体を抱きしめた。

「大丈夫？」

渚の身体は酷く震えていた。

「もう……やだ……」

震える声で訴える渚を僕は強く抱きしめた。

鳴海はティッシュを割れたコップの上にかぶせていた。

「人間の手だったな」

淡々としていてまったく動じてないところが、やっぱり鳴海だ。

涙を浮かべた瞳で渚は僕を見つめた。

「早くどこかに逃げようよ！」

僕の服をつかむ渚の手に力が入った。

渚の気持ちはわかる。でも――。

「どこに行っても同じだと思う。ここを離れたいのはわかるけど、変に動かない方がきつといい。まずは鏡になりそうな物を全部隠そう、そうすればきつと大丈夫……大丈夫だから」

鏡が関係あるのか確証はないけど、どこに行っても同じって言うのはあつてると思う。

鳴海が僕に尋ねる。

「鏡になりそうな物を隠せばいいのかな？」

僕がうなずいて見せると、深く理由も聞かずに鳴海は素早く行動した。

窓のカーテンをしつかりと閉める。小さな鏡なんかは隠してしまう。テレビには布を隠せた。鏡面になりそうな物はとくにかく手分けして隠した。

さつき腕が出たコップの縁は大きめだった。ギリギリ腕が出るくらいだ。それを考えると鏡面から出てくるときは、ある程度の物理法則に従わなきゃいけないのかもしれない。身体の大きさよりも小さい場所から出てこられない。

本当にそうなのか？

電車のおときはどうだった？

あれは出てきたと言うより、そこにいた人と入れ替わったって感じだった。

考えても駄目だ。そもそもさっきの腕は〈ミラーズ〉だったのかもわからない。とにかく鏡面は危険な気がする。

鳴海が真剣な面持ちで僕を見つめてきた。

「あれが原因か？」

「もっと酷いことがあつたんだ」

さっきのあれは起きて欲しくなかったけど、あれがあつたことで話しやすくはなつたと思う。コップから人の手が出てくる

光景を見たら、どんな話だって信じてもらえらるだろう。

僕は電車の中であつたことを鳴海に聞かせた。ただし僕が元々知っていたことは伏せることにして、見たままのことを話すことにした。

話している間、渚はずっと僕に抱きついたままだった。震えが伝わってくる。

一通り話し終えてから、僕は周りの反応を待った。

深くうなずいて口を開いたのは鳴海。

「正体不明の異質な者に狙われているのはわかった。狙われているのは渚か春日か、それとも二人共なのかはまだわからないな。なにか心当たりはないのか？」

心当たりと言ったら僕は前の世界で〈ミラーズ〉たちと関わっている。渚も関わってはいたけど、そこまで深いところまでは関わってなかった。

「実は……あいつらは〈ミラーズ〉って言うんだ。人攫いをしていて……それ以上のことは僕もよくわからないんだ」

それ以上のことは整理できていない。

〈ミラーズ〉の目的。

前の世界で〈ミラーズ〉たちを操っていたのは……水鏡紫影先生だった。

渚と鳴海に前の世界のこと話すべきなんだろうか？

前の世界では謎の〈鏡〉を使って水鏡先生が〈ミラーズ〉たちをつくっていた。つくっていたという表現が正しいかわからないけど、とにかく人をさらってそのそっくりな〈ミラーズ〉

を作ってたんだ。

目的は全ての人の悩みを解消するとか……だったと思う。いまいちその辺りははっきりしない。なんだかわからないうちに終わって、僕は変わってしまった世界にいたんだ。

渚が僕を見つめた。まだ不安そうな表情をしている。

「あたしたちを助けてくれた人は誰だったんだろう……涼は知ってるんでしょ？」

「名前くらいしか知らないんだ。とにかくどこからともなく現れて（ミラーズ）と戦ってる。僕が知ってるのはそのくらいなんだよ」

僕だってわからないことだらけなんだ。

しばらく誰もしゃべらなくなって、やっと鳴海が口を開いた。

「相手のことがわからない以上は、こちら側は守りに徹するしかないな」

「そうだね僕もそう思うよ」

「今日は二人とも私の家に泊まるといい。両親は何日か帰ってこない予定だからな。こんなことを大人たちに話しても信用してもらえないだろう。そうなれば私たちで解決しなくてはいけないくなる」

私たち……か。やっぱり鳴海は協力してくれる気なんだ。そうなるかと思っていたし、そうなることを望んでいた。でもやっぱり巻き込んでしまったという罪悪感はある。

大人たちに話しても無駄っていうのは当たってると思う。両親ですら他人に思えるこの世界じゃ、みんな部外者を感じてし

まう。渚が近くにいなきゃみんなほやけてしまう。

こうやって協力してくれようとしている鳴海だって……。

最後は自分しか頼りにならないんだ、きつと。

鳴海の家で今夜は対策を練ることになった。

巻き込む人たちは最低限のほうがいい。渚や僕の家じゃ両親たちがいるからな。

とはいえ、今になってみると、女子の家に泊まることになるなんて……しかも、あの鳴海の家だ。女子二人に男一人か、緊張するな。

とりあえず僕は自分の家に服などを取りに帰ることにした。ひとりで大丈夫かと聞かれたけど、二人を押し切って僕ひとりで家に向かった。

狙われているのは僕か渚か？

僕だったとしたら、一人のほうがリスクが少なくて済む。

でもこうやって独りになると心細い。

渚の元を離れてから景色や人々がぼやけてしまった。もう人の顔も判別できない。

たまにほかの人よりもぼやけていない人がいる。そういう人は渚が知っている人たちだ。僕の両親もほかよりマシなほうで、渚が親と接するたびにハッキリとしてきたような気がする。

住宅街を進んでいると、十字路を横切る輪郭のハッキリした人を見た。そういう人を見るたびに少しほっとする。そう思ったのも今回はつかの間だった。

僕は彼女の直接の知り合いじゃない。けど事件のときにその

顔を調べた。事件というのは〈クラブ・ダブルB〉事件だ！

僕は駆け足でその人物を追った。

角を曲がってその背中を捕らえた。

「ちよっと待って！」

その人物が振り返った。

間違いない。

藤宮彩だ！

ありえない……ということもないのか。鳴海も戻ってきたんだ。彼女だって戻ってきてもおかしくはない。

藤宮彩はあの事件で犠牲者となった生徒。一番目に失踪した保健室の水鏡先生は首謀者だったわけだから、おそらくは一番目の犠牲者ということになるのかな？

「なんですか？」

藤宮彩は不思議な顔で僕を見つめた。同じ学校の生徒とはいえ、学年も違うしほぼ初対面のはずだ。会ったとしてもすれ違って程度で記憶には残っていない。

とにかく焦って声をかけちゃったけど、なにを話したらいいんだろう？

「あの、藤宮彩さんですよね？」

「そうですけど……？」

「それだけ確認したかったんです……えっと、じゃあさよなら！」

僕は来た道を全速力で引き返した。チラッと振り返ると、藤宮彩が不思議そうな顔をしたまま、まだこつちを見ていた。慌

てて僕は角を曲がった。

角を曲がってすぐに僕は立ち止まった。

失敗したな。

いきなり声をかけちゃったのも失敗だったけど、僕の家あっちだよ。今から追い抜くのも気まずいな。逃げるときに追い抜かせばよかった。

少しここで時間を潰すか、回り道するか……。

やっぱりこの世界で変化が起きたのは間違いない。

鳴海愛が戻ってきたのも、彼女自身に重要な意味があったんじゃないかって、戻ってきた人たちのひとりだったってわけになるな。

ほかにも戻ってきた人たちがいるかもしれない。

「……ッ！」

僕は息を呑んだ。

いなかったことにされた人たちが戻ってきた……。

だとしたら、もしかして椎名アスカもいるかもしれない！！

アスカが帰ってきた。アスカが帰ってきたんだ。良かった、

アスカが……帰ってきたんだ。

喜びが溢れてきた。

けど、すぐに冷静になってしまった。

じゃあ渚の立場は変わったのか？

変わってない。ついさっき別れたときは、まだ彼女だったんじゃないか。

いや……アスカが帰ってきて、渚との関係性が変わるのだから

うか？

もしかしたらアスカがいたとしても、僕とアスカは何の関係もない者同士……なんてこともありえるはずだ。

僕の気持ちはどうしたらいい？

アスカと渚への気持ちは混在しちゃってるんだ。今まではこの世界にアスカがいなかったら、混在する気持ちは抑えようと思ってたんだ。

元々の関係に正すなら僕は渚と別れるべきだろう。それでアスカと付き合えるとは限らないけど。でも、今の僕にとってはアスカよりも渚が必要なんだ。

渚のことが好きだって気持ちはある。

ならアスカへの気持ちは捨ててしまえばいいんだ。それがきつといいんだ。

とにかくアスカを探そう。話はそれからだ。

僕は急いでアスカの家に向かった。

実は世界はこうなってしまうから、アスカの家に行ってみたことあった。アスカの住んでるマンションの部屋はあった。でもそこにはアスカの両親はいても、アスカの存在はなかったことにされていた。

マンション着いた僕は急いでエレベーターに乗り込んだ。

ドアが開いたと同時にエレベーターから飛び出して廊下を走る。

見慣れたドアの前で立ち止まった。

深呼吸をする。

本当にアスカはいるのか？

インターフォンに伸ばした指が震える。

もしアスカがいたら僕はどうしたらいい？

どんな顔をして会えばいい？

会ってもらえなくてもいいんだ。いるかないか、それを確認できれば今はいい。

よし。

僕はインターフォンを鳴らした。

しばらくしてスピーカーからアスカの母親の声が響いてきた。

《どちら様でしょうか？》

「お宅にお嬢さんは在宅でしょうか？」

《うちに娘などおりませんが……ん、またあなたですか！》

「いえ、あの……」

《うちには娘なんていないって何度も言ってるでしょう！》  
慌てて僕は逃げ出した。

前に来たときしつこくして怒らせてしまったんだ。

エレベーターに乗り込んでから落胆した。

アスカはいなかった。

ほかの人たちが戻ってきたのにどうして？

どうしてアスカだけがいらない？

……まだ戻ってきたのを見たのは二人だけだ。ほかにも戻ってきてない人だっているかもしれないじゃないか。でも、アスカが戻ってこないなんて、どうしてなんだよ。

ゆっくりと下りるエレベーターに揺られながら肩を落とした。

大丈夫、べつに状況が悪くなったわけじゃないさ。なにも変わらなかつただけなんだ。この世界には元から椎名アスカなんていないんだから。

でも期待しただけにショックは大きい。

「……なっ!？」

なにが起きたのかわからず僕は声をあげた。

突然だ、突然、なにかが僕の身に起きた。それがなんだか理解するまで数秒を要してしまった。

体をつかまれている。それも後ろからだ!?

僕の後ろにはあるのは……鏡かっ!?

〈ミラーズ〉だ、〈ミラーズ〉が僕の体を後ろからつかんでいる。

迂闊だった。アスカのことに気を取られて、エレベーターの鏡のことを忘れていた。こんな大きな鏡を忘れていたなんて。

〈ミラーズ〉の指が胸に食い込んでくる。

必死になって腕を外そうとするけど、なんてバカ力なんだ!

〈ミラーズ〉の目的は?

僕を殺したりするならとつくに背後からやられていたはずだ。

まさか僕を連れ去ろうとしているのか——どこに!?

エレベーターのドアが開いた。それを見てすぐに叫んでいた。

「助けて!」

誰だかわからなかつたが、誰でもいいから助けて欲しかった。

エレベーターに乗り込んできた彼は、慌てず迅速に動いた。

まるではじめから対処法を心得ているようだった。

いや、きつと彼は心得ていたんだ。

影山彪斗はすぐさま僕の後ろの鏡を叩き割った。

すぐに僕は解放され、床に散らばった鏡の欠片が目に入った。割れた鏡たちに映る不気味な顔。

包帯で目隠しをした（ミラーズ）の顔が、鏡の欠片一つ一つに映っていた。

呆然とする僕の腕を影山彪斗が引っ張って、エレベーターの外まで引きずられた。

僕の背後でしまったエレベーター。

「ありがとう、助けてくれて」

「どういたしまして」

影山彪斗はすぐく落ち着いている。こうでなきゃ僕を助けられなかったかもしれない。

廊下のフェンスから遠くの景色を眺めた。

今回は僕のミスだ。町中には鏡のなるもので溢れているんだ。ここから見える家の窓だって、車の窓だって、もっと気を配るべきだった。わかっていたはずなのに、できないんだ。

「大丈夫かい？」

横から影山彪斗が声をかけてきた。

僕はうなずいて見せる。

「まあ……なんとか」

「僕のこと覚えてくれてかい？」

「影山彪斗だろ」

「そう、君が覚えていてくれたから、今度は前より楽に君の前

に現れることができた。もう少し人が来なくて安全な場所に行こう」

歩き出す影山彪斗に僕はついていった。

階段を上る影山彪斗が向かったのは屋上だった。屋上の前には鍵の掛かった扉があったけど、よじ登れば簡単に越えられる物だった。

まず影山彪斗が扉を越えた。

「登れるかい？」

彼は手を貸そうとしたけど、僕は遠慮して自力で扉を登った。

屋上は広くてなにもなかった。もちろん鏡になりそうな物もない。ただ万が一（ミラーズ）たちが下の階から現れたら逃げ場はないけど。

影山彪斗が立ち止まり、振り返って僕を見た。

「さて、まずは僕が何者であるかを話そう」

「なんで僕の前に現れたの？」

「僕らと同じ、弾かれたモノだからさ。とにかくまずは僕の話聞いてくれよ。前はどこまで話したかな？」

「まだ名前しか教えてもらってないよ」

「そうか、すまない。記憶障害がよく起こるせいで苦労する。なら初めから順を追って話そう」

影山彪斗は少し間を置いてから、一気に話をはじめた。

「まずは君の置かれた状況からだ。世界分裂化現象と言って、世界は人の数だけあり、分裂を続けている。もしも三人の人間がいて、世界の数が二つしかなかった場合、君のような、弾か

れたモノが余ってしまうことになる。たいていの場合は、弾かれたモノは自分自身の存在を保てなくなって消失してしまう。それは自分自身を映す世界という鏡がなくなってしまうからだ。ここまではわかるかい？」

わかるようなわからないような感じだ。今いるこの世界が僕の世界じゃなくて渚の世界なんだってことは理解しようと思えばできる。それに当てはめて考えれば影山彪斗の話も意味のわからないことではない。けど、言ってることが正しいかどうかはわからない。

「僕が、弾かれたモノとかいうのだとしたら、なんで僕は消失してないの？ 普通はするんでしょ？」

「消失しない方法は自分を映すモノを見つけること。君の場合はこの他人の世界だ。この世界のホストは君のことを強く想っているんだらうね、それだけ強く映すことができる」

今まで僕に起きていたことを考えればそれも理解できる。やはり僕は渚によって生かされてるってことなんだ。

さらに影山彪斗は話を続ける。

「僕らの目的はまず、弾かれたモノの保護と消失を食い止めること。それから〈ミラーズ〉との戦い。最終的な目標は自分の世界を新たに構築することになってる。大雑把にはこの三つかな」

「〈ミラーズ〉との戦いって、あいつらはいったい何なの？」  
「プラスとマイナス、陰と陽、分裂しようとする力があるなら、その逆の力もあるっていう当然の摂理さ。世界分裂化現象と

さっき言ったけど、つまり世界は元々一つだったという仮説になってる。〈ミラーズ〉は大きな枠組みでいう世界の意思で、世界を一つに戻そうとしている……という仮説になってる」

「仮説ね……」

「ちっぽけな人間じゃそう簡単に世界の摂理をすべて解明することはできない。とにかく〈ミラーズ〉は僕らとは逆の意識を持って活動しているのだから、戦わなければいけないのは必定的なさ」

すでにいろいろなことを体験しているせいで、だいたいの話は呑み込めた。

影山彪斗の表情が真剣になった。

「そこで君に問う。僕らの仲間にならないかい？」

「仲間になったら僕はなにをすればいい？」

「さっき話した僕らの目的に付き合ってもらおう」

その中には〈ミラーズ〉との戦いも含まれていた。

もう僕は〈ミラーズ〉に狙われている。さっきエレベーターで襲われたことを考えれば、僕自身が襲ってきたのは確実だ。なら逃げるか戦うかしかないじゃないか。

「仲間になるよ」

「本当にいいんだね？」

「すでに危険と隣り合わせなんだ。必要に迫られて僕はその選択肢かできないよ」

「ならこの世界を離れよう」

「えっ？」

僕は渚のこの世界によって生かされてる。だとしたら――。

「ここを離れるなんて自殺行為じゃないか！」

強くいう僕に影山は首を横に振って見せた。

「この世界以外でも君が存在できる術を僕らは持っている」

「どんな方法？」

「世界の分裂や、弾かれたモノの出現は今にはじまったことではない。ずっとそれを研究したり戦い続けている人たちがいるんだ。そして、ある偉大な魔導士が、ついに疑似世界を創り上げたんだ」

「世界を創るなんて……」

「そう、とてつもなく凄い偉業だよ。誰も真似できない、だから疑似世界はまだ一つしかない。その世界に僕ら、弾かれたモノは身を寄せ合って、互いを強くに認識しながら暮らしている。僕らが存在するためには、他人に意識してもらおう要素も重要なんだ。だから君にも僕らと暮らし、深く付き合ってもらわなくてはいけない。君が仲間になるというのなら、この世界を捨てて僕らの世界に来てもらう」

この世界を捨てる。

もしかして渚にも会えない？

ほかの人たちにも会えないってこと？

「この世界の僕の知り合いにはもう会えないってこと？」

「僕らの世界にもいるにはいるが、みんなゴーストのようにはばやけた存在さ」

渚が近くにいないときの風景。そういうことなのだろう。彼

らの世界には渚もいないも同然ということなんだ。

「もうこの世界には戻って来れないの？」

影山彪斗だつて僕に会いに来たんだ。できないことはないと思う。

「しないほうがいい。今僕がこうして君に会いにこの世界にいること自体、とてもリスクのある行為なんだ。この世界やこの世界のホストに重大な危険を及ぼす可能性がある。だからなるべく僕らは他人の世界には干渉しない。弾かれたモノを保護しに来て、新たな弾かれたモノを生んでしまったら。だ。そもそも、弾かれたモノの君がこの世界に居座っていることが悪影響を与える」

僕が悪影響……。

渚のことを考えるならさっさとこの世界から出て行ったほうがいいってことか。

「わかったよ。今すぐあなたたちの世界に行くよ」

本当は最後に渚の顔を見たかった。でもそれもきつといけな  
いんだ。干渉すればするほど悪影響を及ぼす。

渚が〈ミラーズ〉に襲われたのも僕のせいなんだ。

この世界から僕がいなくなったらどうなるんだろう。

いなかったことにされて渚の記憶も改変されるんだろうか。

もう決めたんだ。

さよなら渚。

ありがとう渚。

影山彪斗が僕に手を差し伸べた。

「さあ、行こう」

その手をつかんだ瞬間、世界が歪んだ。

この感覚は僕がこの世界から消えそうになったときに近い。  
目が回る。

気持ち悪くて吐きそうだ。

今さらだけど僕は後悔した。

影山彪斗を信用してよかったのか？

頼りになる人が欲しかった。だから僕はすぐに影山彪斗をすぐに信用してしまった。ヘミラーズからも助けてもらったせいもあるだろう。

もう引き返せないのだから考えても仕方ないかもしれない。

世界が廻る。

体がガクンと揺れた。

ほかの世界に移動したってことなのか？

目を開けると同じ場所だった。

ここが影山彪斗たちの世界なら……最悪だ。

屋上に群がっている〈ミラーズ〉たち。

万が一下の階から——という悪い予想が現実になってしまった。

影山彪斗は深く息を吐いた。

「僕らの世界に行くのは一時中断だ。こいつらを倒すか巻くかしないと……」

倒すのも巻くのも無理そうに見える。ざっと〈ミラーズ〉の数は何十人くらいいるんだろう。数えるの大変なくらいだ。二

〇人か三〇人はいそうな気がする。

〈ミラーズ〉の群れの中から誰かが現れた。

——水鏡先生!?

またか、また〈ミラーズ〉の影には水鏡先生がいたのか。

ということとは!?

鳴海愛や藤宮彩は〈ミラーズ〉の可能性が高い!

しまった渚が危ない!!

鳴海愛が〈ミラーズ〉の可能性を疑っていたのに、なんで二人を残して来ちゃったんだ。クソッ、あの鳴海なら平気な気が

したんだ……気がただけじゃ駄目じゃないか！

こいつらをどうにかして一刻も早く渚の元に行かなきゃ。でも、もしかしてもう渚は……。

ここで考えても仕方ない。

とにかく今はこの状況を打開しないと前に進めない。

僕は焦りながら影山に顔を向けた。

「どうする？」

「それを今考えている」

「いつも〈ミラーズ〉たちと戦ってるんだろ！」

「積極的な戦闘は控えている。戦力も作戦もないのに無謀な戦いは犠牲者を出すだけだ」

僕ら二人のやり取りを見て水鏡先生が笑った。

「あらあら仲間割れかしら。私たちの仲間になれば、そんな争いもなくなるわ。さあ、ひとつになりましょう」

水鏡先生が〈ミラーズ〉を引き連れて、ゆっくりとゆっくりと近付いてくる。

逃げ場はない。

影山は〈ミラーズ〉たちを見ながら僕に話しかけてきた。

「〈ミラーズ〉と戦う決意はあるかい？」

「あるに決まってるじゃないか」

「本当だね？」

「……………」

なんでそんなに念を押すように確認するんだろうか？

影山の口調は重い。

「戦うというのにはゲームじゃないんだ。この手で相手を殺すってことなんだ」

その光景はファントム・ローズの物より残酷だった。

ファントム・ローズはまるで悪夢を見ているような光景。無機質な仮面の人形が、〈ミラーズ〉という人形を刻んでいく。あれは夢や幻を見ている気になるとどこか美しく恐ろしい光景なんだ。

でも、今日の前で起きている光景は違った。

人の顔を持った者が〈ミラーズ〉たちを殺していく。

影山彪斗は隠していた鉤爪を装着していた。それで〈ミラーズ〉を一体一体刻んでいくんだ。彼の服や顔には返り血が飛んでくる。

内臓を深く抉った鉤爪。影山は表情ひとつ変えない。白い仮面よりも、この無表情な人間のほうが恐ろしい。

足がすくんで動けない。

ファントム・ローズのときは平気だったのに……。

「散らしながら逃げるぞ！」

遠くでだれかの声がする。

「聞いているのか春日涼！」

影山彪斗の声だ。

ハッとして僕は我に返った。

未だ恐ろしい光景が練り広げられている。

血しぶきを浴びて真っ赤な顔をした影山の姿。

生臭い血の臭いで吐きそうになる。

「走って逃げる春日涼！」

影山の怒号が飛んだ。

急いで逃げようとしたときだった。

〈ミラーズ〉の波が影山を呑み込んだ。

まるでアリの大群にたかられたように呑み込まれた。

「影山！」

僕は叫んだ。

刹那！

血の臭いが辺りから消え、薔薇の香りが鼻を突いた。

——ファントム・ローズ！

白薔薇の矢が空から降り注いだ。

嗚呼、〈ミラーズ〉たちが細切れにされていく。

なんて残酷なんだ……でも美しい。

インバネスをはためかせ、白い仮面の主が薔薇の鞭を振るう。

白かった薔薇が血を吸って紅く染まる。

水鏡先生が叫ぶ。

「ファントム・ローズ——！」

その場に佇むファントム・ローズ。

〈ミラーズ〉は誰一人生き残っていないかった。

影山は自分の身体を抱きかかえながら床から立ち上がった。

「あれが……ファントム……ローズ」

その口ぶりは存在は知っていても初めて見たようだった。

水鏡先生は怒っている。見るからに邪悪そうな顔をして暗黒

の炎を滾らせている。

「また私の邪魔をするのファントム・ローズ？」

「君たちが人の意思に反する限り何度でも何度でも邪魔をする」

「私の行っていることは世界の意思で、人々の総意よ！」

水鏡先生がファントム・ローズに襲い掛かった。その手にはナイフが握られている。

無慈悲の白い仮面が、そのときはなぜか哀しそうに見えた。

薔薇の鞭がしなやかに宙を舞った。

「ぎゃあああああつ！」

水鏡先生の絶叫。

ナイフを握った手首が地面に落ちていた。

失った手首から噴き出す血で顔を真っ赤に染めながら水鏡先生は咆えた。

「ファントム・ローズ！ ファントム・ローズ！ ファントム・ロー……ーズ！！」

手首から吹き出していた朱が急に黒く変わった。

墨のように黒い液体がばらまかれ、水鏡先生の全身を暗闇に染めていく。

「ファントム・ローズ！ あなたは人の闇が見えていないわ。病んだ心を理解してはいないわ。人々の想いに目を背けてヒーロ気取りのつもり？」

そして、水鏡先生は壊れたように高笑いをはじめた。

黒い液体が海のように広がっていく。

なぜかその液体を見ているだけで胸焼けがする。

「きゃははははははははっ、ファントム・ローズ、私は世界の意思なのよー！」

黒い液体が生き物のように動きはじめた。

まるで蛇のように、悪魔の化身の蛇のように黒い液体が踊り狂う。

黒い液体が僕のほうまで飛んできた。

インバネスが風を起こした。

僕の前に立ちふさがったファントム・ローズ。

飛んできた黒い液体をファントム・ローズが防いでくれた。

けど、着ていたインバネスは腐ったように溶けてしまっていた。

あの黒い液体はいつたいなんなんだ？

血じゃなかったの？

なにが起ころうとしている？

やがて黒い液体が集約していく——水鏡先生に向かつて。

黒い服を着た水鏡先生が髪を振り上げてこちらを見た。

——白い仮面。

まるでそれはファントム・ローズと同じ。

白い仮面で顔を隠した水鏡先生がそこにいる。

影山がつぶやいた。

「……〈ファントム〉」

ファントム？

水鏡先生に向けられた言葉だ。

ファントム・ローズも同じようにつぶやいた。

「新たな〈ファントム〉だ」

ファントム？

ファントムっていったいなんなんだ？

影山が再びつぶやく。

「ヒトが〈ファントム〉になる瞬間をはじめて見た」

ファントムになる？

水鏡先生がファントムになったってことだろ？

ファントム・ローズの、ファントムも同じ物なのか？

ファントム・ローズが異質な存在だっていうのはわかる。でも〈ファントム〉になるってどういうことで、なったらなにがどうなるのかわからない。

いったいなにが起きた？

水鏡先生が口を開く。

「私の名前はファントム・ミラー」

その声は水鏡先生の物だけど、そうじゃないようにも聞こえる。女のような男のような、ファントム・ローズにも似ているけど、それとも違うもの。

あれ……おかしい……急に水鏡先生の顔がよく思い出せなくなった。記憶の浮かぶ映像がぼやけてしまっている。

「ファントムってなんなんだ」

僕がつぶやいたのを聞いてファントム・ローズが答える。

「英語のファントムは幽霊や幻影を意味している。場所の記憶とも呼ばれ、同じ場所と同じ事を繰り返すような、特に劇場などに出没する幽霊のこと。それ以上のことは私にもわからない」

「私にわからないって、あなたも〈ファントム〉じゃないの?」

僕がそう尋ねると仮面は酷く哀しそうな顔に見えた。

「自分が自分のことを全部知っているなんてことはありえない」

ファントム・ローズは口調も哀しそうだった。

そこへファントム・ミラーが口を挟んできた。

「すべてがひとつになれば、全てを知ることができるわ」

静かにファントム・ローズが尋ねる。

「個人の意思はどうする?」

「すべてがひとつの同じ存在なのだから、はじめから個人なんでもの存在しないわ。はじめから存在しないものなど誰も気にかけない」

この世界にはじめからいなかったことにされた人たちは、この世界の人たちに気にかげられることもない。そういう人たちは気にかけているのは僕だけだ。世界が変わっても、記憶が改変されても、証拠が残っていないければ無かった事と同じ事。

水鏡先生……今はもうファントム・ミラーは、すべてをひとつにしようとしている。ファントム・ローズはそれと戦い、影山たちもそれと戦い、僕もミラーたちは敵だと思ってる。でも、向こう側に取り込まれてしまえば、そんな感情も逆転してしまうんだと思う。

ますますなにか正しいのかわからなくなる。

世界も記憶も感情も、変わってしまえばそれが正しくなる。

正しいとか正しくないとかじゃないんだろうな。

どうすればいいのかわからなくなる。

世界がこうなってしまうからずっとそうだ。

大丈夫、答えはちゃんとわかってるはずだ。

現実だろうが夢だろうが関係ないように、今を見つめていけば生きていける。

僕は今、〈ヘミラーズ〉たちを敵と見なしている。だから向こう側には取り込まれない。それでいいんだ。

まずはこの事態を切り抜ける。それから嫌な予感がする渚の元へ行く。ある程度片付いたら影山たちの世界に行って、彼らと行動を共にする。まずはそこまで決まってる。

ファントム・ミラーと戦う術は今の僕にはない。ここはファントム・ローズに任せるべきなのか？

なら影山と一緒に――僕は振り向いて影山に目を配った。〈ヘミラーズ〉たちにだいぶやられたらしく、まだ弱々しく立っている。彼といっしょにこの場から逃げるの得策か？

「影山！」

僕は彼に声をかけた。

だが、帰ってきた言葉は事態を急変させた。

「こんなときに……タイムリミット……すまない春日涼……」  
影山の輪郭がぼやけていく。

また消える。

霞のようになって、やがて完全にそこから影山彪斗は消失した。

本当にこんなときなんだ！

いや……冷静になれ、段取りが大きく変わったわけじゃない。ここを切り抜けて渚の元に行くんだ。影山がいなくても問題はないはずだろ？

僕はファントム・ローズに声をかける。

「ここは任せても平気？」

「もとより君の力は借りていない」

まったくその通りだ。僕なんてここにいなくてもいなくても同じだ。

なら気負いせずにこの場を離れられる。

僕は階段に向かって駆け出した。

ファントム・ミラーが動いた。

振り切れる！

素早くファントム・ミラーの横を抜けて、階段まであと少し

と言うところだった。

「涼ちゃん待って！」

女の子の声。

懐かしく思える声だった。

僕がその声を聞き間違えるはずがない。

それは彼女の声。

今はいなくなってしまったはずの彼女の声。

思わず足を止めて振り返ってしまった。

それはしてはならない行為だった。

なぜなら見てはいけないモノを見てしまったからだ。

そこに立っているのはファントム・ミラーのはずだった。

なのにその顔は椎名アスカだったんだ。

そんな……どうして……。

「本物のアスカなのか……？」

自然と尋ねてしまっていた。

「そうだよ涼ちゃん」

声も顔も、背格好までアスカだった。これがアスカじゃないなんていうなら、なにがアスカじゃない？

中身もアスカなのか？

「ねえアスカ覚えてる？」

「なあに涼ちゃん？」

「夏休みはじめのデートに行った場所？」

「なに急に、もしかして涼ちゃん忘れちゃったの？ ひどい、水族館楽しかったのに」

あつてる。

過去のこと、起きたことだから当てられたのかもしれない。

「じゃあ、気が早いけど冬休みの予定を立ててたの覚えてる？」

「それも忘れちゃったの？」

「いや……とにかく答えてよ」

「雪が見たいから寒いとこ行こうって言ったたら、寒いのがダツて涼ちゃんが言うから、温泉がいいって言ったたら、それも涼ちゃんが温泉なんてやめとけ、高校生の分際なら温泉ランドだつて……それで……ええつと……結局どこ行くことにしたんだつ

け？」

アスカは笑って見せた。

完璧な記憶だった。どこに行くか決まらなかったんだよ。引っかけ問題なんて出してごめん。

これではつきりした。

今、僕の目の前にいるのは椎名アスカだ。

でも……さっきまでファントム・ミラーだっただろ？

姿も記憶も同じならアスカなのか？

逆に姿も記憶も同じなのにアスカじゃないって言えるのか？  
確実にさっきまではファントム・ミラーだった。

でも姿も記憶もアスカなんだ……。

なにが違う？

世界も記憶も改変されたのわからなければ、それがすべてなんだ。

僕はそこにいるアスカがアスカではなかったことを知っている。

でも、でも……姿と記憶が同じならアスカじゃないか！

僕はそこにいるアスカを否定したいのか、それとも肯定したいのか？

頭が混乱する。

「どうしたの涼ちゃん？」

優しい瞳でアスカが僕を見つめている。

クソッ！

「僕は騙されないぞ。おまえはファントム・ミラーだ！」

「わたしはアスカだよ？」

「違う、おまえはファントム・ミラーだ！」

「そう、わたしはファントム・ミラーでもあるよ」

「えっ!？」

「みんなひとつで同じ存在」

「な……なにを……!？」

ファントム・ミラーがアスカを取り込んでいる？

いや、ファントム・ミラーもアスカも同じ存在？

水鏡先生は？

椎名アスカは？

まさかほかの人たちも？

そんな……これが水鏡先生が言っていたことなのか？

ファントム・ローズが動いた。

薔薇の鞭が振るわれようとしていた。

僕はアスカの前に立って両手を広げた。

「やめてくれ！」

薔薇の鞭が僕の頬を掠めた。

一筋の血が流れる。

ファントム・ローズの身体からはまだ殺気が漲っている。

「それが椎名アスカかどうかは難しい議論だ。しかし、倒さなくてはいけないことに変わりない。それが君の心を傷つけることであっても、やらなくては守れないモノがあるのだ」

またファントム・ローズは鞭を振るおうと構えている。

アスカが僕の後ろで震えているのをちらっと見た。

「涼ちゃん怖いよ……」

アスカの姿と記憶を持っているなら、やっぱりそれはアスカなんだ。だから僕はこのアスカを敵としては見れない。

「危ない！」

突然ファントム・ローズが叫んだ。

僕は真後ろから殺気を感じた。

鞭が宙を跳ねた。

「ギャア！」

後ろから悲鳴が聞こえた。

すぐに振り向くと、すでにアスカの姿はなく、白い仮面のファントム・ミラーがいた。

ファントム・ローズが追撃する。

薔薇の香りが辺りを満たす。

次の瞬間、目が潰れるかと思うほどの閃光が放たれた。

目が見えない。

気配がする。

「逃げられた」

その声は……ファントム・ローズだろうか？

逃げられたってことは、ファントム・ミラーについてことに決まってる。

まだ目がチカチカするけど、だんだんと視界が戻ってきた。

目の中にファントム・ミラーの人影が残像みたいに残ったまままだ。瞬きするたびに見える。

ファントム・ミラーがいなくなったんなら、僕は渚のところ

に行かなきゃ！

ふと周りを見渡すとファントム・ローズの姿もいつの間にかなくなっていた。

薔薇の残り香だけが漂っていた。

僕は渚のもとに急いだ。

鳴海愛は〈ミラーズ〉かもしれない。もしそうだったら渚が危ない。

その可能性は否定したいけど、藤宮彩が現れて、水鏡紫影が現れて、鳴海愛もいなかったはずなのに現れた。

藤宮彩は被害者だったんだから、前の世界の時に〈ミラーズ〉にされているはずだ。

いなかったことにされた人たちは、みんな〈ミラーズ〉に係してたんだから、鳴海愛もいなくなったってことは……。

考えれば考えるほど鳴海愛は〈ミラーズ〉じゃないか！

鳴海愛はいつ〈ミラーズ〉になった？

前に最後に会ったのは……水鏡先生のマンションで別れたっさりだ。その後に……その前から〈ミラーズ〉だったって可能性もないわけじゃない。

とにかく急いで渚のもとへ！

鳴海の家付近に近付いてきたっていうのに風景がぼやけている。

もしかしたら、もうここにはいないのか!?

いや、これはおかしい。

渚が馴染みの場所はハッキリとしているはずなんだ。なのに……どうして、風景がハッキリしない？

ん？

今一瞬だけ風景がハッキリしたような？

どうにか鳴海の家についた僕は焦って玄関のドアをすぐに開けようとした。鍵が掛かっている。鍵をかけるくらいは当然だ。

インターフォンを押すと、すぐに声が返ってくる。

《どなたですか？》

いつもよりも丁寧口調だけ鳴海の声だ。

「僕だよ、春日だ」

しばらくしてドアの向こうから気配がした。

それからまたしばらくして、チェーンを外す音がして、やっ  
とドアが開いた。

目の前に鳴海がいる。けど焦っちゃダメだ。

鳴海が不思議そうな顔をしている。

「どうした？」

「なにが？」

もしかして僕が疑っていることが顔に出てるのか？

「荷物はどうした？」

「えっ……忘れた……けど別になくても平気だよ」

そう言えば荷物を取ってくるって帰ったんだった。

「なにをしに帰ったのだか」

「親に友達の家泊まるっていうのは伝えてきたから」

こうでも言わないと本当になんで外に出たのかわからなくなる。

鳴海が自分の部屋に戻っていく。

家中はすでに鏡面になりそうな物は隠されている。正攻法で

外からへミラーズがやって来ることはあっても、突然現れるってことはないだろう。

鳴海の部屋に入ると僕は渚の姿を探した。

一瞬いないのかと焦ったけど、渚はベッドで寝ている様子だった。

安らかな顔をして寝ている。

鳴海もその顔を眺めながら言う。

「疲れていたのだな」

きつと精神的に。

こうやって安らかに寝てるってことは、鳴海のことを信頼してるって証拠なんだと思う。

とりあえず渚は無事みたいだ。

でも疑惑は晴れたわけじゃない。

「大事な話があるんだけど？」

僕は真剣な顔をして鳴海に言った。

「どのような話だ？」

やんわりと聞くべきか、それとも強く出るべきか。間違ったらそれが一番だ。でもへミラーズだったら、正体を現してからそうでしたじゃ取り返しが付かない。

よし。

「おまえへミラーズなんだろ？」

「突然なにを言う？」

鳴海は驚いた顔をした。でも簡単に正体を明かすわけがないし、演技ってことは十分考えられる。

「〈ミラーズ〉は本人そっくりに化けられるんだ」

「そうなのか？」

「とぼけるなよ、おまえは〈ミラーズ〉だ！」

「なぜそう思う？」

鳴海は態度を崩さない。いつもと同じ、焦っている様子もない。

さっきアスカを見たばかりで、どんなにそれが鳴海愛そのものに見えても信じられない。

ここにいるのは鳴海愛だ。でも鳴海愛の姿と記憶を持った〈ミラーズ〉である鳴海愛かもしれない。

「話すと長くなるけど、僕の記憶では鳴海は昨日までいなかったはずの存在なんだ。でも今日になって突然現れた」

「言っていることがわからないな。私は昨日もいたぞ、学校で会っただろう？」

「世界も人の記憶も変更されてしまって、普通に暮らしている人たちは何の疑問も持たない。でも僕はその外にいる存在になつてしまったんだ。だから君が昨日までいなかったことを知っている」

「そんな馬鹿な話があるわけないだろう」

「でも〈ミラーズ〉は見ただろう？」

「それとこれは違う次元の話だろう？」

たしかにそうだけど、〈ミラーズ〉以外にも信じられないことが起きてるんだ。

とにかく話を続けよう。

「鳴海以外にも昨日までいなかった人物に今日会ったんだ。みんな〈ミラーズ〉に関係していた。だから当然思うだろ、鳴海も〈ミラーズ〉なんじゃないかって？」

「私が〈ミラーズ〉のはずないだろう。そんな言葉や存在も今日初めて知ったのだからな」

どうすれば〈ミラーズ〉だって証明できる？

逆にどうすれば〈ミラーズ〉じゃないって証明できる？

今日から現れたんだから昨日のことを聞けば……いや、記憶が改変されたり、そういうことが起きてたら〈ミラーズ〉の鳴海にも昨日記憶があるわけで、そもそも昨日の話なんてされても改変された記憶が僕にはない。

本物の鳴海愛だったら、昨日の記憶は絶対にあるけどから、一か八か聞いてみるしかないか？

「昨日学校で小テストあったけど、あれの問い一の内容覚えてる？」

「もう覚えてないな」

小テスト自体がなかった。いくら世界が改変されても、なかったテストがあるようになるなんてことが起きるか？

いなくなっただのは教師じゃないんだ、生徒なんだ。

「昨日は小テストなんかなかったよ」

「だから覚えてないと言ったのだ」

「は!？」

あまりの苦しい返しに僕は驚いてしまった。ただの言い訳にしか聞こえない。

鳴海愛は〈ミラーズ〉なのか？

「どんどんと黒くなる一方だ。でも確証には至らない。もっと確実な方法はないのか？」

「じゃあさ、昨日学校であったこと話してみてよ」

「一時限目は数学、二時限目は英語」

「そんなこと聞いてるんじゃないよ。起きた出来事とかを話して欲しいんだ」

「……………」

ついに鳴海が押し黙った。

〈ミラーズ〉は記憶の改変の影響を受けないってことなのか？

そもそも本当の鳴海愛じゃないから、記憶の改変なんて関係ないのか？

「どちらにしても答えられないってことは、本当の鳴海愛じゃないってことなんだ。」

「やっぱり〈ミラーズ〉なんでしょ？」

「私は〈ミラーズ〉ではない」

「だって昨日のことを答えられないのは変じゃないか！」

「それでも私は〈ミラーズ〉ではない」

「だったらそれを証明できるの？」

「魔女裁判で魔女ではないと証明するのはとても難しい。そうであることを自ら証明するのは簡単でも、そうでないことを証明するのは容易ではないことだ」

その言い分はわかる。

その逆の鳴海が〈ミラーズ〉だってことを僕は完璧には証明できてない。それでも今までのことを総合して考えると限りなく黒なんだ。

告白してもらうしかない。

でも魔女裁判は告白によるえん罪をつくったんだ。告白が必ずしも正しいとは限らない。でも今の場合は告白が必要なんだ。

「昨日のことは言えないんでしょ？」

「それは認める」

「そこまで認めたなら〈ミラーズ〉だって認めればいいじゃないか？」

「私は〈ミラーズ〉ではない。それは真実だ」

真実……なんて言葉が今の世界、今の僕にどれほど確実なものなのだろうか？

「そうじゃないとか、真実だとか言われても、そんなの証明にはならないよ」

「春日と私には共通の記憶がある。それは単なる記憶というわけではない。春日と私は〈クラブ・ダブルB〉の事件を追っていた」

「ちよっと待って……それは……」

追っていたって？

僕は〈クラブ・ダブルB〉って単語は出しても、その詳細を話した覚えはない。

そして、鳴海は静かに言う。

「〈ミラーズ〉には欠けているモノがある。それは体験だ」

「え？」

今の鳴海の発言は……〈ミラーズ〉を知ってる発言だ。

さらに鳴海は話を続けた。

「姿も記憶も同じなら、なにが違うのか……それを私は体験だと思っっている。春日と私は同じ体験をしている」

「前の世界の記憶が……あるの？」

それこそ〈ミラーズ〉だって証拠……じゃないかもしれない。  
「前の世界という言い方は適切ではない。あれは春日涼の世界だ」

僕にも改変された昨日までの記憶はない。そして、本人は〈ミラーズ〉ではないと言っている。だとしたら――。

「もしかして、鳴海も、弾かれたモノ」なの？」

それならつじつまが合う。

あれ……僕の世界の記憶も持っていて、弾かれたモノ」だとしたら――。

「僕の世界で会っていた時点で、弾かれたモノ」だった!？」

弾かれたモノ」が存在するには、それを映すモノが必要。

僕は鳴海にたいして強い想いを持っていなかった。なのになんで鳴海は僕の世界にいた？

もしかして影山彪斗の仲間なのか？

だったら明かしても問題ないはずじゃないか？

余計に頭が混乱してきた。

僕が悩んでいるとベッドのほうで音がした。

目を擦りながら起き上がる渚。

「あれ……いつの間にかあたし寝ちゃった？」

すぐに鳴海は渚のベッドに腰掛けて近付いた。

「きつと疲れていたのだ。もう大丈夫か？」

「うん、頭がぼーっとしてるけど、ぜんぜん元気元気♪」

渚が起きてしまった。この状態じゃ鳴海との話は続けられない。別の場所に鳴海と行って渚をひとりにするのも心配だ。

まるで子供にするように、鳴海が渚の髪をなでている。

鳴海は〈ミラーズ〉なのか？

僕はまだ疑うのか？

目の前の鳴海を見ると〈ミラーズ〉だとは思いたくない。

穏やかだった部屋に突然張り詰めた空気が充満した。それを発したのは怖い顔をした鳴海だ。

——音？

外から叫び声が聞こえた。

次にしたのは心配！

階段をだれかが上がってくる音だ！

部屋のドアノブがガチャガチャと音を立てた。ドアにはカギが掛けてある。ここまで来たんだ、それも気休めだろう。

鳴海が自分の背に渚を隠した。

「私を守るから心配するな」

渚は無言のまま震えながらうなずいた。

豪快な音を立てながらドアがぶち破られた。

外れたドアがまたも音を立てながら床に倒れる。

僕は息を呑んだ。

ドアの向こうに立っていたのは〈ミラーズ〉を引き連れたアスカだった。

「涼ちゃん会いに来たよ。でもヒドイ……たくさん毘が仕掛けであって、たくさん〈ミラーズ〉が壊れちゃった」

毘？

アスカが僕に近付いてくる。

「ねえ涼ちゃん。そこにいる女が涼ちゃんのこと取ったんだよね？」

アスカの視線が向けられたのは渚。

「え？」

渚は驚いた顔をした。

さらにアスカが近付いてくる。

もう騙されない。目の前にいるのはファントム・ミラーなんだ。わかってる、わかってるけど……動けない。

だってそこにいるのは椎名アスカなんだ。

薔薇の香りが部屋に充満した。

まさかファントム・ローズ!?

どこにいる!?

急いで僕は部屋中を見回した。

驚いた顔をしている渚。

「愛……ちゃん？」

渚を守るように前に立っていたファントム・ローズ。

そして、この部屋から消えた鳴海愛。

「君はそこを退け春日涼」

そうファントム・ローズに言われても僕は動けなかった。  
驚いてしまった。

でも、それは驚くことじゃなかった。

なんで今まで同じ存在だって認識できなかったんだろう？

今ならこうやって同じだってわかるのに……。

声だって鳴海愛じゃないか。

それなのに、今まではどうして男だか女だかわからない声だ  
と、思ってたんだろう。

理由はわからないけど、僕はファントム・ローズを鳴海愛だ  
って認識できないようになっていた。

それが今ならわかる。

はつきりと認識できるんだ。

その白い仮面でさえ、僕には鳴海愛の顔に見える。

アスカが僕の背中にしがみついた。

「怖いよ涼ちゃん。涼ちゃんならあたしのこと守ってくれるよ  
ね？」

僕とアスカの様子を見ていた渚の様子が変だ。

「どういうこと……涼とその人って……？」

世界が揺れた。

いや違う、僕が見ている世界だけが揺れたんだ。

大変だ、渚の感情が乱れてる！

「渚、大丈夫だよ、なんにも心配いらなから！」

苦しい言い訳みたいじゃないか。

アスカが笑った。

「わたしと涼ちゃんは恋人同士なの。あなたがそれを取ろうとした」

そう言ってアスカは僕と腕を組んで……僕と唇を重ねた。

渚の瞳から涙が零れた。

「ウソだよね……だってあたし……知らない……」

世界がぼやけていく。

目が回る。

頭が割れそうだ。

アスカが僕の身体から離れた感覚があるけど、もう周りでは起きてるのかわからない。

薔薇の香りだ。

悲鳴が聞こえる。

世界が廻る。

真っ白だ。

なにもかも真っ白だ。

そして……僕は世界から追放された。

今日も暗い。

なにも見えない……真っ暗だ。

今日っていうのは間違ってるかもしれない。

あれからどれくらい経ったんだろう？

時間が長く感じられるだけで、まだ一日も経っていないかもしれない。

それとも三日くらい過ぎたのか……それとも一週間が過ぎて

しまっているかもしれない。

暗闇の中じやなにもわからない。

そう言えばお腹が空いてないな……。

ということはまだ一日も経っていないかもしれない。

ずっと暗闇のままだ。

手足は動く。それで自分の身体があることも確認できる。

僕はしっかりとここに存在している。

でも、やっぱりなにも見えない。

足が地面に着いている感覚もない。

宙に浮いていたとしても、なにかに流されて動いている感覚

もない。

ずっとこの場所で停滞しているような気がする。

気がするだけで、なにも見えなきや確認もできない。

これで終わりだとしたら最悪だ。

なにもかも解決してない。

渚やファントム・ローズたちが、あの後どうなったのかもわ

からない。

もしかして一生このままなのだろうか？

……一生？

こんな場所に一生なんてあるのだろうか？

ここにあるのは永遠かもしれない――。

ワールド

Cecel 胎内

胎内は暗かった。

無限とも夢幻ともつかぬ世界。

生まれる前の記憶が忘却していく。

転生とはそういうものだ。

そして、僕は己の貌かおを忘れた。

悪夢は覚めない。

瞳を開ければ、そこに広がるのは虚無。

日常。

人々はなにも知らず、なにも疑わず、この世界が永遠だと思  
っている。

「まるでシャボン玉のようだとは思わないかい？」

尋ねた視線の先には白い仮面がいた。

まるで鏡を見ているようだ——ファントム・ローズ。

なぜ哀しげな貌をするのだろうか？

なにも答えず、白い仮面は無機質に僕を見ている。

無機質だ。

そう思えば、その仮面はそう見える。

「ファントム・リアリティ・スペース幻 実 空 間か……」

僕は知ってる。

ファントム・ローズが何者か。

しかし、今は、仮面は白い。

白く無機質な仮面。

だから僕は呼ぶ。

「ファントム・ローズ」

——と。

そして、僕はこう呼ばれる。

「ファントム・メア」

男とも女ともつかない声。

はじめて出会ったときもそうだった。

僕は知っている。

ファントム・ローズが何者か。

しかし、今は、仮面は白くなくてはならない。

「弾かれた者」と僕らは呼ばれる。自分の世界を持たず、行く当てもなく他人の世界を彷徨う。ひとたび気を抜けば無へ還る。

ゆえに僕らは貌を持たず、声を持たず、白い仮面として存在している。

しかし、特定の型を持っていない僕らは、夢幻の可能性を持っているとも言える。

僕は創造主となる。

「君が止めても僕の気持ちは変わらない。自然の摂理も世界が1つになることを望んでる。なのになぜ君はそれに諍い、僕の邪魔をするんだ？」

「守りたい世界に住むひとがいる」

声を響かせたファントム・ローズの周りに薔薇の花吹雪が舞った。

匂い立つ世界を斬るように放たれた薔薇の鞭！

すべては夢幻。

しかし、夢も現実もそこにあることには変わらない。この世界はそうやって成り立っている。つまり、あの鞭は本物だ。

そして、この夢も現実となる。

僕の躰から黒い霧が噴き出した。

この闇は混沌だ。

僕が閉じ込められていたアノ闇も無ではなかった。

闇色の混沌は、多くのモノが混ざった色だ。閉じ込められた闇には全てがあった。そして、僕がいた。

世界とは自分なのだ。

他人もまた世界なのだ。

世界と世界のせめぎ合い。

まさにこの瞬間、僕とファントム・ローズの世界が衝突する。

僕が放出した黒い霧は無数の鉤爪となり、鷲が獲物を捕らえるようにファントム・ローズに襲い掛かる。

世界を包む芳潤な薔薇の香り。

しかし、勝つのは僕だ。

時間とはなにか？

果たして現実の時間は戻ることができるのか？

僕にはやり直したいことがたくさんある。

今置かれている現実をなかつたことにしたい。

そして、アスカを救いたい。

現実の時間は戻せなくても、過去は語ることができる。

ここまで僕は事件の発端から順番に語ってきた。生徒たちの失踪事件、ヘクラブ・ダブルBや〈ミラーズ〉、そして、ファントムローズ。数多くの登場人物が世界を構築して、物事は急速に進み、弾かれた僕は最終的に闇に閉じ込められた。

この闇の中で、無限とも思える世界で、僕は何度も過去を振り返った。主観こそあれど、過去は変えられない。

変えることができないのなら、創ればいい。

世界とは、ひとりひとりに与えられているモノだ。僕は自身の世界を失ってしまったけれど、それならはじめから創ればいいじゃないか。

夢幻の世界。

僕の世界を一から創造する。

僕の名前は春日涼。僕が生まれた夏の日がやけに寒かったからそんな名前が付いたと聞かされている。

僕は私立六道学園高等部に通う二年生で、クラスでは平凡に過ごしてきたと思う。髪は染めてないから黒で、身長は一七四センチ、自分ではどこにでもいるような男だと思っっているけど、人から見たら僕はどう映るんだろう？

そんな僕にも彼女がいる。同じクラスの椎名アスカ。付き合

いだしたのが中三の二学期だったから、付き合って二年になる。僕らはいつものように歩いて学校から帰宅していた。

「あのさ、また、誰かいなくなっただって」

横を歩くアスカを僕は不安な表情で見つめた。

「また、なんだ……怖いよね。わたしは涼がいなくなっちゃったらって考えると怖くて……」

同じ気持ちだった。僕も彼女がいなくなるのが怖い。

たとえ、今僕の目の前にいるアスカが、真っ白な仮面をつけたのっぺらぼうのような存在だったとしても。まやかしだろうと、もう失うことには耐えられない。

世界にアスカはもういない。アスカの本体ともいうべき存在だ。けれど、それぞれの世界たちにはアスカの欠片がある。

その欠片は世界の主人公の主観が混ざっているため、純粋とはいえないものだし、そもそもその世界にもアスカという存在はなかったことにされている。

たとえ存在がなかったことにされていても、その痕跡を100パーセント消すことはできない。

欠片を見つけ出し、多くの欠片を集めることで、平均化されたアスカを取り戻すことができる。

ここは夢幻の世界ファントム。

二人で学園に近くの曲がり角を曲がると、そこにカメラマンとリポーターが待ち構えていた。すべてのはじまりへクラブ・ダブルBの事件だ。

リポーターが僕らのほうへ近づいてきた。

「少し、お話を聞かせてもらってもよろしいでしょうか？」

「話したところで、あなたたちには理解できないことです」

僕はそう言ってリポーターの頭から足下まで引っ掻いた。するとまるで霧を掴んだような感触がして、雲が消えるように掻き消えてしまった。

人が消えた。

しかし、だれも驚かない。

なぜならそこにリポーターなどはじめから存在しなかったからだ。

世界が修正された。

けれど、その修正力は急激な変化にはついていけないらしい。

カメラマンが驚いた顔をして当たりを見回している。

「なんで俺ひとりなんだ？」

こうやって世界に歪みが生じる。すると、中にはその事実が気づく者や、僕のように、弾

かれたモノ<sup>々</sup>が生まれるわけだ。

ちなみに僕が消したりリポーターはこの世界のホストじゃない。あくまでこの世界から消えたにすぎない。

「大丈夫？」

アスカが僕の横顔に声をかけてきた。

「うん、ちょっと考え事」

「事件のこと？」

「まあ……ね」

このあと前にもしたような会話が繰り返り広げられ、アスカが

へクラブ・ダブルB」の話を持ち出す。そして、放課後に事件は起こる。

学園につくと僕はアスカといっしょに教室には向かわず、体調がちよつと悪いと言い残してある場所に向かうことにした。

保健室だ。

足早に廊下を進み、保健室のドアを勢いよく開けた。

「探したぞ、ファントム・ミラー」

僕の視線の先には白衣を着た女が丸椅子に腰掛けていた。

元は水鏡紫影という保健室の先生だった。僕にとって彼女はおぼろげな存在だ。だから顔をはっきりと認識できない。おそらく笑っているのだろう。

「お帰りなさいというのは可笑しいかしらね。あなたには帰る場所などないのだから」

男の声か、女の声か、かろうじて女だと認識できる。決してそれは中性的な声だからとか、声質の問題ではなく、認識の問題だ。

目の前に立っているミラーはホストだ。この世界のホストではなく、元は僕と同じように、弾かれたモノ」だったに違いない。それがミラーとなり、ある力を手に入れた。

「アスカを返せ」

僕は鋭く言った。

「私の目的は世界をひとつに、迷える魂をひとつに融合すること。もうアスカは個ではなく、全に取り込まれたのよ」

「おまえはアスカの姿になることができる。全になろうとも、

全の中で個として存在しているはずだ。僕はアスカさえ元に戻ればいい」

「不可能よ」

「この世界は夢幻だ。なにも意味を持たない。時間さえ。意味がないからこそ、意味を持たせることができる。想像と創造の力」

ミラーの目の色を変えた。僕の変化に気づいたのだろう。立ち籠める闇色の霧。それは僕の足下から重く床を這っている。今、はつきりと水鏡紫影の表情がわかった。この世界は想いが強ければ強いほど具現化することができる。こちらの認識レベルに関係なく、強制的に相手側からこちら側に認識させる。彼女はひどく驚いている。

「ファントムの……覚醒め……」

おそらくそうなのだろう。僕も本能的にそう感じていた。

弾かれたモノのすべてがファントムではない。ファントムは弾かれたモノの中でも特異な存在なんだ。はじめて僕が出会ったファントムは、ローズ。次に出会ったファントムは、ミラー。

そして……。

すべての世界にファントムが何人いるのかは知らない。けれど、ファントムは他人の世界に大きく影響を及ぼすことができる存在だ。そんなのがたくさんいたら、世界はもっと荒れているに違いない。

「まずはアスカを返せ。次におまえの能力を具体的に説明し

ろ」

低い声で威嚇した。その威嚇は黒い霧となって具現化する。僕の軀を覆う黒い闇。まさにそれは僕が閉じ込められていた空間と同じモノ。

どうやって僕がああ閉ざされた闇から抜け出すことができたのか？

いや、抜け出したというのには正しい表現ではない。

黒はすべての色が交じり合った色。それは混沌ともいえるべき存在。そこにはすべての要素が揃っている。

それが僕の手に入れた力。

おそらくミラーの力も似た力に違いない。

「彼女は返せない」

「それは返したくないのか、それとも返す方法がないのか？」

「もうひとつに溶け合ってしまったから無理よ」

「嘘つきめ」

絵の具は一度混ぜたら元に戻せない。それが彼女の言い分なのだろう。

「嘘つきめッ！」

繰り返し、2度目は怒鳴った。

その瞬間に僕の足下から黒い霧が大量に噴き出しミラーの足下を呑み込んだ。

「こ、これは……」

驚くミラー。彼女は理解しただろうか？

「なにが……消える……私が……いえ……これは……」

言葉を送切れ途切れに紡ぐミラーの脚は黒い靄に包まれた部分が、まるで霞んだように半透明になっている。

「僕の力を理解したか？」

「私をこのワールドから消す……無に還す……ということ？」

「無じゃない、混沌に還す。おまえの能力は融合……と見せかけて、コピー。レコーダーのようなものだろう？ みんながひとつに溶け合うなんてウソだ、おまえはただのミラーだ、自分自身を持たないミラー」

ミラーの顔が変化していく。水鏡紫影の顔はぼやけ、またあの顔になる。そう、アスカの姿だ。

「涼ちゃんやめて、今の涼ちゃんは涼ちゃんじゃない！」  
声も同じ。

けれど、ミラーはミラー、本物じゃない。

僕は知っている。僕のやろうとしていることも、本物のアスカを取り戻せるわけじゃないってことを。けど、本物とはいっかないにか？

夢も現実も曖昧なこの世界で、本物とはいったいなんなんだろう？

「アスカは返してもらおう」

黒い靄がアスカの身体を足下から頭まですっぽりと呑み込んだ。

「キイイイイ！」

靄の中から歯ぎしりが聞こえ、女の手だ飛び出してきた。

逃がしはしない。

霧の密度が高くなる。その中に浮かぶミラーの顔。次から次へと別人の顔に変わっていく。男や女、老人から子供まで、中には見覚えのある同級生の顔もあった。

「私の夢は……ついえ……ない……こんなところ……で！」

男と女の合成音のような声を発しながら、ミラーが霧から抜け出そうとする。

肩が出て、ゆっくりと上半身も見えてきた。その身体が全裸で、顔は女、右半身が男、左半身が女、各部位で別人の身体が混じりあっていた。

闇色の霧はミラーの身体にヒビが這入ったような模様を描きながら絡みつく。

まるでチーズのように伸びる霧。ミラーと霧の本体の間で細い霧が糸を引く。

「アスカは返してもらおう」

ミラーの身体に巻き付いていた霧がゴムのようにして、暗い暗い霧の本体に引きずり込む。

僕はハッとした。

芳しい花の香り。

忘れもしない薔薇の香り。

輝線が目の前できらめいたかと思うと、ミラーを繋ぎ止めていた霧の糸が断ち切られ、反動でミラーが大きく前に倒れ込んだ。

僕は振り向いた。

「なぜ邪魔をするんだ？」

ローブを纏った白い仮面の君。

「ファントム・ローズ！」

その名を叫んだ。

白い仮面は答えない。表情を隠し、その素顔を僕に決して見せないようにしている。

「君が僕の邪魔する理由がわからない。ミラーと対立していたんじゃないのか？」

「敵の敵が味方とは限らない」

声質が認識できない。ローズは僕を拒否している。僕はローズがだれなのか知っているはずなのに、今はおぼろげにしか思いつけない。

「なら君は僕の敵なのか？」

「君が世界を壊すならば……」

「僕はアスカを取り戻したいだけだ。君こそなにが目的なんだ」

「だれひとりとして世界に疑問をもたず、その世界が平穏に流れゆくこと」

「僕らのような、弾かれたモノ」を出さないためか？」

「それもひとつだ」

ローズの守りたいものはなにか。言葉どおりの世界を守る英雄に気取りだろうか。いや……違うね。

「渚はどうなった？」

僕の思惑は当たった。白い仮面が一瞬揺らいだのだ。

ローズは答えない。だから代わりに僕がそれを口にした。

「ッ弾かれたんだろ。もう彼女の世界の均衡は崩れすぎた。彼女が彼女の世界である限り避けられなかった運命だと思うよ。彼女の周りには外の世界に関わる人物が多すぎた」

僕がローズに話しかけている視線の端で、ミラーが床を這って逃げようとしていた。

「まだアスカを返してもらってない」

僕の足下から噴き出した闇色の霧が床を這いミラーの足首に巻き付こうとする。

輝線が視界を横切る。

まただ。

「どうして邪魔をするんだ！」

ファントム・ローズ！

「それはキミが世界を破滅に導くモノになってしまったからだ」

「破滅させようとしているのは、そこにいるミラーだろ！ こいつが勝手に他人の世界に入り込んでるせいで、この世界だってもう歪んでるじゃないか！」

いずれこの世界の主人公も弾かれる。

それは僕のせいじゃない。

「僕はアスカを取り戻したいだけなんだ！」

叫びながらミラーに飛びかかった。

悲しそうなアスカの顔が僕を見る。

「くっ！」

僕は動揺してしまった。本物じゃないってわかっていてもダ

メだ。

その一瞬にローズが眼前に迫っていた。

薔薇の鞭が僕の手足を拘束した。

逃げるミラー。鏡が光るように瞬き消えた。

残された僕とローズは対峙する。

無機質な白い仮面だ。なのに、どうして、そんなに可哀想な顔をする？

ローズはおそらく僕に出会ったときから感じていたのだろう。僕は近い将来、弾かれたモノになることを――。

「どうして僕に関わる？」

ローズは僕が、弾かれることを阻止できなかった。むしろ、鳴海愛は僕と共に事件を追っていた。ローズのせいで僕は、弾かれたともいえる。

「世界を壊して回ってるのはおまえのほうだろ！」

――涙っ!?

白い仮面が一筋の光りの粒を流した。

飛び退いたローズの周りに薔薇の花びらが舞う。頭が眩むほどの芳香がした。

そして、大量の花びらに包まれながら消えるファントム。

残り香。

逃げられた。

ミラーにも、ローズにも。

また無限にあるこの世界でミラーの本体を見つけるのは骨が折れそうだ。

ひとつわかったことがある。

平行世界の時間の流れは同一ではないということ。なぜそうなのかはわからないけれど、さっきまでいた世界は僕にとつては過去ともいえる世界だった。

時間というのは相対的で、光の速さで移動することができれば、周りの時間は遅くなる。そのことを考えれば、世界それぞれの運行スピードが違うことも、それほど不思議なことではない気がする。

ミラーやローズは比較的安易に世界を渡っているように思える。とくにローズは僕のことを見つけることができるようだ。

僕はそう簡単にはいかない。

まだ世界の仕組みが掴めていないせいかもしれない。

行き来できる世界にも制約がある。

それこそ数え切れない平行世界がある中で、僕の知る世界とはかけ離れた世界もきつと存在しているはずだ。けれど、そういう世界には今のところは行ける気すらしない。僕が行ける世界は僕との繋がりを必要とする。

今はもうない僕の世界に構造が近いか、僕が親しくしているひとつの世界など、<sup>〃</sup>弾かれたモノ<sup>〃</sup>がその世界に入り込む余地のようなものがある世界。

さらにその世界にうまく入り込めたあとは、その世界に類似

した世界には入りやすいようだ。世界同士に物理的な位置があるのかはわからないけれど、隣接している世界には入りやすいのだと思う。

ひとつひとつの世界はシナプスで繋がれたようになってるのだと思う。中には多くの世界と繋がりを持つ世界もあるだろうし、まったく繋がりのない世界もあるのだろう。

世界と世界の繋がりが切れるのが先か、自分の世界から弾かれるのが先か。僕はどちらが先だったのだろうか？

ここでひとつの疑問が浮かぶ。  
「弾かれる」のが先だった場合、残された世界はどうなるのか？

その世界はほかの世界との繋がりを断たれる。そうして、そこにいた主人公のことは、ほかの世界の住人は思い出せなくなる。

思い出せないからといって、その世界がなくなっただけじゃない。

そう、アスカの世界はどうなったのか？

おそらく主人公を失った世界は、その存在を維持することが難しくなるだろう。この夢幻世界は想像によって創造されている。ひとの思いが重要なのだ。

そして、ほかの世界と繋がっている場合は、外の世界に干渉される。主人公を失っても、繋がりがさえ維持されていれば、ほかの世界に支えられて存在できるかもしれない。

主人公がいない分、その世界は繋がりを持っている世界たち

を平均化した世界、もしくは想いの強い世界の影響が色濃くでるかもしれない。

世界は常に繋がっていないければ生きられない。それはひとも同じだ。ゝ弾かれたモノゝはより強く認識され続けなければ、その存在が危うくなる。

僕は一度消えかけた。あの闇の中でまずは身体を失った。そして、心も徐々に闇に呑まれかけた。けれど、僕は僕を再構築したんだ。

そして、世界の心理に近づいた。

未だ僕は世界を渡ることが不得意だ。

世界と世界を繋ぐ出入り口のようなものは、そこら中に存在していると思われる。ただし、今の僕にはそれを見つけることができない。

僕が見つけることのできる出入り口はごくごく限られている。たとえばこの世界では――。

保健室でのごたごたのあと、僕は教室には行かずに屋上で時間を過ごした。こういうことをすればアスカからメールが来るようなのだが、この世界では来なかった。この世界のアスカは薄い。本来はもういない存在だし、この世界の主人公も覚えてないだろう。僕がアスカを認識してあげないと、この世界でアスカは存在を維持できない。

1時間目の終了を知らせるベルがなる少しまでに屋上を出た。ベルがなると次々と教室から生徒が湧いてきた。顔がぼんや

りしている。この世界の主人公と繋がりが薄いからだろう。

主人公と離れた場所、もしくは関わりが薄いものは、記憶として世界には存在しているが、目で見える形では存在していない。主人公は暗闇を照らすランタンのようなもので、近くしか照らすことができない。主人公が見たり体感できないものは停止しているのだ。しかしそれでも世界が成り立っているのは、世界同士が繋がり記憶を共有しているからだ。

これは僕の推測だけど、世界にはきっとホストコンピューターがあり、すべてのデータを蓄積して、それを各世界にテンプレート化して配信してるんじゃないだろうか。

そう考えると、僕が知っている世界から逸脱した世界は存在していないことになる。

世界のホストコンピューター。そこにはまだアスカのデータが残っているだろうか。残念ながらアスカが全世界から消えてしまったことを考えると望みは薄い。それでも多くの断片は残っているかもしれない。

話はだいぶ逸れてしまったけど、世界を渡る出入り口。それはこの世界の主人公の近くに多くある。

この世界の主人公はアスカの友達だ。彼女は僕が知る仲ではもつとも仲が良かったはず。それなのに、この世界にあるアスカの断片は少なかった。

僕とその彼女はクラスが同じだ。自分のクラスに入ろうとすると、その子が目についた。

あんな友達とは仲良くしてなかったのに。

アスカがいなくなったことで、その子は別の友達をつくり。その子と仲良くしている。それを見ると本当に悲しい。

教室に入った僕をだれも見向きもしない。まるで空気になった気分だ。

決して周りのひとびとに僕が見えていないというわけじゃないんだけど、存在がうまく認識されてないんだ。

そういえば鳴海愛はどうしてあそこまで認識することができたんだろう。彼女をよく知る渚の世界だったから？

いや、彼女が僕の前に現われたのは、僕の世界でだ。

その疑問はひとまず置いておこう。

アスカの友達だった子は、今はもうアスカを忘れている。けれど完全にリンクが断たれたわけじゃない。

よく目を凝らすと見えてくる。今の僕はかなり意識して集中しなくてはいけない。すると見えてくる。空間の歪み。

ズレというか、断層というか、空間に亀裂のようなものがある。もしかしたら糸のようにも見えるかもしれない。

無数の糸。世界と世界を繋ぐ無数の糸だ。

彼女の周りには糸は彼女と関わりの深い世界へのリンクで、本当は世界中にリンクが張り巡らされているはずだけど、それらのリンクは薄すぎて僕には見ることができない。

たまに主人公の近く以外でリンクを見つけることができる。それはすべての世界に大きな力を及ぼすことができる存在の近くにある。

たとえば、そう、このリンクは想いの強さが重要だ。だから

絶大な権力者、世界中に信仰者がいるキリスト教の法皇とか。あるいは建造物やひとの手でつくられたモノにもリンクが存在している場合がある。モノ自体には思いや思考は当然ないので、そのモノにたいするだれかの思い入れなんかリンクをつくる。あの闇の中から僕が救われたのは偶然とも必然ともいえる。あの中で僕は偶然リンクを見つけた。だから僕はあの世界から出ることができた。

今、僕の目にはこの世界の主人公である彼女の周りであるリンクが見えている。ただ、問題なのが、それらがどこに繋がっているのかわからないことだ。

きつとローズなんかは、もつと多くのリンクが見えて、その行き先もわかるのかもしれない。

僕は彼女に近づき空間の亀裂に指先を入れた。はじめは小さい隙間だったのが、手が全部這入るほどの隙間に広がった。そして、指先から痺れる感覚がする。僕はこの感覚が好きじゃない。なんていうか、強い引力に吸いこまれるって感じだろうか。吸い込まれて自分が消えてしまうんじゃないかって不安感がある。

世界と世界は引き合っている。

けれど、うまいバランスを取りながらぶつからずに存在している。惑星の公転に似ているかも知れない。太陽系、銀河、宇宙、それらの法則と似たものが、この幾多もある世界にあったって不思議じゃない。

今、僕が手を入れている先はどこに繋がっているのだろうか。

もうひじまで中に入っている。

けれど、僕は腕を引いた。指先を痺れさせる不快感。

そして僕は振り返る。

それは声が出た方向だ。

声の主は同じ言葉を繰り返す。

「春日」

僕の名前だ。衝撃的だった。この世界で僕が認知されている。驚く僕に今居は不審そうな顔をした。

「なんか反応しろよ、じっとこっち見てなんかあったか？」

こいつとはよくつるんでいた。でも、ここは今居の世界ですらなお場所だぞ？

どうして僕が……。

「……ッ!？」

僕はさらに驚いた。

リンクが見える。今居の周りにリンクが見えている。それもこの世界の主人公と同じくらいの濃さだ。

いつの間にか今居の世界にきた？

いや——僕は振り返って確かめた。彼女は楽しそうに友達と話し、その周りにはリンクが見えた。

ここはだれの世界なんだ？

「そこでそーやってばーとしてろよ」

今居はそういいながら僕の横を通り過ぎ、あの子の横に立った。そう、この世界の主人公の彼女だ。

その瞬間、リンクがより見えるようになった。これはすごい、

二人を中心にまるで蜘蛛の巣のように教室中にリンクが張り巡らされ、さらに廊下のほうまで。

それだけじゃない。世界の色が明らかに違う。明るくなったというか、鮮やかさがよくなったように感じる。

なにが起きた？

今居は彼女になにやらコソコソと話す、さらに世界が鮮やかに変わった。

そして今居はまた僕の横を通り過ぎようとした。

そこで僕は質問を投げかける。

「もしかして付き合ってるの？」

二人を見ていてそう感じた。

「ちよっと前からな」

僕の知らない事実、ここでは史実というべきか、僕の世界ではふたりは付き合ってたなかった、断言できる。なぜなら、今居はあの子に惚れていて、その話しは聞いたけど、付き合えてはなかったからだ。今居はあの子に告白してフラれている。

僕は感じたふたりはリンクしている。

世界はひとりひとりに与えられているけれど、その世界が交じり合う可能性については前々から考えていた。それはミラーのやろうとしていたことにも繋がることだからだ。

この世界で僕の影が濃くなる。おそらく今居の近くにいときは、この世界での僕の認知度が高くなるのだろう。

もう少しこの世界にしよう。

世界に認知される方法は僕のためだけでなく、アスカを取り

戻すことにも繋がる。

「ちょっと前っていつからだよ、ぜんぜん気づかなかった」

今居との会話を繋ぐ。こうやって関わることは繋がりを強くすることになる。

「俺もずっと片思いのまままで終わるのかって思ってたんだけど、あいつ好きなやつがいたから……？」

言葉の途中で首を傾げた。

「そーいやあいつだれのことが好きだったんだ？」

僕は知っている。僕らの関係はこのごろ——このごろというのは、この僕からすれば過去の話だけど、かなり微妙な関係だった。

好かれていたのは僕だった。けれど僕にはアスカがいて、あの子はそれでも僕のことが好きらしく、今居は僕とあの子の間で板挟みになっていた。

おそらく、僕が、弾かれた。せいで修正されたんだろう。僕という障害がいなくなった歴史。

しかし、この世界に僕はいる。

それによってなにか変わるのだろうか？

僕はあの子を見つめた。

目が合った。

すぐに向こうから目を逸らされた。

今居が不審そうに僕を睨む。

「俺の彼女だから手出すなよ」

「出さないよ」

「おまえも早くカノジョつくれよ」

「……………」

僕は言葉を失った。わかっていてもつらい。

「椎名アスカって知ってる？」

思わず尋ねてしまった。

「そいつのことが好きなのか？　ほかのクラスか学年か？」

「幼なじみなんだ」

「そっか、違う学校か」

アスカはここにいる！

今、僕の真横に立ってるじゃないか！

（ねえ、涼ちゃん。さつきからムシして、そーゆーイジワルすると怒るよ！）

今居には、このクラスのみんなには、この世界の住人たちには見えていない。僕の横に立っているアスカの姿、アスカの声、アスカの存在が忘れられている。

のっぺらぼうのアスカが僕の顔を覗き込んでいる。

「早退する」

僕は教室を足早に抜け出した。

うしろから聞こえてくる声。

「おまえ遅刻してきたのに、帰るやつが……………」

今居の声が遠くなる。

景色の色も少し薄くなった気がする。

アスカが追いかけてきた。

（涼ちゃん変だよ）

「少し疲れてるだけだよ」

(心配だよ、絶対今日の涼ちゃん変だもん)

これは僕の頭の中だけに聞こえる声なのか？

アスカはいない？

だとしたら現実ってなんなんだよ。僕の周りの景色は色あせ、  
どんどん透明になっていく。こんな世界が現実？

多くの人々はなにも知らずに生きている。

現実か、幻か、そんなことを考えるのくだらないことだ。

僕にはアスカの姿が見え、その声を聞くことができる。まだ  
まだ昔のアスカにはほど遠い。けど、アスカはたしかに存在し  
ている。

(キヤーーーーーッ！)

急にアスカが悲鳴をあげた。

僕は絶望で声を失った。

切り裂かれ頭の中から股まで真っ二つにされているアスカ。  
血は出ない、なぜなら身体の中は空っぽで、断面には底なしの  
闇が広がっていた。

アスカが斬られた。それも衝撃的だったけど、斬った相手は  
アスカを認知しているってことだ。

ドロドロ口になって溶けたアスカが、闇色の靄になって僕の身  
体に吸収される。

「だれだ！」

叫びながら辺りを見回す。

——いない？

いや、心配がする。

目では見えない。けれど、微かに心配がする。かなり近い位置になにかがいる。

認知できない？

さらに目を凝らすと、だんだんと見えてきた。

そして、僕と目が合ったと気づいた彼は険しい顔をしていた。

「残念だ」

彼の名は影山<sup>かげやま</sup>彪斗<sup>あやと</sup>。おそらく、弾かれたモノ<sup>だけど</sup>、少し違うような気がしなくてもない。なにかこいつには違和感がある。

再び彼は同じ言葉を口にする。今度はうつむきながら。

「残念だ」

「なにが？」

会話をはじめると彼の姿は鮮明になった。僕が彼を認識できたということだ。

「君が世界を滅ぼす側になったこと」

「そんなつもりはない」

これは本心だ。なぜなら僕の目的はアスカを取り戻すことで、世界を滅ぼす気はない。

しかし、彼は僕に敵意を向けた。

アスカを傷つけたなんて許さない！

怒りの感情がふつつつを湧いてくるけど今は我慢した。あの闇の中で僕は忍耐強くなった。表面的には。

「君にそのつもりがなくても、この2人の世界はすでに壊れつつある」

「1人ではなくて、2人？」

「今僕らがいる世界は世界と世界が癒着している。恋人同士にはよくある話さ」

二人の関係までもう知っているのか。  
彼は話を続ける。

「この事例は宗教にも多い。同じ理想、同じ思想のもとに世界を共有する。そして想いが強くなればなるほど具現化する。それを信仰者たちは奇跡と呼ぶね」

この夢幻世界は想いが具現化したものだ。恋をすると世界が変わって見えるというのは、あながち真実だ。

僕は静かに口を開く。

「世界は放っておいてもひとつになろうとする。それが自然な形なら、僕が世界を滅ぼすなんて言い方はしてほしくない」

「地球を含めた惑星は長いサイクルのちに寿命を迎える。最後は大爆発だ。それは自然の摂理ではあるけれど、その惑星に住む動植物は爆発なんて起きたら全滅だ。まあ実際は爆発する前に環境が悪化するわけだけど。どちらにせよ、それが自然の摂理だろうと、滅びを簡単に受け入れることは難しい。しかも、君のやろうとしていることは、本来なら緩やかに滅びるものの死期を早めている」

「僕はただアスカを取り戻したいだけだ」

「それによって世界が滅びたら元も子もないだろ」

「滅びたら……創ればいい」

彼の険しさが空気感に伝わってくる。

——消えた!?

本当に突然だった、目の前からいきなり彼が消えた。

僕はすぐさま彼がいた場所に駆け寄った。床に落ちている汗

の染み。この世界に存在していたのはたしかだ。

ローズの次は影山彪斗。

僕のやろうとしていることには敵が多いらしい。

いや、味方がひとりもいないと言ったほうがいいかもしれない。

それでもかまわない。

僕はアスカのいない世界を望まない。たとえ、それが元友人の世界であっても。この世界で得られるものがあると思ったけど、もう無理らしい。

ここからミラーが去り、ローズが去り、影山彪斗も去った。

残されたのは僕だけだ。

ここにはなにもない。

闇。

一瞬にして僕の周りだけが暗闇に包まれた。僕だけが見えている。けれど、僕は世界を照らさない。

手のひらを上に向けると、そこに闇が凝縮して小さな玉になった。と言っても、ここは闇で、僕以外はなにも見えないので、闇が凝縮したかなんてわからない。

けれど僕は感じる。

僕の思い出ではないけれど、僕も知っている世界と人々の記憶。

この日、ふたつの世界が同時に消えた。

人間の三大欲求のひとつに食があるけれど、ふと気づけば僕

はなにも食べていない。肉体というものが、どんな意味を成し得ているのか、この世界においては難しい問いだ。

腹が減るといふのは肉体が欲するのか、それとも魂が欲するのか。

肉体とはなにか？

魂だけでは、人間は存在できないのだろうか？

そう、少なくとも肉体だけでは、その人間とはいえない。それは〈ミラーズ〉が証明している。魂と肉体が合致していなければ、人間とはいえない。

「入れ物が先か、中身が先か、顔のない僕たちは不安定な存在といえる」

僕が投げかけると、ローズは鞭で返してきた。

僕に向けられた敵意。日に日に増しているように感じる。

この場所に、どのくらいの時間いるのか、時間という存在はなかなか証明が難しい。夢幻世界において、忘却してしまうことはいくらでもあるし、個々の世界で時間の流れが違うというのが厄介だ。

ここでこうして話しているのだから、お互いが同じ時間に存在しているとは限らない。

そう、たとえば、奥が戦っている相手は過去の幻影かもしれない。

「ファントム・ローズ！」

僕はその名を叫んだ。

声だけが木霊する。

この声も未来に届くのか、過去に届くのか。

本当にローズは僕の目の前にいるのだろうか？

疑わしいものだ。

疑うというのもナンセンスだ。この世界は想いによって成り立っているのだから、なにもかもが現実で、なにもかも幻。

「ファントム・ローズ！」

再び叫ぶが、やはり返事はなかった。

我思うが故に我ありというのなら、僕が思えばローズはそこに存在するという事か？

僕はいったい……だれと戦ってるんだ？

僕の名前は春日涼。僕が生まれた夏の日がやけに寒かったからそんな名前が付いたと聞かされている。

僕は私立六道学園高等部に通う二年生で、クラスでは平凡に過ごしてきたと思う。髪は染めてないから黒で、身長は一七四センチ、自分ではどこにでもいるような男だと思っっているけど、人から見たら僕はどう映るんだろう？

そんな僕にも彼女がいる。同じクラスの椎名アスカ。付き合いだしたのが中三の二期期だったから、付き合って二年になる。僕らはいつものように歩いて学校から帰宅していた。

「〈ヘミラーズ〉の集会には行くな。事件の主犯は保健室の先生だから関わらないように」

あの話が切り出される前に僕は唐突に言った。

きよんとするアスカ……だと思っ。

今日のアスカはいつもよりぼやけて見える。そう、きっと僕が疲れてるからだ。

角を曲がりレポーターとカメラマンが現われた。

だから僕はふたりを消した。

今日の僕は疲れている。

切りが無い。

この世界は切りが無い。

目的すら忘れてしまいそうだ。

そして、自分自身すら忘れてしまう。

僕の名前は春日涼。僕が生まれた夏の日がやけに寒かったからそんな名前が付いたと聞かされている。

僕は私立六道学園高等部に通う二年生で、クラスでは平凡に過ごしてきたと思う。髪は染めてないから黒で、身長は一七四センチ、自分ではどこにでもあるような男だと思っているけど、人から見たら僕はどう映るんだろう？

そんな僕にも彼女がいる。同じクラスの椎名アスカ。付き合いだしたのが中三の二学期だったから、付き合い合って二年になる。

しいな……？

しいなぎ……？

椎風渚！

そう、椎風渚は僕の彼女だ。

間違いない。それはひとつの事実だ。けれど違う。

いつから僕らは付き合い合っていた？

いつから僕は世界を繰り返している？

いつから僕は 弾かれた？  
椎風渚がアスカの代役であるなら、椎風渚の代役はアスカなのか？

もしふたりがいなくなったら、次の代役はだれなんだろう？  
その輪はどこまで続くのか？  
この輪はどこまで続くのか？

——気づけば暗闇だった。

今日も暗い。

なにも見えない……真っ暗だ。

今日っていうのは間違ってるかもしれない。

あれからどれくらい経ったんだろう？

時間が長く感じられるだけで、まだ1日も経っていないかもしれない。

それとも3日くらい過ぎたのか……それとも1週間が過ぎてしまっているかもしれない。

暗闇の中じゃなにもわからない。

そう言えばお腹が空いてないな……。

ということはまだ1日も経っていないかもしれない。

ずっと暗闇のままだ。

手足は動く。それで自分の身体があることも確認できる。

僕はしっかりとここに存在している。

でも、やっぱりなにも見えない。

足が地面に着いている感覚もない。

宙に浮いていたとしても、なにかに流されて動いている感覚もない。

ずっとこの場所で停滞しているような気がする。

気がするだけで、なにも見えなきや確認もできない。

これで終わりだとしたら最悪だ。

なにもかも解決してない。

渚やファントム・ローズたちが、あの後どうなったのかもわからない。

もしかして一生このままなのだろうか？

…：一生？

こんな場所に一生なんてあるのだろうか？

ここにあるのは永遠かもしれない——。

——そして、僕は目を開ける。

「思い出すんだ。思い出せなければ、君は世界から消える」

目の前の君は頭を抱えて取り乱す。

目まぐるしく移りゆく景色。

真っ赤な夕焼けが黒に染まっていく。

夜の静寂が僕の声を響き渡らせる。

「君の名前は椎風渚。椎名アスカの代わりだよ」

この場にはもうひとり、鏡を見るような存在がいた。

「ファントム・メア」

ローズのつぶやきに合わせ僕はうなずいた。

「そう、ファントム・メア……それが世界から弾かれた僕の仮初の名。自分自身だけは自分が証明できないだなんて、ばかげてると思わないかい？」

ローズの顔は無機質だ。

「だから、私たちはファントムなのだ。世界は全ての者に平等に与えられている。個人の持つ世界が己を証明してくれる。しかし、自己の世界から弾かれてしまっただけは、他に自己を証明してもらわなければ、消えてしまう。自分自身がここにいると感じるだけでは、想いが弱すぎる」

「すでに僕たちは顔を持たない」

「だから私たちはファントム」

「けどさ、僕には君の真の顔が見えるよ」

強く思い出せば、その顔がぼんやりと見えてくる。

「——鳴海愛」

彼女の名を呼ぶと、彼女も僕の名を呼んだ。

「私には君が春日涼に見える」

渚は僕とローズを交互に見て驚いた顔をした。きっと彼女にも見えたのだろう。

「涼、愛ちゃん！」

自然と僕の顔から笑みがこぼれた。認識される悦び。

だが、そんなひとときをローズがぶち壊す。

薔薇の鞭が強烈な香りを撒き散らす。僕に対する威嚇だ。

僕が渚に伸そうとした手を薔薇の鞭が弾いた。

幻影を散らすほどの痛みだ。夢すらも覚めそうになるんじゃないかって思う。

渚はさらに驚いているようだ。

「どうして？」

すでに渚はローズの胸に抱き寄せられ守られている。

気づいたな……ファントム・ローズ。

「ファントム・メア……なぜ君は渚を狙う？」

「推測はできるだろ？」

「椎名アスカに関係があるのか？」

「アスカの復活には渚が鍵を握ってるからね」

そう僕は確信している。

なぜ椎風渚は椎名アスカの代わりになり得たのか。

世界ははじめ、ひとつの塊だった。ひとつの世界が個々の世界へと枝分かれして、幾星霜もの夢幻の世界を生み出し続けている。けれど、もともと1つだった世界は引力のようなものによって、またひとつに戻ろうとしている。

世界が分裂して、多くの人間が分裂して、すべての存在が分裂していく。分裂を繰り返すうちに個性が生まれてくる。元を辿れば同じものでも、末端を見ればまったく想像もつかないほど別物。

椎風渚と椎名アスカは分裂元が近いんじゃないかって僕は推測した。

たしかこういうのを類魂るいこんって言ったかな？

僕は椎風渚の魂が欲しい。

そう、椎名アスカを生み出すために。

ローズは渚を自分の背中に隠した。そして、僕に向かって襲い掛かってきた。

本当にファントム・ローズは僕の邪魔が好きだ。

けれど、今はローズと遊んでる場合じゃない。

この手に渚を——ん？

襲い来るローズの肩越しに見える渚の背後に、ぼんやりと人影が見えた。

「ひゃっ!？」

急に渚が小さな悲鳴をあげ体を後ろに引きずられた。

迫っていたローズが僕から眼を離し振り返る。

僕も見た。

今度は影山彪斗か……。

渚の姿が空間から消えた。

「どうしてみんな僕の邪魔をする！」

叫びながらローズの背中に僕の手から噴き出す闇色の鉤爪を振り下ろした。

「くっああああああっ！」

苦痛に満ちた少女の叫び。

かわいそうな鳴海愛。

僕の脳内に流れ混んでくるビジョン。

黒髪の幼女が泣いている。顔は見えない。大人たちの足が見える。みな足早に歩き去って行く。

突然、強烈なノイズが頭に響いて僕は狼狽えた。

今のは鳴海愛の記憶に違いない。僕に吞まれることを拒んで強制排除されたようだ。

それにしてもひどいノイズだ。まだ頭の中を響いて頭痛を引き起こす。

「やってくれたね……ファントム・ローズ」

顔をあげてローズを見ると、肩から反対側の腰まで斜めの亀裂が体に走っていた。間に喰らわれた部分が消失して、黒い霧を噴きだしている。僕の一撃は致命傷となったはずだ。

なのに、白い仮面は無機質なまま僕を見ている。

「そんな眼で僕を見るな！

どんな眼だろう？

僕はその眼で見られていると感じた。

それは僕が見せた夢幻か？

もう目の前にファントム・ローズはいなかった。

——気づけば暗闇だった。

今日も暗い。

なにも見えない……真っ暗だ。

今日っていうのは間違ってるかもしれない。

あれからどれくらい経ったんだろう？

時間が長く感じられるだけで、まだ1日も経っていないかもしれない。

それとも3日くらい過ぎたのか……それとも1週間が過ぎて

しまっているかもしれない。

暗闇の中じやなにもわからない。

思考だけが巡り廻る。

この思考を止めてはいけない。

僕がここに存在するという証明は思考するほかにない。

ここ闇だ。

僕の名前は春日涼。

酒に酔った義父が僕を殴りながらよく言っていた。

「その涼しげな顔が気に食わねえんだよ、まるで兄貴そっくりだ。あいつはいつも俺のことは見下してた」

酔いつぶれて義父が寝静まったあと、義母は僕の傷を愛でながらよく言っていた。

「お酒さえ飲まなければ本当に優しいひとなのよ」

そうやっていつも泣いていた。

よくある話だ。そんな家庭で僕は育った。

本当の両親のことはあまり覚えていないのは、きっと幼かったせいだろう。

微かに覚えている記憶は、天井からぶら下がってゆらゆら揺れている2つの影。

昔から友達をつくるのが苦手だったけど、いつも遊んでいた幼なじみの女の子がいた。名前はアスカちゃん。でも、小学生低学年のとき、突然引越しちゃって……。

「本当に引越したのかな？」

闇の中に響き渡る声。

——まだ僕は闇の中にいた。

声はどこから聞こえるのだろうか？

「ここだよ、こっち」

声の主が僕をいざなう。

「出口はここだよ。はじめから手を伸せば届く距離にある」  
言われるままに僕は手を伸した。

弾力性のある液体に手を突っ込んだようなヌプツとした感触。  
手首から先に空気が伝わってきた。闇の中で消えていた触  
感だ。僕には手があるという実感がした。

けれど、急に恐怖感に苛まれて手を引いた。

どこからか笑い声が聞こえる。

「やっぱりダメか。まだ現実を受け入れる気が無いんだね。な  
ら、ずっとそこで引きこもってればいい」

現実？

僕の名前は春日涼。僕が生まれた夏の日がやけに寒かったか  
らそんな名前が付いたと聞かされている。

僕は私立六道学園高等部に通う二年生で、クラスでは平凡に  
過ごしてきたと思う。髪は染めてないから黒で、身長は一七四  
センチ、自分ではどこにでもいるような男だと思っているけど、  
人から見たら僕はどう映るんだろう？

そんな僕にも彼女がいる。同じクラスの椎名アスカ。付き合  
いだしたのが中三の二期期だったから、付き合ってから二年になる。

「あーあ、またそうやって物語を創り出す」

声の主は呆れているようだった。

「さっき真実を語ろうとしていただろう」

真実？

「そうさ、キミが認めたくなくても真実が現実。キミがいくら

偽ろうと、ボクは真実を知っている。現実を見たくなくなったら、ちよつと足を踏み出すだけでいい。出口はいつもキミの目の前にある。じゃあね、バイバイ」

「待て！」

僕の叫び声が僕の聴覚を刺激した。

一気に世界が開けた。

「ここは……？」

どこだろうか？

もう僕は闇の中にはいなかった。けど、だいぶ薄暗い場所だ。僕の目の前には光を反射する物体。それは大きな鏡だった。

僕の全身を映し出す鏡。けれど、そこに映っていたのは黒い人影だ。

（やあ、やっと現実世界に戻ってきたね）

おどけたような口ぶりで鏡の中の影は僕に語りかけてきた。

「君はだれ？」

（そうか、名前は重要だ。そうだね、たとえばファントム・ナイトなんていうのはどうかな。キミに寄り添うにはぴったりの名前だ）

また……ファントムか。

「なにが目的？」

こいつは僕を闇の世界から救い出した。救ったって表現が正しいかはさておき。

（真実の導き手と言ったところかな）

「……………」

(だれだって真実を認めるのは苦手さ。多かれ少なかれ、ひとは自分の世界を創造して自分の身を守るものだけれど、キミはそれが誇大過ぎるんだよ)

「それは僕がウソでもついてるって言いたいのか？」

(わかってるじゃないか自分で。キミはあの闇の世界でなにをしてた?)

闇の中で僕にできたことは思考することだ。

何度も何度も記憶を反復していた。自分自身の存在を忘れなように。

(そうだよ、それだよ。何度も反復していくうちに事実を歪めていったんだ)

「もういい、やめろ！」

激しい音とともに鏡が砕け散った。

ひどく拳が痛い。見ると血が出ていた。僕が殴って割ったらしい。

(そんなことしたって無駄だよ。今のキミに必要なことは、妄想と現実を区別することだ)

割れた鏡のひとつひとつの破片に映る人影。

「うるさい！」

僕は駆け出した。

ここがどこなのかもわからない。

行き先なんてあるわけではない。

ただ走ってその場から逃げた。

そして、ここがどこなのか気づく。

僕の通う学校だ。

廊下の窓から見える暗い空。

校内から出ると、吹く風が体を冷やした。時間はわからないけど、町はとても静かで夜更けを感じさせた。

街灯が寂しげに照らす住宅街を歩き、僕は帰るべき場所を探した。

自然と足が僕を運んだのは見覚えのある一軒家だ。この家で僕は育った。

そして、ふと思い出す。

義父が死んだのはちょうど1年前。肝臓がんだった。義母は今も立ち直っていない。僕のことなんてまるで見えてないようだ。

この家は僕の帰る場所じゃない。

僕は隣の家の前を通り過ぎようとして、ふと思い出して足を止めた。

今は違う家が建ってるけど、ここに幼なじみの女の子が……。急に頭が真っ白になって立ち眩みがした。

だめだ。

激しい吐き気までしてきて、僕は冷たいアスファルトに手を置いてうずくまった。

……幼なじみの女の子？

名前は？

……名前は？

うう……ひどい頭痛だ。

あの子の名前は……アスカちゃん。

僕の彼女の名前は……椎名アスカ？

いつの間にか引越してしまった幼なじみの女の子。

その子の名字は……たしか椎名だった。

僕が付き合っていたのは……いったいだれなんだ？

椎風渚？

違う、それは修正された世界でのことだ。

（果たしてそれが事実かな？）

またあの声だ。

僕はあたりを探した。どこだ、どこにいる！

ハツとして顔を上げると、カーブミラーに人影が映っていた。

（キミはもう少し椎名アスカについて情報を整理するべきだ。

そして、妄想と現実を区別しなきゃいけない）

椎名アスカは僕の幼なじみだ。ちゃんと付き合いたしたのは

中3の2学期だから、恋人って言える関係は2年くらいになる。

（気づかないフリはやめろよ）

「うるさい黙れ」

（代わりにボクは言ってるだろうか？）

「うるさいうるさいうるさい！」

近くにあった小石を拾い上げ、カーブミラーに投げつけた。

コッソリと音を立て金属板に跳ね返された。ガラス製の鏡じゃな

いから割れないことは知っている。けれどあいつが憎くて堪ら

ない。

僕は再び小石を拾い上げカーブミラーに投げつけた。

何度も何度も跳ね返され、そのたびに投げ返した。

そして、小石は僕の目の上のあたりに跳ね返ってきた。

「いっ……っ……っ……」

切れたかもしれない。

目の上の傷を手で覆いながらカーブミラーを見上げる。

そこに映っていたのは僕の姿だ。血走った眼で顔はやつれてしまっている。

……僕はなにをやってるんだろう？

疲れが一気に体を重くして、ひざから崩れるようにして僕は地面に座りこんだ。

目をつぶる。

妄想と現実を区別しろか。

その線引きはとても難しい。主観的に考えれば、すべてが僕の感じた現実での出来事だ。

平凡な家庭で平凡に育った平凡な高校生というのは、僕が描いたウソの世界の話で、実際はあまりよい環境で育ったとはいえない。ここまではあっていると思う。

僕には幼なじみの女の子がいた。これもあっているはず。名前は……アスカちゃんであってるんだろうか？

ある日突然引越した？

このあたりから自信が持てなくなる。

だって、なら僕の付き合っていた椎名アスカは、だれだったんだってことになる。

告白したのは僕だったか、それともアスカだったか……。

脳裏にちらつく女の子の影。

その影は椎風渚だった。

僕が付き合っていたのは、はじめから椎風渚だった？

そんなバカな。

だってそもそも彼女と出会ったのはクラブ・ダブルBの事件だ。だって。

アスカはクラブ・ダブルBの事件に巻き込まれて……。

それがすべての事件の発端のハズだ。

引越した幼なじみと僕が付き合っていたアスカは別人？

それが一番無理がない解釈だ。

でも、どうして心に引っかかりを覚えるんだろう。

僕は手紙を渡された。ひとから手紙をもらうなんてはじめてだった。それが付き合う切っ掛けだった。

——センパイのこと屋上で見かけてから気になってました。

そんな書き出しだった気がする。

その日もぼーっと屋上で昼休みを過ごしていると、その子がやって来て手紙を渡してきたんだ。で、手紙を受け取るとすごい勢いで駆け出して逃げたんだ。後ろ姿を覚えてる。ツイテールの子だった。

間違いなくそれは椎風渚だ。

でも修正された記憶の世界では、屋上でいっしょに昼飯を食べて、いっしょに帰って、そんなことをしているうちに僕から告白したことになってるハズだ。

そして、そこには僕ら二人じゃなくて、いつも3人で過ごし

ていた気がする……そうだ、鳴海愛だ。

クラブ・ダブルBの事件を通して僕は椎風渚と鳴海愛に出会った。そのはずだったけど、渚に手紙を渡された記憶は、なんの記憶なんだろう？

突然、脳裏にフラッシュバックした記憶。

渚が僕に抱きついて号泣している。

——愛ちゃんが……いなく……なったの……。

こんな記憶まったく覚えてない。

僕の妄想だろうか？

まさか……。

ひらめきが戦慄となって僕の体を駆け巡った。

どうしてこの発想に今まで僕は至らなかつたんだろうか。

それはきつと僕が、弾かれたモノとして、自分だけが改変される前の世界の記憶を知っていると思いついていたからだ。

そうなんだ、すでに僕も記憶が改変されていたんだ。

、弾かれたことよって、世界とのリンクが途切れた僕は、世界がバランスを取るための改変に影響外にいる。それは、弾かれたあとの話だ。

鳴海愛。そう、彼女は僕よりも前に、弾かれて、いる。彼女が、弾かれたときに、世界は改変されたはずだ。彼女だけじゃない、僕以前に、弾かれた人々すべての影響を僕は受けているはずだ。

僕はおそらく、鳴海愛を僕が思っている以前から知っていた。薔薇の香りがした。

月夜に照らされる白い仮面。

「お帰り、春日涼」

ファントム・ローズは鳴海愛の声で静かにそう言った。

ただいまとは言えなかった。帰ってきたという実感が無い。おそらく僕はどこにしようとその感覚に苛まれるんだろう。それは僕が、弾かれたモノだからだ。

「鳴海愛に話がある」

一瞬時間が止まったのかと思った。白い仮面の主はまったく動かなかったからだ。

僕は待った。

しばらく、ひととき、一瞬ほどだったかもしれない。実際にはとても短かったかもしれないけど、僕にはその沈黙が長く感じられた。

そして、薔薇の芳香とともにファントム・ローズは羽織っていたインバネスをはためかせ、体を回転させながら背を向けたかと思うと、薔薇の花びらが僕の視界を覆い隠し、やがて風が浮き全てを吹き飛ばすと、彼女は素顔を見せた。

黒髪の少女。クールに見えるけど、僕なんかよりよっぽど胸が熱い。彼女の名前は鳴海愛。

静かな瞳で鳴海愛は僕を見つめている。仮面よりも静かだ。彼女は姿を見せた、今度は僕から切り出す番だろう。

「鳴海はいつ世界から、弾かれた？」

「君より前に」

「それはわかっている。どんなきっかけで、鳴海が世界から、弾

かれた。ことで、たとえば僕の世界にどんな変化が起きた？」

「……………」

黙った。言葉を考えているというよりは、その表情は押し黙っている感じだ。つまり言いたくなんだ。

なぜ？

「僕たちさ、同じクラスで席も隣り同士だっただろ？ それなのに渚を介して紹介されるまで、僕は鳴海のことをよく知らなかった……本当に？」

フラッシュバックした映像はなんだったのか？

号泣する渚が僕に抱きつき口にした名前。あれが改変されて僕が忘れていた出来事だったとしたら、僕は鳴海愛を知っていたことになる。

鳴海愛は黙ったままだ。こちらからいろいろ話を振れば、そのうち答えてくれるだろうか？

「僕と鳴海がはじめて出会ったのはいつ？」

「……………」

「鳴海はいつから僕のことを知ってる？」

「……………」

「ッ弾かれた。存在は、その存在があやふやで認識されづらくなるけど、僕の世界で鳴海はしっかりと僕が認識することができた。ロクに話したこともなくて、親しくもなかった関係なのに。だれの世界でも認識されやすくなるコツでもあるのか、それとも僕が鳴海愛という存在を認識しやすかった理由でもあるの？」

ファントムとしてなら、どんな世界にも介入できるだろう。

鳴海愛は僕に背を向けて歩き出した。

「少し歩こう、行きたい場所がある」

長い髪を揺らしながら颯爽と歩く後ろ姿。

僕は誘われるようにふらふらとあとをついていく。

どこに向かっているんだろう？

このあたりの町並みはよく知ってる。よく通った道だ。最近  
はあまり通らなくなったかもしれない。

ちよつと急な坂道。幼いころはもつと断崖絶壁に思えた。義  
母が自転車漕ぐ背中を思い出す。いつも自転車の後ろに乗せ  
られ、送り迎えしてもらっていた場所だ。

坂を上りきったところで鳴海愛は足を止めた。

僕の通っていた幼稚園だ。

鳴海愛は道路をなぞるように指先を大きく左から右へと移動  
させた。

「私が歩いていると、いつも男児を乗せた自転車が猛スピード  
で追い抜いて行った」

「えっ？」

もしかして、それって……？

「自転車を漕ぐ母親は必死な顔をしているのに、後ろの男児は  
涼しい……というより、子供っぽくない冷めた表情をしていた。  
それがとても気になって、気づいたらその子のことを一日中見  
るようになっていた」

「鳴海もここに通ってた？　というより、その男児って僕だ

ろ？」

そうとしか考えられない。ただ、僕にはまったく鳴海愛という存在の記憶がなかった。

鳴海愛は僕の質問には答えず、遠い目で幼稚園の正門を眺めて、話を続けていた。

「普段は冷めた表情をしている子だったが、あの女の子といるときは明るい顔をしていた。だから見てもその子のことが好きのは一目瞭然だったな」

「椎名アスカのこと？」

尋ねると鳴海愛は僕と眼を合わせて深く頷いた。

僕には幼稚園時代の鳴海愛の記憶がなかった。けど、椎名アスカは僕と鳴海愛の共有している記憶だ。

幼なじみの椎名アスカ。

中学生のときから付き合い出しのも椎名アスカ。

なら引越した記憶のある少女はだれだ？

なにかが可笑しい。

自分の記憶が変更されているなんて、それに気づくと本当に不快で歯がゆい。おそらく変更されているのに、それがどこでなにをどのようにに変更されているのかわからない。けど、心か魂かはわからないけど、どこかには記憶されてるんだろう、頭では思い出せないだけで。

「入るぞ」

いきなりだ。鳴海愛は閉ざされた正門を軽々とよじ登って飛び越えた。

ったく。

僕もあとを追おうとして正門の上にジャンプして手を伸す。縁に手を掛けて体を持ち上げようとすると腕が震えた。筋力不足だ。華奢そうな体をしてるのに、鳴海愛はどうしてあんなに簡単に上ったんだ？

どうにか正門に登り、ジャンプして地面に下りた。少し足がしびれる。

鳴海愛はすでに遠くを歩いていた。僕がついてこないってこと考えてないんだろうか？

「どこ行くの？」

小走りで追いつき彼女の横顔に話しかけた。

「着いてくれば思い出す」

わかるじゃなくて思い出すか。つまり僕がってことだよな。

見えてきたのは滑り台だ。もちろん遊んだ記憶はあるけど、なにか特別な場所だったか？

急に足を止めた鳴海愛が僕を見つめてきた。ちよつとドキッとす。

「君に……というより、椎名アスカによくちよつかいを出す子を覚えてないか？」

「アスカに？ そんなヤツいたっけ……」

男子にたまにからかわれてた気がする。僕が止めに入ると殴られた。そいつの顔はよく覚えてない。

再び歩き出した鳴海愛は滑り台を通り越し、その裏手にある壁のそばにやって来て、ある場所を指差した。

「あの子も一途で片思いが長い」  
なんの話？

僕は鳴海愛の指先を見て驚いた。

まったく覚えてなかったというもある。

けど、それ以上に、まさかここでその名前に出会うなんて思ってもみなかった。

鳴海愛と同じ幼稚園だったってだけで驚いたのに……でも、よくよく考えると鳴海愛と幼なじみだって言ってたじゃないか。壁に掘られているつたない文字——なぎち。

おそらく『ち』は『さ』の間違いだろう。

その横には僕の名前があった。

でも、これは少し記憶と違う。

僕の名前は僕が彫ったものに違いないだろう。

「僕の記憶じゃ、たしかアスカに一生ともだちでいようっておまじないって言われて掘らされた気がする」

過去の記憶では僕の名前の横にはアスカの名前が彫られていた。当時の僕はそれが相合い傘だったなんて知らなかったし、掘ったことすら今の今まで忘れていた。

でも、なんでアスカの名前が渚に変わってるんだ？

世界が改変されているのか、僕の記憶が可笑しいのか、考えると頭が痛くなる。

僕はしゃがみ込んでそのラクガキをよく見た。

なるほど、ここにアスカの名前があったのは、きっと正しい。壁に削られた痕があって、その上に『なぎち』の名前がある。

上書きされたんだ。

「こんな昔から渚も……鳴海も僕のことを知ってたってことだよね？」

「そうなるな」

言い方が人ごとっぽい。

ひとつ、まさかなと思うことがある。

「もしかしてさ、小学校とか中学も同じだったってことないよね？」

「同じ学区内だったのだから、当然だな」

「ウソだろ。ってことはさ、同じクラスになったのは、高校2年だけだよね？」

静かに鳴海愛は首を横に振った。

忘れたというのが正しいのか、記憶にないというのが正しいのか、鳴海愛という存在は影ではあるけれど、その影は異質で目立つ影だ。まったく記憶にないなんて絶対に可笑しい。

「僕は鳴海のことをまったく覚えてない。それどころか渚のことともね。渚は学年も違うからそうかもしれないけど、同じクラスになったことあるんなら、少しくらい鳴海のこと覚えてもいいだろう？ それがもしかして鳴海が世界から弾かれた影響？」

鳴海愛という存在が、弾かれたことによって起きた世界の改変。その影響を僕も受けてるってことなんだろうか？

「それもあるかもしれないが」

と鳴海は僕から視線を逸らして話を続ける。

「君はひどく心を閉ざした少年だった。椎名アスカ以外の前ではね。とくに……」

言葉を詰まらせたように感じた。

突然口を閉ざした鳴海愛。

その先はいつたいなにを言おうとしたんだろう？

「とくに？」

「歳を負うごとに酷くなっていった」

よく思い出せないけど、家庭環境のせいかもしれない。義父の歪んだ顔が脳裏にちらつく。

僕はひざを伸して立ち上がった。そのときに見えた向かいのマンシヨン。

「アスカのマンシヨンだ」

あの9階にアスカは住んでいた。そして、抜け殻が飛び下りた。

嫌な記憶だ。あれがたとえ入れ物だけだったとしても、本当に思いたくもない。

——ッ!?

可笑しい。なにかが可笑しい。急に心に引っかけりを覚えた僕は鳴海愛を見つめていた。

「僕といっしょにアスカの家に行ったよね？」

「ああ」

「そこでアスカが窓から……」

「そうだ」

僕と同じ記憶を持っているらしい。

だとしたら……。

「アスカの家ってどこにあるか知ってる？」

「……………」

黙った。鳴海愛が黙るパターンだ。明らかになにかあるとき  
の反応だ。

今僕らがしている会話は明らかに可笑しい。僕はあのマンシ  
ョンを見上げながら、アスカのマンソンだと言い、僕と鳴海愛  
でアスカのマンションに訪ねた話もしている。でも、僕はあえ  
て尋ねたんだ、その不可解な質問を。そして、鳴海愛は黙り込  
んだ。

なんだか背筋がゾツとした。

この箱は開けていいのだろうか？

なんだかわからないけど、怖ろしい気がする。

頭の中でもやもやしているものの正体だ。

「幼稚園のとき、僕がよく遊んでた女の子ってアスカなんだよ  
ね？」

「そうだ」

「ならさ、その子の家って……どこ？」

僕の記憶が正しければ。

もうひとつ、鳴海愛にも確かめて聞きたいことがある。

「僕が仲良くしてた女の子だと思うんだけど、引越した子が  
いると思うんだけど、だれかわかる？」

「記憶にないな」

「たとえば、こうなら辻褃が合うんだけど、アスカって僕んち

の隣から、そのマンションに引越した？」

「……………」

黙った。その沈黙が酷く怖ろしい。鳴海愛はなにを知っている、どうして黙るのだろうか？

僕もなにをいっていいのかわからず口を閉ざす。

僕らの間に流れる沈黙の風。

僕や鳴海愛と同じ幼稚園に通っていた椎名アスカ。

クラブ・ダブルの事件に巻き込まれ、抜け殻があこのマンションから飛び降りてしまった椎名アスカ。

アスカの家は二つある。

どうやら、そこがなにか可笑しいらしい。

そして、鳴海愛が重たそうな唇を静かに開いた。

「君の世界は、私が知っている世界から見ても異様だった」

「……………」

つばを呑み込んでから尋ねた。

「私は、弾かれたことで、世界がひとりひとりに個々に与えられているもので、それらの世界は人それぞれに異なっていることを知った。だが、異なるといっても互いの世界が干渉しないわけではない。すべての世界はリンクしつつも、独自の世界を築き上げているんだ」

「だからつまりなにが言いたい？」

「世界のリンクは相互リンクで成り立っている。君の世界はそれがとても希薄で、ある種の世界全体での共通認識を拒んでいた」

「だから、なに？」

だんだんと僕は自分が苛立っているのがわかった。

「これを私の口から話していいのかわからない。おそらくそれは君の望まないことだ」

「それを聞く覚悟が僕にあるかって言いたげだね。でも、聞かなきゃ判断できないよ。なんだかわからないけど、頭がもやもやするんだ。この原因がそこにあるんだろう？」

「聞きたいか？」

ゾツとするような寒々しい口ぶりだった。

どんな言葉が待ち受けているか、それはまったく想像もできなかったけど、僕はこのイライラする感情が爆発しそうで、それをぶつけてしまった。

「聞きたいね、もったいぶらずに早く言えよ！」

鳴海愛はもったいぶるような言い方をよくする。でも今はどうしてこんなにも苛立ちを覚えるんだろう。きつと……僕は何かを本能的に怖れているんだ。でも、もう後戻りはできない。

鳴海愛は静かに言い放つ。

「椎名アスカが存在していたのは君の世界だけだ」

「……んっ!？」

なにを言ってるんだ？

わけがわからない。

「アスカが存在したのは僕の世界だけ？ 鳴海も同じ幼稚園だったんだから、ずっとアスカといっしょだろ？ 僕と鳴海では世界は違えど、同じ椎名アスカって記憶を共有して、おそら

くその辺りは相互リンクが成り立ってたってことだろ？」

「たしかに、幼いころの椎名アスカは私も知っている」

なぜか僕は背筋が冷たくなってひざが震えて立てなくなった。

鳴海愛は僕に止めを刺す。

「私は高校生になった椎名アスカを君の世界ではじめて見た」

「あああああああああつ！」

僕は叫んだ。わけもわからず叫んだ。

鳴海愛はいつたいなにを言ってるんだ？

わけがわからない。

僕は鳴海愛の言葉を理解したわけじゃない。けど、なぜか叫

び声が自然と出たんだ。

いつの間にか土を鷲掴みにして、大量の汗がポトポトと落ち

ていた。

なにが……どうした？

「あああああああああああつ！」

僕はわけもわからず鳴海愛に掴みかかり押し倒した。

背中を強打しただろうに、彼女はなんの抵抗もせず、顔色一

つ変えず、ただ僕の瞳を静かに見据えていた。その瞳に映る人

影。

（真実はもうすぐそこだよ）

またヤツだ。

（そろそろ妄想と現実を区別はできたかい？）

妄想と現実？

「ダマレエエエエエエッ！」

鳴海愛の表情が変わった。青ざめていく。

僕はハツとして馬乗りになっていた鳴海愛から飛び退いた。  
手に残る感触。

首を押さえ咳き込みながら立ち上がる鳴海愛。

そんな……僕は……。

「違うんだ……そんなつもりは……」

僕の声はひどく震えていた。

鳴海愛の首筋に絞められた痕が赤黒く残っていた。

「違うんだ、違うんだ……ううっ……違うんだ……僕はただ……」

頭を抱えてうずくまった。

吐き気がする。

ずっと頭を振られてる気分だ。

ここは悪夢か？

情報と記憶の整理ができない。

鳴海愛はなんて言ったんだったか？

ダメだ、吐き気がひどすぎて考えられない。

「もう一度……言ってくれないか……アスカが……僕の世界で……だって？」

首を絞めたヤツの言うことを、鳴海愛は身構えることもせず  
凜と立ち答えてくれた。

「高校生になった椎名アスカを君の世界ではじめて見た」

「あああああああああつ、くそおおおつ、なんんあんだあ

ああ、この……わからないああい！」

叫び声が自然と吐き出される。ろれつも回らず、頭痛で頭が割れそうだ。

ひざを地面に付きながら、片手で頭を抱えて睨むように鳴海愛に顔を向けた。

「鳴海の世界には……高校生のアスカはいなかったってこと？」

「……そうだ」

「可笑しいじゃないかそんなの……どうして、僕の世界にはちやんといるのに……どうして……」

「それは……わからない」

鳴海愛は顔を伏せた。

「僕の世界にだけいるなんて……そんなこと……」

鳴海愛やほかの世界から認識されなくなる可能性は、弾かれた場合だ。そして、ひとつの世界にだけ存在した理由は、弾かれたモノがその世界に入り込んでいる場合。

「もしかしてアスカは、弾かれたモノだった？ 自分の世界を失って僕の世界にずっと住んでいたってこと？」

「稀に自分が、弾かれたことに気づかず、そのまま他人の世界で居続ける者もいるらしい」

「アスカがそうだったってこと？」

「それはわからない」

アスカが、弾かれたモノだとして、いつ、弾かれたんだろう。

僕の記憶ではずっとアスカが存在している。少し引っかかる

のは、引っ越しをした少女だ。

この辺りの記憶が思い出せないけど、たぶん僕の世界ではアスカが引っ越しをして、そのマンションに越したんだろう。

何か可笑しい。

なんだろう、この引っかかりは？

背筋がゾツとする。

なんなんだろう、この感覚は？

「アスカは、弾かれたモノ」だったんだよね？」

「それはわからない」

同じ答えが返ってきた。

可笑しいぞ、可笑しいぞ、絶対に可笑しい！

「高校生のアスカをはじめて見たってことは、その間が抜けてるってことだけど、幼稚園のときのアスカは知ってるんだよね？」

「ああ、君とよく遊んでいた」

「それって可笑しいじゃないか、弾かれたモノ」なら、その記憶すらも消えてしまっているハズなのに、どうして覚えてるの？」

記憶を改変されないのは、弾かれたモノ」だけだ。まさか鳴海愛は幼稚園児のときにはすでに弾かれていたことなんてことはないと思う。弾かれたモノ」なら、僕の世界に居座っていたことになるし、そうなると渚との関係が可笑しくなる。鳴海愛と渚はそこまで親しい関係にもならず、ホストの渚は鳴海愛の存在を忘れてるハズだ。

鳴海愛は黙ってなにも答えない。

さらに僕は質問を投げかける。

「ならば、鳴海の知ってるアスカは幼稚園のあとどうなったの？ 高校生のアスカをはじめて見たっていうからには、どこかでアスカが消えてるんだよね？」

「私の世界の君がさらに心を閉ざしはじめたころだ。おそらく本体の君も、同じように心を閉ざしていたんだろう」

心臓が激しく脈打つ。

鳴海愛の語る僕は僕であって僕でない。それはおそらく鳴海愛の世界での僕のことだ。

心を閉ざしていた僕？

僕は他人にそう思われていたのだろうか？

他人の世界の僕は、本体である僕の影響下にあり、そこにその世界の主人公のフィルターがかかる。そう思えば、そう見えるというのが、一世界から見た他世界の主人公だ。

好きなひとのことは、盲目的に好きな部分しか見えない。嫌いなやつのはことは、嫌いな部分しか見えてこない。それがフィルターだ。

鳴海愛はどうして僕が心を閉ざしていたように見えたのか？

それは鳴海愛自身の心持ちだったんじゃないだろうか？

だって、僕は心を閉ざしていたなんてことはない。

幼いころの記憶。

目をつぶればアスカの笑顔が見えてくる。僕もいつだって笑顔だった。

僕らはいつもいっしょだった。

(――あの日まで)

だれかの声が頭に響き、僕の目の前に現われた黒い人影。やつは自らの顔を剥ぐように、その素顔を晒した。

「あああああああああああああああつ！！」

そして、世界が反転した。

アスカが笑った。

「わたしと涼ちゃんは恋人同士なの。あなたがそれを取ろうとした」

そう言っつてアスカは僕と腕を組んで……僕と唇を重ねた。渚の瞳から涙が零れた。

「ウンだよね……だつてあたし……知らない……」

世界がぼやけていく。

目が回る。

頭が割れそうだ。

ファントム・ミラーが僕の体から飛び退いた。

ローズウィップが床を叩く。

世界を包む薔薇の香り。

ミラーは辺りを見回し呟く。

「……ハザマ？」

壁や窓やドア、足下や天井まで張り巡らされた茨。

〈ミラーズ〉は消失した。この世界で自我の無いモノは生きられない。

ここはハザマの世界。

個々の世界においては、自分自身と他人からの自分に対する認識から、自分というものが存在できる。けれどこの世界で重要なのは、自分自身の強い認識だ。

鏡面の顔になったミラーに映る僕の顔。

(もう少して思い出せるかな?)

ヤツは言った。

あのとき僕になにが起きた?

そうだ、これは過去の記憶だ。

それとも歪められた記憶だろうか?

「いやあああああつ!」

少女の叫び声。

それを発した渚の体が燃え上がる。業火は具現化させた想いだ。この炎は本物じゃない。けれど、この世界なら本物となる。

飛び散った火の粉が部屋を燃やす。

「落ちて渚!」

鳴海愛の声でファントム・ローズは叫んだ。その声は渚に届いただろうか。しっかりと鳴海愛の声で。

駄目だろう。今の渚にはなにも見えてない。

そして、このとき僕はどうしていたのか?

頭が気持ち悪い。

吐きそうだ。

(ほら、もう少した)

真っ白な世界が赤く塗りつぶされる。

たしか……そう……炎を見た僕は……

「あああああああああああああああつ!」

発狂した。

揺れる炎の先で僕を見つめるひとりの少女。

廻る廻る世界。

「ねえ××ちゃん？」

だれかが呼んでいる。

「ねえってば、今日はなにしておそぶ？」

眼を開けると幼いころのアスカがいた。

「これみて、あいつ今ごろこまってるはずだよ」

彼は小さな手を開き、それをアスカに見せたんだ。

潰れた煙草の箱と100円ライター。

酒癖も悪かったけど、ヘビースモーカーなのも嫌いだった。

だから彼は盗んだんだ。困らせてやろうと思って。

「あぶないよ××ちゃん。ライターは大人しかつかっちゃだめ

なんだよ。お母さんがいってたもん」

「べつにあぶなくなかないよ、ほら」

彼はライターの火をつけたり消したりして、自慢げに笑って

いた。

「あぶないよ××ちゃん」

「だいじよぶだつて」

「やめて、もお！」

「だいじよぶ……あつうッ！」

手を伸してきたアスカを避けようとしたときに、彼は指を火

傷してしまったんだ。

そして、ライターが転がった先にはティッシュ箱があった。

燃えるのはあつという間だった。

彼はなにもできず啞然として、アスカは火を消そうと必死だった。

けれど、火の手はアスカの服に引火したんだ。

叫び声が僕の耳にこびりついて離れない。

僕はただ見ていた。

肉が焼ける異臭。

その臭いを今でも鮮明に思い出す。

巡る巡る世界。

僕は逃げたんだ。

なにもかもからね。

この閉ざされた闇の世界に閉じこもっていたい。

そして、なにもかも忘れてしまいたい。

(けどキミは思い出してしまった)

奴の声だ。

僕は閉ざされた世界で彼と会話し続けていた。彼だけがここでの唯一の話し相手だ。そして、僕はもう気づいていた。

——ファントム・ナイトがだれなのか？

失われた世界。

失われた過去。

失われた……アスカ。

真実は残酷だった。

おそらく鳴海愛は知っていたんだろう。

僕は目的を失った。

これは覚めない悪夢だ。

認めたくはなかった。だから僕は僕と僕の世界で嘘で固めてしまったんだろう。

事実は……そう、椎名アスカは……死んでいた。

とつくの昔に。

夢幻に広がる世界なら、ひとつくらい僕の理想の世界があってもいい。

しかし、椎名アスカが死ぬというのは真世界の正史。

それが抗えない正史であるのなら、僕には絶望しかない。

本当にそうだろうか？

僕は平凡な高校生で、同い年の彼女がいた。

たしかにアスカは存在していた。

世界の価値とはなにか？

僕は問う。

そして、決めた。

「手を貸してくれ、ファントム・ナイト」

（ボクは僕なのだから、わざわざ手を貸せだなんて可笑しな話だよ）

その通りだ。

ファントム・ナイトは僕自身だ。

そして、もうひとりの僕はファントム——。

闇の中から這い出した僕を出迎えたのは渚だった。

「涼！ ……違う、だれ……なの？」

どのくらい闇の中に閉じ込められていたのかわからない。  
いや、自ら引きこもっていたというのが正しい。

おそらく渚が僕をあつめた闇の世界から引き出したのだろう。

しかし、僕は彼女の期待を裏切ったようだ。

渚の横にいる影山彪斗がつぶやく。

「その姿……新たなファントムか？」

どうやらそうらしい。

たしか名前は……？

「ファントム・メア」

自然と口から出て名乗っていた。

ここはどこか？

状況の把握でもしょうか。

野原だ。

住宅街の空き地。資材が野ざらしになっているところを見ると、なんらかの理由で工事が中止になっているらしいな。

横にある家は……うちか。

つまりここは……。

「ククククッ、ふふふ……なにもかも燃えてしまった」

なにもかも僕の夢幻だった。

どこまでが現実で、どこまでが幻実か。

僕の物語は僕によって語られる。

しかし、そのすべてが真実だとは限らない。

僕の目の前には渚と影山彪斗がいる。けれど、それもまた僕の夢幻かもしれない。

語り部は僕。

「この世界にはアスカがいない。けれど、ボクの世界なら、何度でもアスカは蘇る」

「涼にはあたしがいる！」

「でもキミはアスカじゃない」

そう言った僕に向ける渚の悲しそうな顔。

いつも渚は僕の後ろ姿を眺めていた。今でも君は僕の背中を追うことしかできない。僕にはアスカしかいない。

僕は影山彪斗を見る。渚と行動を共にしているらしい。

「キミの目的は？」

ファントム以上に謎の多い人物だ。

「ナギサに頼まれて君を助ける手助けをしてる」

彼は、弾かれたモノのコミュニティをつくっている。僕も誘われた。けれど本当のところは、なにが目的なのか？

「本当の目的は？」

「本当の目的？」

彼はオウム返しをしてきた。まるで本当にわからないと言いたげだけど、ファントムになった僕はある種の臭いを嗅ぎ分けることができるようになった。

「ファントムがなぜ生まれるのか。ファントムは地縛霊のようなものだよ。特別な因果関係を有して、弾かれてもなお、世界に関わりを持つとする。つまりね、ファントムは個々に目

的を持つてるんだ」

僕の話聞くうちに影山彪斗の表情が陰しくなっていた。彼は口を硬く結んだ。なら、こちらから口を開かなきゃいけない。

「君もファントムだろう？」

とくに驚くことでもない。

「半分アタリで、半分ハズレ。生まれたときからファントム。ひとの手によってつくられたファントムなんだ」

人造のファントム？

そこに立つ彼の姿は影だった。横にいる渚が驚いて後退った。ヒトのシルエットに白い仮面。

「目的はと尋ねたね。究極的には存在の維持。そのために必要なのが自分の住む世界。記憶が曖昧ですまないけど、たしか、弾かれたモノが住むために創られた疑似世界の話はしたかな？」

どこまでが夢か現実か、その境は難しいけれど、彼がその話をした気であるなら、きつとしているんだろう。

「それで？」

と僕は話を促す。

「疑似世界のメンテナンスをできる者がいなくてね。疑似世界を創った偉大な魔導士はとうの昔に死んでいるし、このままだとあの世界は崩壊してしまう。弾かれたモノの多くが住む世界を失って消えてしまうだろう」

なるほど、すぐに理解できた。

「けれど、ファントムとしての僕の力が役立つかはわからないよ」

彼は僕が必要なんだ。

「話の呑み込みが早くて助かるよ。記憶障害のせいで説明が苦手だね。君が持つ世界を創造する力で疑似世界のメンテナンスをして欲しい」

僕は自分の能力に気づいている。

世界は想いによって創られる。多くの人々の想いが集まり世界を創ることができる。ひとりの想いだけでは世界という大きな存在を維持することはできない。世界を創る能力はだれにも当たられた能力なんだ。

けれど、通常それには素材というべきか、土台というべきか、それともツールというべきか、個々に与えられた世界を元にして、その世界に主人公がカスタマイズしていく。だから正確には創る能力ではなく、カスタマイズする能力と言ったほうがいいかもしれない。

僕の能力はそれを発展させた感じなのだろう。

ただし問題は……。

「ボクの創れる世界は悪夢かもしれないよ？」

この世界にアスカはいない。

僕の世界にはアスカがいる。

けれど、何度やって、何度繰り返し返して、何度何度何度も、話を書き換えているのに、アスカはいなくなる。

僕の世界よりも、世界の正史のほうが強い。

「引きこもっていたボクを外の世界に出してくれてありがとう」

僕は渚に頭を下げた。

自分の世界に閉じこもるのはもうやめにしよう。やるべきことが見つかった。

世界たちの中心にあると仮定される真世界そのものを改変する。

もしくは僕の世界がすべての世界を呑み込む。

今、僕の世界は僕の心の中だけに存在する。

世界を喰らう。

1つずつ世界を喰らっていくうちに、真世界にそのうち行き着くだろう。

「残念だけど協力できない」

そう僕が答えることも予測されていたのだろう。すぐに敵意が返ってきた。

「世界を創れるものは、世界の脅威でもある」

影山彪斗のシルエットが僕に襲い掛かってきた。

だれかが叫ぶ。

「やめて！」

渚だ。

渚は無力だ。見ていることしかできない。いつも僕を見ているだけだ。

…：薔薇の香り？

またか。

僕と影山彪斗の間の地面を薔薇の鞭が大きく跳ねた。動きを止める影山彪斗。僕はその鞭の先を見た。

——鳴海愛。

今日はローズじゃないのか。

「涼！」

叫んだのは渚だ。

僕はファントム・メアではなく春日涼だった。

お互いの想いが結びつき、ファントムではなく本当の姿を維持することが自然にできるのだろう。

椎風渚、鳴海愛、そして僕。今この場で3人が世界を創り出し共有している。

巨大な薔薇の花びらが渚の全身を覆い隠す。

「なにをするの愛ちゃん!」

ローズの白い仮面はなにも答えなかった。

渚は薔薇の花びらと共にこの世界から、弾かれたのだ。

残されたローズの顔は白い仮面となり、おそらく僕も同じようになっているハズだ。

ファントムが3人か。

影山彪斗がローズに顔を向ける。

「君がウワサの薔薇か。君と敵対したつもりはないが、なぜ春日涼を助けるようなマネをしたんだい？」

「……………」

ローズは影山彪斗を見向きもせず僕に襲い掛かってきた。いつから僕らは敵になってしまったんだろう？

僕の足下から噴きだした闇がローズの目を晦ます。はずだったけど、薔薇の鞭は闇を突き抜け僕に向かってきた。

茨は僕の心臓を貫いた。

血は出ない。

なぜなら僕の胸は空洞だったからだ。

しかし、薔薇の棘は痛みを伴う。

「泣いているのファントム・ローズ？」

僕は白い仮面に尋ねた。

相手は無機質な仮面で表情なんてなかった。

「私はあの日、君が煙の出る椎名アスカの家から駆け出てくるのを見ていた。しかし、私はだれにもなにも言わなかった。本当はどうすればよかったのだろうか？」

「さあね、それは君の世界の話だからボクには関係ない」

二人で話していると影山彪斗が僕に仕掛けようとしているのが視界の端に映った。

僕は手を出さなかった。

地面を這う茨が影山彪斗の足首に巻き付き、そのまま投げられるようにして、この世界から、弾き、飛ばした。強制退場だ。ローズも涼しい顔してなかなかやる。

僕の体から這い出した闇が鞭のようになりローズを襲う。対抗して薔薇の鞭が飛んできた。

薔薇の匂いが立ち籠める。

どうして僕らは戦っているのだろうか？

敵対する理由なんてなかったはずなのに……。

気づいたら僕らは学校の屋上にいた。  
空が近い。

よく僕はこの場所で時間を潰していた。空ばかり眺めて。  
ハッとするように僕は思い出した。なぜ今まで忘れていたんだらう。

「ここが僕らの共通の場所か」

この場所には僕以外の常連がいた。長い黒髪の少女。彼女は壁際の小陰でよく読書をしていた。

「私は君を救えなかった」

鳴海愛が言った。

「なにから？」

尋ねた瞬間に吐き気がした。またこれだ。僕が僕自身に口ツクをかけている。

事実。

僕は平凡な家庭で生まれ育ってなんかいない。

両親は自殺。

義父に暴力を振るわれることで、僕は心を閉ざす方法を知った。

唯一僕が心を開いていたのは幼なじみの椎名アスカ。

そのアスカを……焼き殺したのは僕だ。

それからの僕の物語は嘘で塗り固められた。

鳴海愛は黙っている。

「……………」

「鳴海は僕が自ら封印した僕の記憶を知ってるんだらう？」

「君はこの場所で空ばかりを眺めていた」

「いつか空を飛べるんじゃないかってね」

そして、あの日……僕は空を飛んだ。

こうやって両手を広げ、フェンスの上から風に身を任せ。

空が真っ赤に燃えている。

風に吹かれる少女の髪。

僕が最後に見たのは彼女だったのか。

手を伸ばされたけど、つかむ気なんてまったく起こらなかった。

空が高くなっていく。

急な衝撃に僕の体が見舞われた。

空中で宙吊りにされた僕の体。

「なんで助けたの？」

僕の体に巻き付く茨。その茎からは棘が生え、僕の体に深く

突き刺さっていた。

「あるとき助けられなかったから」

「ここで助けても過去は変わらないよ」

「そうだな……」

空から落ちてきた涙が僕の頬に当たった。

フェンスから身を乗り出す鳴海愛の手は茨を力強く握り締め、

そこから血が滴っていた。

助からなかった僕はどうなったのだろうか？

「僕の本体はどこにある？」

「今も病院で寝ている。ずっと目を覚まさない」

「なるほどね」

全部夢幻か。

僕の体から噴きだした闇が茨を侵蝕して、僕は鳴海愛の手から解放された。

空がどんどん高くなっていく。

「あああああああああああああああああああつー！」

叫びながら僕を目を覚ました。

白い天井。

腕に刺さる針。

点滴。

起き上がろうとしたけど体が思うように動かない。

それでもベッドを這い下りて、窓を開けてよじ登った。

「こんな世界滅びればいい」

迫ってくる地面。

鈍い音を最後に世界は暗転する。

そして、闇の中で目覚める。

なんだ……また悪夢か。

どこまでが現実なのか区別がつかない。

それを考えることも、この闇の中では意味のあることなのか、難しい問題だ。

リセットを繰り返し返しながら語られる物語。

語り部は僕。

あれは何度目の悪夢だったのか？

この闇には夢幻の可能性がある。想像すれば見えてくるビジョン。僕はまた世界を創造する。

平凡な家庭で育ち、平凡な高校生として、理想の彼女がいる  
幸せな世界。